

問此一巻は卒業迄御寛貸被成下度候昨日申上候賦も大半成就仕候但地名の一段に至り纒の所に心思を勞し候影蟲篆刻丈夫は成さずと申格言に當り慚愧の義御一咲可被成下候此段草々申上候以上

七日

尙存付候ま、申上候本朝文粹菅家文章朝野群載等の書御文庫に御座候はゞ一寸御惠借奉願候本朝此頃の賦は皆唐賦の劣體にて某が學び候古賦とは大なる相違に御座候乍然本朝厘々の文章に一句兩句雷同有之候ては遺憾に候故一寸検査仕度奉存候

正誼老大人 執事

大星再拜

萬延元年閏三月十六日

〔四五五〕 立田樂水に贈る

霖雨中殊に冷氣を覺候へども貴體如何被成御座候哉過日不日に御彈冠も可有御座様仰も被下候が御出勤御座候御事歟取紛れ其後拜候をも不申簡慢之罪所遣無御座候然者本朝文粹朝野群載菅家文章の類御所藏御座候はゞ賦の卷暫時

世に象山の二賦と稱せらるゝものあり望岳賦と櫻賦とこれなり

御惠借奉願候近日別紙櫻賦を草稿候處自然本朝人に雷同之句にても有之候はば遺憾に付一寸見合せ度存じ候迄に御座候別紙御慰に供電囑候二十年前望岳賦を作り候所一齋先生より豪放富瞻有力量古今人望岳諸作の冠と申評を得申候當年に及び櫻を賦し候處品柄に應じ織巧を用ひ候事を免かれず望岳賦に比し候へば却て二十年もわかき様相見え自咲候事に御座候乍然此賦徒作に無之寓意之處天下後世必らず知るもの御座候はんと存候本邦には古賦の作者一人も無之文粹などに出候は皆唐賦の體に御座候近來一齋先生稍古賦の味を被辨候先生被歿候ては當今伯樂無之嘆息の事に御座候先は拜借物相願迄草々申上候以上

十六日

大星拜

靜山先生 臺下

〔四五六〕 恩田賴母に贈る

霖雨は歇候へども鬱陶敷天氣に御座候愈御碍も不被爲入候歟奉伺候然ば過日

書簡 四五六

九七九

萬延元年閏三月十七日

拜借仕候春郷の集一讀雨中の岑寂を消し難有奉存候則返上仕候御收可被成下候借又此間呈覽仕候櫻賦數字相改是にて調ひ候と存じ候まゝ尙又入御覽候過日のは御擲還被成下度奉願候將密に奉懇願度一事御座候群書類從多分此節も御拜借に相成居候と奉存候右之内經國集江東部集等御座候と奉存候右に賦少少御座候様覺候夫等一應檢査置き度官本の義に付奉願乞候も恐入候へども外に類本も無御座候故不得已事奉冀候御原鑒之上宜しく御進止可被成下候頓首

閏月十七日

大 星拜

正誼老大人 執事

〔四五七〕 八田慎藏に贈る

萬延元年閏三月十八日

先夕は御責臨被下緩々得拜話致大慶候但美事の海鮮預御投惠是のみ悚惕少からず奉存候爾來長霖漸く開霽には相成候へども兎角冷氣に御座候何之御障も無御座候歟令弟其後の御様子何似是又承度候然ば櫻賦尙少々改竄候て世間へも見せられ候様相成候依て此改め候方を上げ候間過日御持歸りの稿本と御引

替被下度候先夕之御禮旁如此に御座候以上

十八日

大 星拜

澹庵賢友

〔四五八〕 恩田頼母に贈る

萬延元年閏三月十九日

今朝は態々御誨答御持せ被成下難有奉拜見候先以倍御萬福被爲渡喜慰の至奉存候然ば櫻賦初入御覺候草稿御投還被成下後に差上候へ傍點を施し候て差上候様蒙仰容易の義序にざつと傍注を加へ奉汗電囑候賦も體と法とを辨へ候へば譯もなきものに候へども本邦の儒者何故か古來より賦の事不案内に御座候皇朝の搢紳には中古被作候も往々有之候へども達意の文章だにも疵瑕無之は至て稀なる程の學力に候故文粹などに出居候も皆陋劣にて作家の前へ出され不申近世に相成徂徠などの文家にては賦には致降參候て文集中に一首も無之太宰に鎌倉の賦一首御座候所拙弱讀むに堪へず候龜井昱太郎東征賦を作り候所太宰にも及び不申獨り一齋先生に至て律賦をよく作られ候乍去古賦は甚難

んしられ候て文集にも僅か二篇有之候のみ其二篇も小生などより見候ては面
 體多く生硬にて漢土の名家に比すべくも無御座候小生は年少より好んで古賦
 を作り候所文は文詩は詩賦は賦の味有之候て志を抒へ情を通じ候に文詩には
 盡しかね候を賦に於て妙に申取候事の出来候か有之不可棄者に御座候將豚犬
 の細書御過獎を得恐入奉存候甚の懶惰ものにて随分世話をやき候へども存じ
 候様何事も進み不申當惑仕居候義に御座候四五歳の頃には記憶も餘程宜しき
 様被存悦び罷在候處追々年を拾ひ候に従ひ記憶あしく罷成讀書も手習も殊の
 外嫌にて只今の分にてはゆく／＼何にも成り申まじくと氣遣候義に御座候小
 生などは少年の節良師を得ず候故何事も獨學固陋にて惜しき歲月を空しく過
 了候に懲り候に付何事も邪路傍徑を避け候て正道を導き早くものに成り候様
 にと存じ候へども其材に無之候ては届かぬ事と被存候小山田令孫君御書も美
 事に細楷よく御出来被成候様傳聞仕候何か御認の片紙にても御座右に御座候
 はゞ豚犬の勵にも相成候義に付一葉御惠賜被成下度奉希候詩の義も御尋ね被
 成下候所陸に出来不申けく柔介忤の方よく出来候様に御座候偕又奉願候類從

の義當時御手許に無御座候所御懇情を以て密に御手数被成下候はんとの御事
 不勝萬謝奉存候甚恐入候義に御座候へども外手にて參らず候義に就き何分と
 も奉願候とても御手数被成下候御事に御座候へば近頃望蜀の至に御座候へど
 も度々奉勞候は尙以恐入候義に付文筆の部十六卷残らず拜見仕度奉願候外に
 消息部の内尺素往來西行消息定家卿消息書札作法の四部罷成候御義に御座候
 はゞ一同御手段被成下候様偏に奉乞願候何分も所奉仰御座候先は今朝の御請
 右拜願迄申上候四五日を経候て尙御様子可奉伺候頓首

十九日

大星再拜

正誼館老人 執事

〔四五九〕 望月主水に贈る

萬延元年閏三月廿日

又陰雨に御座候愈御萬福被爲入候御事歎奉伺候然ば蒙命候陽明集詩の部下の
 方點出来仕候間奉差上候上の方少々御猶豫可被成下候上下とも再三讀候所い
 づれに致し候ても上卷に宜しき詩多く御座候下卷には龍潭夜座の一首壓卷に

て其餘は皆是に及ばず候さすがの大才にても軍務等に役せられ候ては詩の鍛鍊迄は無事の時の如くには行届きかね候ものと被存候下巻にも一兩句の警策は毎々有之候へども無瑕璧なるが少く御座候古今體五七言を併せて百十七首點仕候將人造磁も手を入れ差上候百三十目位優に保ち申候御落手可被成下候偕又一事奉煩度義御座候本朝文粹菅家文章桐山先生御藏本に有之候ひしよし右二書何分御手を以て御借り出し内々御轉貸被成下度奉懇候尤も二書とも全部には無之いづれも賦の卷のみにて宜しく御座候何分も奉願候平日に御座候へば觀水殿迄恪二郎より願はせ候て宜しく候所舊臘以來混雜の中平素疎遠に罷在候て右様の事申出候もいかゞに付奉願候に御座候御允諾も被成下候はゞ感銘之至可奉存候頓首

廿日

大星頓首

致堂老大人 執事

萬延元年閏三月廿三日

〔四六〇〕 恩田頼母に贈る

御惠墨難有奉拜見候續て時ならざる冷氣御座候處倍御輕安被爲涉慰沃之劇奉存候偕は奉願候類從兩部合せて廿八本密に御惠示被成下萬々難有銘感不已奉存候間居中未だ讀ざるの書を讀候より樂しき事無御座候御庇蔭にて寛く大歡喜を仕候義にて御禮申上盡し難く奉存候能く御浴沂之御催被爲在候是迄は氣候も兎角不順に有之候所追々は時氣も引直り可申候左候はゞ此節程の好時節無之御詠歸の御興致想像健美之至奉存候就て三村の溫泉試驗の窮理申上候様蒙仰奉畏候三徳の考高乍憚面白く奉存候先年西洋試薬を以て一々検査仕候所三村いつれの泉も皆硫酸と稱し候硫酸の酸其根基に御座候硝石の氣は聊か無御座候澁大湯は右の硫酸と銕とにて即綠礬泉に御座候夫故に人の皮膚を收斂し強壯にするの效有之候一本瀧は硫酸に灰汁鹽の和にて大湯と反し解凝之效御座候忠右衛門寅藏か内湯は一本瀧と同性にして水分ちと多く候ひし田中の大湯もやはり澁の一本瀧同種にて其力稍強く但硫酸分を其儘に含み候所少異に御座候夫故に解凝之效に兼て皮膚病に宜しく候五郎治の内湯も同性に御座候安臺も力劣り候ばかり先同様と可申候角間かまは少々違ひ申候乍去基礎の硫酸

田中、澁、安臺、角間、何れも温泉の地名なり

は同様にて曹達と唱へ候海鹽の半分を含み申候海鹽は水素酸と申者と其性芒硝に御座候座芒硝と硝石は全くと申すものと灰汁鹽の和物に御座候也依て其性清涼にて腹部の多血より生ずる諸病肝病の僻あるもの眩暈等に宜しく御座候是其大略に御座候明礬の事申落し候故爰にたし申候明礬は硫酸と粘土と灰汁鹽の分少く候時は明礬に近くして其味酸く灰汁鹽の分多くして粘土分少く候時は其性霸王鹽と申すものに近くして明礬の味と大に相違致し候不思議なるものに候は倍又過日豚犬寫し候名物蒙求其儘御留被爲置候様申上候所右の御挨拶とて文房三種御惠賜被成下何共奉恐入候御事奉存候早速豚犬へ相附し候處雀躍仕永く秘玩可仕とて此上なく難有奉存候様子宜しく御請申上度申出候書畫帳の御料一枚何か認め候様敬諾仕候伸之助様よく御取立御座候御幼年より箇様の御玩物至極可然御事奉存候右拜答迄早々申上候近日の御行樂何かと御多忙に可被爲在候幾日ばかりの御入浴に御座候歎御風詠も其御間には多々可被成御座候御歸館の上御惠示只今より奉願置候以上

念三日

附白過日御到來の別條をも御示し被成下候様御紙上に御座候所御箱の内見

え不申自然其御方にて御取落には無御座候哉爲念申上候以上
 正誼老大人 執事
 大星 拜復

〔四六二〕望月主水に贈る

萬延元年四月五日

幾太は高田幾太なり

夜前の出火御騒可被遊候幾太老境に及び候ての災難別して氣の毒なる事に御座候以上

過日は御惠訪被成下且御魚價等拜戴銘感之劇不知所謝奉存候其後も御投簡被成下候所御即答も不申上恐入候義に御座候忽又御惠墨拜接先以此陰雨中倍御萬福被成御座沃慰之至奉存候御別番御草稿拜見仕候所是迄よりは乍憚御面目相改り候様奉存珍重此上無御座候御問へは仰に任せ拜答認入候硬黄番の一方をも申上候餘方も尙見出し次第可申上候儘か佩文齋書畫譜の内に有之候かも存候所此書は拙藏に無御座候此節源大夫は所持かと被存候將密に申上候砲場の術策少々存付も御座候間先暫く隱密に仕度能機會を以て尙可申上候先は拜答迄草略頓首

源大夫は山寺常山

五日

致堂大人 執事

大星拜復

九八八

萬延元年四月廿五日

〔四六三〕 側醫に贈る

若様の文聰公の長子雄若なり廿四日二歳にて卒す

若様御容體に付御手充申上方壹岐殿より兩君を以て御尋ね御座候に就き是迄の御手順委細拜聞之上認め取り御渡し申候愚管之御手充御同僚御打合にて御施しに相成少しく被爲開候御容子にも被爲有候哉否伺度御容體委曲拜承之後は殊に心痛夜中も眠り候事能はず色々苦思候處今曉に至り存付候御直視御眼睛の御轉動御宜しからず等の御症御腦神經より出て候御事勿論の義に候處昨日御病因の義に付既に兩君御申出も御座候通り粘液御鬱蓄等より來り候場も有之候粘液御座候柄には虻蟲も生し易く虻蟲有之候時は直視上竄精神昏憤等の症を發し候事毎々有之候事に候(是皆虻の刺衝にて腦神經感觸の故也)就てはセメンシーナ五分大黃三分細末として蜜を以てねり少しづつ御乳汁を以て差上見度ものと奉存候十三四才迄位の子供の直視昏憤等此方にて虻を驅り恢復の例も有之候間

勿々如此に御座候尤もセメンシーナも刺戟性に有之候へば御用ひ以前御耳後の水蛭は是非共差上度ものと奉存候此段宜しく御評議可有之候以上
四月廿五日曉 佐久間恪二郎

若様御藥の義に付

島田 全隆 様

倉田 左高 様

(別紙)

島田倉田兩氏御殿に不被居合候はゞ御留りの御方にて御披見可然奉願候以上

四月廿五日曉

佐久間恪二郎

御留り御當番

御側醫 中様

〔四六三〕 恩田頼母に贈る

萬延元年四月廿七日

書簡 四六三

九八九

此程は若様御凶變誠以奉恐入候御事御座候借其以前御惠書被成下殊に被爲寄思召御途中御齋の美菓并に湯本の素箸御投祝感銘之劇不知所謝奉存候將御別紙拜見仕候處此度撥らすかの硯川の大瀑布の全體を御見出しに相成候趣其形勢萬端詳密に御記し御示し被成下候故面のあたり見候心地愉快無限奉存候實不思議の義全く山靈の執事の爲に此秘を聞き候事と被存候小生には親しく其全體を觀候かとの御尋に御座候處彼山路を陟降仕候事十數度に下らず候へども遂に瀑など見候事無御座小生煙霞泉石の好恐らく執事に譲り奉らず候處かく無風流に打過ぎ候義聊か志操の存する事に御座候小生の山行は公事にて執事の御行樂とは事體同じからず公事を以て山見の者人足等をも役し候事故に私の好事の爲には一步も勞させ申まじくと兼々志し候に就き右の仕合に御座候先年御内御用を以て伊豆へ罷越し候節も歸途江の島へ廻り一觀候様勸め候ものも候ひしかども假にも公事を帯び候て夫を幸に遊觀の地に歩を移し候は快からざる義に付咫尺の名勝をよそに見候て獨歸仕候初め矢澤執政の知遇を得御手充を戴き文學修業仕再び東遊ち玉か池に卜居矢澤執政被歿候後は數々

執事の御厚情を蒙り書籍器械を取集め候にそこはくの御手充頂戴仕罷在去る寅歳嚴譴を以て此表へ御差送りに相成候迄前後江府に寓居候事十七年に御座候然る所遂に一度妓樓に遊び候事無之候有用の爲に戴き候御手充に候へば私の娛樂に聊にても費し候は物體なしと覺悟仕候故に御座候是等の義是迄誰にも申候義にも無御座候を事新しく申上候譯も無之義に御座候へども遂御尋に依り公事の行故に泉石の癖を咏へ候ひしと申義を申上候より夫々似より候事に付遂不用の多言に及び候御一笑可被成下候扱其瀑布の名の義御相談に御座候所即座御心づかれ候文字瀧も硯川の縁有之面白く奉存候へども段々御示誨の趣にては非常の大瀑布に候へば同じくは後世詩文にも入候好字面に致し度ものと奉存候文字たきの詞歌によりみ入候には十分に候へども詩文の節ちと憾ある様被存候漢土にて文字の雄なるは近古韓退之上は有御座まじく候韓退之の廟の碑を東坡の撰し候て末に一詩を系け詩中韓子の文を贊して天孫爲織雲錦裳と申句御座候又詩人瀑布を以て練に比し天機織就など作り候も有之候へば夫等取合せ雲錦瀑一名文字瀧など命ぜられ候ては如何候はん哉硯川の縁

よりして文字瀧其文字の殊に壯大なる韓子にも比すべしと申より雲錦瀑と申にて至極の様にも存じ候が高意いかゞや忠右考の道を開き碑を立て往來の旅人其他遊覽の人にも告げ申度と申義尤の義何卒左様致し度ものに御座候就ては此度執事の始めて勝地御見出しに相成候義に候へは其事簡古に御題名の體に御認め夫を土人の石に鐫候様致し候なども面白きかと奉存候夫とも別に改めて倭文に御構思御座候ものか是も可然候忠右瀑布圖の考も尤に相聞え候瀑名定り候上迎もの義に上に執事の玉詠御座候はゞ更に妙と奉存候下圖酒井取立候はゞ一覽仕度何卒可然結構に致し度ものに御座候御別紙近郊八景御取合せ至極と奉存候但し不揃に見え候所御座候に付聊か愚管を認め入れ返壁仕候猶御再案奉願候産物にも三種認め加へ候尙有之候はんと奉存候さて和合橋の名に御座候所なれあひ橋とか申よし鄙俗の稱に聞え候其意に候はゞ睦の字にて書き候てむつみのはしなど申候てもよろしき様に候所元來睦の字は親族にかかり候字郷黨の親しみには用ひ不申依てちと不都合と存候依て一向に合の字を去り和橋と認め候てにござしと唱へ候なども可然かと相考候にこは和柔の

酒井金太郎

義和柔なれば即ちなれ合もよろしき譯に候地名などは一つ宛もみやびに致し置き度ものに御座候八景月秋のはじめの考他國のものも咲ひ候に付忠右耻かしき事に存し御直しを奉願候段かの叟毎々感じ入候心付に御座候御城下に別紙など様の咲止千萬なる耻かしきもの出來り江戸大阪さして廣め候など申を士太夫にてすら心付なく被居候を幽僻の村民にして他國のものに耻を存し候は殊勝の義是は御目通申上候節格別に御賞し被成下候様仕度ものと奉存候小生義過日御惠書に接し候比は散々齒痛にて御即答申上候義不相叶寵賤の拜謝も多日稽緩悚惕不少奉存候刺絡など仕一兩日にして大分快く候ひし所若様御大病に付御手充の申上方見込御尋有之依之心痛仕候上夜中寢に就かず細字の方書を検査仕候等に依て再び痛患を増し大に迷惑仕候ひき乍去昨夕來痛みも磷らき候に付段々の拜謝申譯旁如此に御座候今日は此紙様のもの認め候にも齒根に響き不申候間此分にては不日に爽快可仕候乍憚御放念可被成下候頓首

四月廿七日

大星 拜復

萬延元年五月廿二日

〔四六四〕 村上誠之丞に贈る

本月七日付の貴簡到來欣披の所御母堂様御事追々御快方に候ひしに氣候の不順に御感じ又々御不出來續て御水瀉の趣御心痛と被仰下喫一驚申候其後いかがの御様子や御容體委しく承度候老人虚人の水瀉に西洋にてテリアカ雞子黄の灌腸法用ひ効多く候御用ひ候事は無御座候か醫師衆と御談し御覽可被成候此間總て無事御安心被下度候緒又御頼申候洋畫遠方之所度々御出張御調へ御送り被下御手數の義乍毎度不堪感謝候此度もアタラス附總して六部體に相屆き殊に被入御念御封し被下候故無瑕にて大慶不過之候ベテウセエンテレメーのシケイキユンデは全部のものに無之候とて御見合被下候由御尤に候醫書目錄御寫し御廻し被下感荷の至然る所是には格別欲しと申程のものも見當り不申候但し近日も藩内に婦人にて急に物故候もの兩三人有之候傳聞には難産にてのよしに候此地御案内の通良醫無之殊に産科は拂地に候仍而

スカンリニ

フルロスキユンデ 千八百五十六年版代價壹兩貳分

右を調へ置き出入の醫者へよりくにはなし聞かせ候はゞ人の助けにも可相成と存じ候是を取入候序にいかなるものか詳かならず候へども僅かばかりの價のものに付

ゲネースキユンデヘサツクブイキ

千八百五十年版代參朱

右も調へ一覽申度候又々御苦惱に候へども何分も御頼申候此度御調御送り被下候内オーフルストライトン第四版の廉價なるには肝をつぶし申候某十一二年前取入候は第二板にて候ひし所其價廿圓に候ひき此度の第四版餘程フルメルも有之右之價の八分の一に及ばず手に入候と申は全く公邊御世話故の義と被存候右を門人ども羨しがり一部づゝ所藏に致し度と望み出候仍て

オーフルストライトン

ハンドレイヂンクトットデケンニステルアルチルレリ 千八百五十六年

書簡 四六四

右三部御調被下度候其内一部背のテイイテルを金字に致し候本有之候はゞ御擇可被下候

更に序に御頼み申度一事有之候先便御廻し被下候書目の内

ストルムホイデング

ハンドレイデングワートルボウキユンデ

千八百四十四年々五年代拾兩三分三朱

右之書有之候昨年来千曲犀河とも出水兩岸大荒に候其縁源を尋ね候へば不學無術の輩無理なる普請つけを致し候より多分民田の害を成し候事と被存候就て箇様閉居の間に彼邦水利の書を熟讀ゆくは國の爲に致し度と存じ昨年も水ボウキユンデの書御代市御頼申候所來着の上にて見候へばスロイスのボウキユンデ故に其用至て狭く其上爰なとはスロイスは先は用無之候依て千曲犀河等を治め候に用立候様のものに候はゞ右のストルムのホウキユンデ取入度候所昨年の如きものにては不用に御座候就ては圖を八十枚添候御一覽被

下河の兩岸などの手入の圖にても多く御座候様子に候はゞ後便早速に被仰下候様希候何分も御頼申候七日付貴書中には無之候へども飛脚のもの貴宅よりの切手持參候上は過日送進の五圓金は御落手被下候事と存候左候へば此度六種御調被下候殘金尙四圓ばかりは有之候かと存候此信又三圓差出し申候間可然奉冀候先緊要のみ如此に御座候以上

五月念二

明

村上令弟

岡見藏版ものゝ事並にミニイグウニールの事辱候尙又兼て御頼み申置候ハフリイケンウエルキトイグキユンデ火藥製造書、ギラルデンシケイキユンデ右は何分御心かけ可被下候

〔四六五〕 勝麟太郎に贈る

未得御書報候へども飛脚のもの罷歸り慥に承はり候へば亞國への御用御首尾能く御勤數千里の海上何等の御阻撓無御座御歸館御座候との御事驚喜の劇北

書簡 四六五

九九七

堂君御始め御満悦いか計りと想像疆なく愛度奉敬賀候順子は申に及ばず家内一同宜しく御悦申上候兼ては十月頃の御歸帆にも候様被仰下候處其半期にて御恙なく御榮旋に相成候義親々の私情歡喜はさる事ながら御國計より申上候へば折角御渡洋も御座候義に付暫く彼地に御滯留政治武備民情萬端御偵伺有御座度事議論を待ざる事と奉存候然るに斯様御早還御座候御事不審千萬の義と奉存候しかし何事も無御座御歸館珍重無此上奉存候時下炎暑何の被爲替候御事も無御座候歟先頃中は北堂君にも少し御不出來の様奉伺候乍去意外の御早還等にて御氣力を被爲得此節頃は御鶴然にも可被爲在と奉存候尙近日の御容子委敷奉窺度奉存候然ば早春御出帆前に御餞別に差上候はんと存じ候品其節便りの都合あしく遂進呈に及ばず依て此度御榮旋の御悦迄に送呈仕候是は只今の如く洋客に御從ひ諸學科御修業被成御座候所にては御不用の様なるものに候へども乍去其初を推し候へば畢竟は某門下の秀と申より御選擢にも御逢被成候御事に付夫丈の印はいづれにも御座候方と奉存候某には其表に罷在候節より其印は呈し置き候はんと其念慮は斷えず有之候ひしかども打續き候

ての多事に取りかまけ遂に其義に及ばず嚴謹を得候て此地へ引入候後程なく執事にも崎陽の命を被爲蒙候等にて是迄久しく其志を果さず候ひき然る所舊臘猝に御渡洋の御様子承知仕多年の志をも報ひ申度且は某の傳書は世間の武偏者の免狀印可卷とも致相違例の礙卦に跋文を附し候もの故に彼の地へ御持參候てかの邦人の漢書にたけ候者或は清國學士の彼の邦に遊官候者等へ御示し被成下候はゞ聊か本邦の爲に御氣を吐かれ候御一資にも可相成と存じての義に御座候左候處其節幸便を得ず遺憾に御座候ひし所斯様に御早還御座候御様子にてはたとひ其節送上仕候とも愚意は遂に畫餅に可相成候但し右の志にて候間永く荷御愛藏候はゞ幸甚の義と可奉存候將又例の野品暑候拜候申上候印迄に送呈仕候御咲存可被成下候乍憚北堂君へも此度の御悦暑時の伺宜しく被仰上被下度奉懇願候炎威折角御愛護所禱に御座候以上

六月十一日

大星再拜

勝 君 執事

萬延元年六月三十日

〔四六六〕 勝麟太郎に贈る

六月十日之華簡期の如く相達し拜見仕候前書拜賀申上候通り本邦古來比類無之絶域への御用御首尾よく被成御勤數千里の海上無御恙御歸府御座候段愛度御儀奉存候然る所御歸府御禮被爲濟候後赤痢を御患へ御下血など甚しく御座候よし御書簡拜見此所に至り一旦驚愕仕候處御攝生御届き被成追々御快方と申御事先々安心仕候乍然殘炎も甚しく候時節に候間折角と御攝養被成御座候様奉祈候偕又彼地より御持せに相成候御品にて奇珍之三品御送惠被成下千萬難有御禮申上難盡奉存候其外老母順子へも蒙御芳志是又銘感之至奉痛入候御事宜しく御禮申上度段申出候追々御全快被成御座候上此度の御紀行等御示及可被成下との御事欣幸之劇奉存候御筆記を煩はし候て戴き候も恐入候幸便に蒙御惠借候へば早速寫し候て御原本は返璧可申上候此義も御合被置可被下候信州歸城に付此地飛脚のものも出拂ひ其後之御容體を奉伺度奉存候ひながら延引仕候明日彌歸城にて着次第飛脚出候に付芳祝之拜謝旁御様子拜候申上候

當今之御動履委しく奉窺度候北堂君倍御安佳に被爲涉候哉御歸館にて嘸々御満悦と奉察候へば忽ち又容易ならざる御不快にて一と度は餘程御心配も被爲在候御事と奉存候此節は御順快にて漸く御降心可被遊と奉存候乍憚御序に宜く被仰上可被下候賤家は依舊瓦全幸に御放念可被下候不宣

六月晦日

大星再拜

勝 君 臺下

〔四六七〕 依田源之丞に贈る

萬延元年夏

御隣家金井生種々手充を盡し候得共遂回生に至らず絆切れ候との事言語同斷の至りと存候追々承り候得ば水中より引揚げ候節より扱方不案内にて手違のみ致し候事の様存候水中に有之候時刻を以て考候へば是非蘇生に相成候筈の處左候はぬは全く扱ひ法の如くならざりし故と遺憾至極に候引揚候て直に火にあて候と申事患者の體を直に火に當候は溺人を救ひ候に禁忌之第一に候その體を温め候には昨日も得貴意候通敷もの着もの等にて温め摩擦して温め追

追に炒温を布に包み温め候事法則にて候刺絡も最初承り候て橋上より組打など致し水中へ落候上の事に承り候故打撲にて卒倒し沈み候様存じに打撲の跡體をさし五十日六十刺絡尤と得貴意候處詳に承知候へばに候へば刺絡自分水中に潜伏候業を試みいつ迄も出て來らず故に人々不審に存じ騒ぎ立ち水底を索候て引揚候處肺部も堅く肛門開き居候との事個様の體の患者をば刺絡致さるが常法にて尤人こゝち候後候必刺絡候事口授あり依てたとへ氣を開き候爲に針を用ひ候も淺く刺候て僅に血を見候程にあり度候處委しく承り候へば深く針を用ひ血の出次第に致し多量の出血も有之かのよし是又散々の事に候ひき水練の師匠などは溺人の扱はよく講明あるべき事に候處不行届の次第と存候且人の呼吸はいかほどつとめ候とても常限有之事に付其常限にはづれ候はゞ直に變事と心得候筈に候處さなく候事尤の事と存候河野流の傳授事に龍宮笠杯申事有之その内にて呼吸候様水中に空隙を拵らへ候事に候得共是は實に素人考にて極めて危き事に候水中之空隙は是非共西洋のドイケルスコックの仕懸を以て時々地上より新氣を繰入候にあらざればその内に呼吸候もの必ず窒死候其理合は人の吸氣と

脱字あり

呼氣とは其性分大に違ひ候て呼氣は再び吸氣に成り難き所心得べき事に候是等の筋故に萬有學窮理を本とし候事にてその窮理も唐流の空理は何の用にも相立不申西洋實際の窮理ならでは役に立ち不申候昨日は御家老中見分と申事此人にても窮理心得有之候はゞ箇様の無慚の事あるまじくと惜み存候事に御座候始は上の御覽にて長沈御好の上なども承り責めてものことゝ存じ是等得貴意候も無益の事の様に候得共甚だ不平にも存じ且他日の御心得にもと御隣家迄使差越し候故如此御座候

依田賢友

象翁

〔四六八〕 勝麟太郎に贈る

萬延元年七月廿二日か

六月三日之御手字拜見仕候酷暑之候闔府倍御祥祉敬慶之至奉存候御日勤御多忙のよし御尤存上候右之御中相願候ハンデルビュルクの義に就き長崎屋へも度々被勞玉趾中元後賣出しに相成候へば壹部差上候様被仰付被置被下候段千萬難有奉服佩候今信右價金として五圓差上申候乍御手数數宜く奉冀候只今頃は

既に御手へ参り居候義と神口不少候此度の飛脚伴之助と申もの至て慥なる者にて來月七日八日之頃其表出立罷歸可申候へば可相成は此者に御附送被成下度候萬所仰御座候先便暑中拜候の爲つまらぬもの呈覽仕候所御丁寧御挨拶蒙仰且時候御尋とて御肴料壹方拜戴感惕兼集候義に奉存候右御禮旁草々申上候殘炎尙酷御座候此表此節連日華氏表に折角御多愛奉禱候頓首

七月念二

大 星

勝 君 臺下

附白御日勤の御多忙は奉察候御事に付向後は態々との御復書は必御無用に奉冀候以來は御互に書入回復と御約束申上度候左の問目はへ直に御書入御答誨奉願候

問目

- 一 デツケルケレノネオールロフ
- 一 プラント
- 一 ギラルデンシケイキムンデ

代價何程位に御座候や

同

同

一年々荷蘭にて出版候大本のネーデルランドマガゼイン

壹本に付 同

一 此度外國の武器は金川交易場にて洋人店開致し調候て苦しからず候趣御達しも有之候洋籍類は未だ店も開け不申候義か

一 近來の荷蘭書大抵代料の記有之候長崎屋にて賣捌候洋籍本國の原價に幾倍と申慥かなる定にても立候義歟

一 水利の書 ワートルボウキムンデ

一 器械學の書

右は無御座候や

一 當時長崎やに有之候洋書目錄は御手には無御座候や御座候はゞ一寸拜借奉願度一覽之上的便直に返璧可申上候

〔四六九〕 勝麟太郎に贈る

御轉役被爲蒙仰練所御出役の方も御止に相成蕃書調所へ御出役替と申御事

萬延元年八月十五日

驚入候義に御座候春以來の絶國への御用は本邦開闢以來始ての御事御銘々御生命を賭ものにしての御奉公と申ものに候へば御首尾克御歸府之上は格別之御褒賞をも被爲受候はんと存じ候所先般不審の義申上候等の件彼地にて御激論有之御歸府後別に御建白等の御事御座候處當時は諸方舊に似不申右様の次第と申御事何共不堪浩歎候其舊に依り候だに某などは解すべからざる事のみ存じ罷在候所夫にだにも似不申候て實に可申上やうも無御座候乍然易にも窮れば變じ變ずれば通ずと見え申候かく窮り候上は變通の機會も亦可有御座候と奉存候且又御一身の御爲には此度の御左遷も至極可然候其道理は先般差上候礮卦象傳の末に有之候傳を合せて御熟讀御座候はゞ其好理のづから御合點參り可申候古來聖賢如此英雄豪傑亦如此に候へば此所に於て更に御奮發萬端御勵精御座候様奉祈候先はたまものゝ拜謝旁申上候此地秋暑猶燬が如くに御座候其表は尙甚しかるべく候御病後別して御保慎被成御座候様奉存候餘期後信候不謹

中元

大星再拜

勝 君 執事

附白乍序相願置き候近來の著書にて

火藥製造書

綿花紡車等の器械製作書

ギラルデンの分析術書

右の書御座候はゞ必ず御代市奉願候代銀少々は村上誠之丞の方へ遣し置候是へ一寸御沙汰を蒙り度奉懇候以上

賤家順子はじめ平安御放念可被成下候

〔四七〇〕 望月主水に贈る

萬延元年九月廿五日か

霜氣日に嚴肅に御座候尊體倍御碍も不被爲在候歎奉候候然ば此間は賤恙御氣遣被成下度々蒙御存問佩荷之劇奉存候昨日來脈も大抵平日に相復し但厘に咳嗽を餘し候ばかりに御座候是も不日に全癒可仕候間乍憚御過念被成下間敷候就ては御枉願の義御都合次第廿七八の頃如何に御座候はんや小柔も其頃は必

小柔は小林柔介を指す

書 簡 四七〇

一〇〇七

ず霍然も可仕候間御引拉可被成下候蒙命罷在候御像贊も漸結着仕候拜芝の上
 尙高意をも伺度奉存候借又爰に一事懇願の次第御座候只今勝手口に仕置候傍
 の松樹上幹を伐り去り外へ移し候義御許容被成下度奉乞願候先年名樓拜借引
 移り候節勝手をば今少し廣く仕度候ひし所其場所に此度乞願仕候松と都合三
 株有之夫に碍り不申候様極めて狭く仕候所竈煙の直に樓上に及び候も宜しか
 らず且朝夕烹炙之氣几席を薰衝候も甚不雅に存じ候へども元來高圍之一樹一
 石某が爲に動し候義は仕るまじき覺悟候故是迄相忍罷在候所煙火の氣は植物
 の爲に宜しからず候ものと相見え三株の松一昨年と昨年續て二株は立稿に相
 成候只今残り候は竈突に遠き一株に御座候是も尙久しく此所に差置候はゞ遂
 に枯稿可申かとも存じ且は此樹を外へ移し候へば立稿に相成候二株をも片付
 候て勝手を今少し廣く仕度奉存候左候へばたまさか御願訪を蒙り候に此方よ
 り御通し申上候へば都合宜しく且晤〇の際に於て少しく不雅を免かれ可申旁
 此義及懇請候御允諾も被成下候へば千萬難有可奉存候宜御進止可被成下候以
 上

九月念五

大星拜覆

致堂老大人 執事

〔四七二〕望月主水に贈る

萬延元年九
月廿九日か

昨日は蒙御願訪久々にて獲拜芝喜幸之至殊に何よりの好品御投惠被成下感謝
 不盡奉存候奉投轄候へども何の風情も無御座慚愧仕候所今日は御丁寧之御手
 誨却て不勝悚惕奉存候御預り申上置候御吟稿二頁御臨書一頁聊か記愚管返壁
 仕候借又御像贊草稿御擲還右にて淨寫仕可然蒙仰に付則御像上へ認め差上候
 字畫拙劣御畫像を汚し奉り候様にて奉愧入候先は拜答昨日の拜謝旁申上候以
 上

廿九日

大星拜復

致堂老大人 執事

〔四七二〕〇

萬延元年十
日十七日

此間は御惠來御懇情の御内話奉謝候折節樓上來人も有之樓下も取込候て勿々の御應對愧入候義に御座候乍然某世に出候望更に無之候段一通り開陳候へども某存じ候はぬ分にて親類共へ御内話被下候はんなども御申被下此義も甚然るべからざる事と申上候へども何か未だ其趣意御了得被下かね候様奉存候故に拜謝ながら左に委細申上候某從來出あるき候事嫌ひの性質に候故此年頃の屏居も極めて悪しからず飽迄東西の書を読み書中の賢人君子英雄豪傑を友とし候へば別に朋友も入り不申靜に天地萬物の理を遊び花鳥風月の趣を樂み候へば外に慰も不用の事其上内々助力の衆も有之候故薄祿にても衣食の差支も無之尙年々少々宛は新渡の西洋書など取入候様の事も出來申候右故に此屏居某には好都合と可申其上御互に入九十迄いき候所向ふ三四十年来候その三四年を安閑無事にて過し候へば某は此上もなき幸と存じ候事に御座候夫とても初めより世の務を務めず天下國家に心を盡し候事も無之安閑無事を求め候はゞいたづらに世の米穀を食ひ耗し候蠹蟲とも可申候へども某事は乍不肖皇國の御爲を多年深く心にかけて天下億萬人の未だ思ひ至らざる所に思ひ至り上

書献策も數度に及び丑年亞國の事起り候に至ては其節既に只今の形勢に馴致候はんをも竊に洞察候故當今第一の急務天下の御至計は外國へ人を發し其國の形勢事情を慥に相探り候より先なるは無之其段上書も候所行はれ不申候故然らば土州萬次郎にならひ漂流の姿にて用立ち候門人を亞國へ遣し行く行く大いなる御用便に致し候はんと思ひ候事出來損じ候て此御咎に候彼時節某の策の如く行はれ候はゞ一昨年亞使の欺瞞を御受け被成候事も有之まじく銀の位を取違へ物價次第に高直に成り天下人民迷惑候様の事も有御座間敷外國人侮慢を極め候様の事も有之まじく乍恐主上宸襟を被爲惱候様の御事も有御座間敷候又一昨年の献策に至り候ては其節其策だに行はれ候はゞ大朝夫迄の御失計を奉補勅諭の御趣意を立て貫き公武御合體にて皇國の御威稜を海外萬里に振ひ候はん事掌に在りと存候且殿様の御勳功をも千載青史を照し候様：不明……踊躍候所其策不幸にしていたづらに水の泡に相成候此策の如きは時に取り失ふべからざるの好機會和漢古今の名臣智將を九原より起し當時の爲に計畫せしめ候共此策の外に出て申まじくと存候程に御座候所再び得べか

らざるの機會を失ひ天下の奇計空しく相成候事は某終天の遺恨と存じ候事に御座候乍去天下の爲に人に先て憂ひ夫が爲に罪を得るに至り候ても尙其素志を棄てず心を碎き計畫を盡し候夫にて行届かず候事故もはや天命に安んじ餘年を無事に過し候て天照太神東照宮并に先公在天の尊靈へ奉對候ても申譯御座候事と奉存候さて……不明……乍去御家なり公邊なり某ならては不叶御用筋御座候とて塾居御免被仰付候義に候はゞ息の通ひ候間は難有畏り出勤……不明……親類共よりの歎願など存じも寄らぬ義に御座候依て是は決して御發言被成下まじく奉希候前文の次第人に可申義に無御座候へども人の及ばぬ御親切の御配慮も被下候義に付……不明……御電覽後御火中可被下候以上

十月十七日

〔四七三〕 恩田頼母に贈る

萬延元年十月廿二日

其後は打絶御動履をも不奉伺候追々寒冷相加り候へども尊候倍御萬福被爲涉候御事哉奉拜訊候然ば先達ては羣書類從文筆并消息の部御手段を以て密に御

惠轉被成下入用の條夫々寫し取千萬難有銘謝不罄奉存候消息部には數種心得に成候事とも有之大に益を得候義に御座候文筆の部には徒然艸の内かに評判有之候小町傳の玉造なども御座候趣に付是をも一覽仕度又徂徠か集め候皇朝正聲も餘り小冊子に付今少し増補も仕度念願にて消息の部拜見相願候序文筆の部も御手数數奉乞願候義に御座候所玉造も愚眼には一向つまらぬものと存候是を昔より小町の傳など、申傳へ候は誠に陋説にて全くなま文才の有之候もの、文法など申事聊も辨へ候はてめて書きに認め候一篇の文字にして皆虚設の辭に候夫を何か事々しく空海の作にして本朝の名文など申候は笑止千萬の事に存候空海も才僧には候へども詩も文も皆宜しからず候乍去其少作と申す三教指歸などは玉造よりは遙かに宜しく候左候へば玉造は空海にても有之まじく被存候其他懷風經國扶桑麗藻都氏田氏等の集も一涉珍らしく存じ候義も御座候へども概して徂徠が正聲を補ひ候はんと存じ候は厘々兩三首に過す遺憾の事に御座候けく江吏部などよりは嗟峨帝の皇女とよぼしく候が其御方に詩は宜しきか御座候不思議なる事に奉存候御庇にて本朝古代の遺文を一讀大

慶仕候即ち文筆消息兩部合せて廿八本奉完璧候乍憚御檢納可被成下候第百三十四本はかねて不揃と奉存候百三十三も毎頁しるしは百三十と有之候へども是は全く三の字を脱し候ものと被存候此義も爲念申上候將此豬肉餘り少々御座候へども到來試み候所可也下物に相成候まゝ御慰に入御覽候本草をも檢索仕候處其肉無毒主治男子元臟虛勞女子虛憊と相見え候御近況拜候旁草々申上候以上

十月廿二日

大星拜上

正誼老大人 執事

萬延元年十月朔

〔四七四〕 立田樂水に贈る

過日も御投簡御示及の尊稿聊愚意迄認入返璧申上度候ひし所此節は日々俗紛に被迫不果本意奉愧入候然る所又々御書惠令郎にも兎かく御善候無御座候て御心配の趣奉察候過刻直に拜答可申上の處無餘儀製薬に取かゝり居不能其義悚惕を増し候義に御座候則別紙御文稿返璧仕候借又江府并に横濱の異事略承

知仕候歸宅の上腹を切られ候は堀織部殿と申事に御座候是は頗る知る人にて木挽町の住居も屢被尋某も先方へ参り申候既に横濱應接場警備之爲蒙命出張候内下田の地御借與可相成と申を承り大計にあるまじくと存候より其義建白の爲江府へ立戻り公の御評容を得候て夜中御同人の方へ罷越し討論數刻に及候事有之夫より水府の御邸へ罷出て藤田誠之進舊名虎之助に面會愚策の次第同人を以て老公へ申上候義も御座候所七年に満す候間に誠之進も死去老公も御他界堀も此度縮命と承り其節の事存出て愴然たるを免れず候夷人三百人程にて安藤侯へ出候はフロイセンと申事に承候横濱の一事は實に亂階其禍を旋らすべからずと被存候さて〳〵浩嘆の事に御座候某なども是迄數年閑風月を管領罷在天幸と存じ候所始終如此にても在られ申まじくと存候義に御座候先は拜答稽緩の申譯まで早々申上候以上

朔日

大星拜

静山先生 臺下

萬延元年十月十二日

〔四七五〕 武具方に贈る

寒威甚敷候所愈御健安珍重奉存候然者御問合の御兩通一覽候處兼ても申候通是迄一向御無法則の義に付是を條理を立て大銃の如きは當早春御代案致し候通夫々御改造有之小銃の方も火繩銃の分悉く御廢しこれに換ふるに新製の擊銃を以てし挺數をも無御不足候様御調有御座度速に此御規矩不相立候ては當今御實備には一切不相成一旦事あるに臨て如何ともすべからずたとひ智者能者有之候とも唯當惑之外有御座まじく其節の御差支只今日に見る如くに被存憂懼に堪へず候右に付是迄の御砲器を定規に彈藥の御備何程にて可然と申義は御相談に及び難く候但當今西洋常法大小各銃一門に付彈藥何程用意あるべきと申事駈と法則有之義に付其義を録し掛御目候

小銃に用意すべき彈藥の數

歩兵銃壹挺に付

四百發

騎銃壹挺に付

百二十發

短銃壹挺に付

九十發

大銃

地砲壹座に付

二百發

人砲壹座に付

百二十發

天砲壹座に付

四十發

いづれも右の數の半を以て行軍に充て半を以て不時の用に備へ臨時の番兵等には又その半を分つ事常法にて候

借又火藥の事は早春の案中にも認め候通是迄の常藥にてはいか程御貯御座候ても軍争の御用には難相成候是非とも精製之法則相立不申候ては於當時難濟事に御座候彌精製之火藥御出來に相成候上は是迄御貯の分は地雷火其他之火術に用ひ候末藥の分に相成可然候但し取扱ひ候に粉の立候火藥は至て危きものに御座候間其扱ひも御念の入候様有御座度候右大小銃と火藥の事は御時節柄別して嚴敷御申立て是非々々御規定相立候様可被成候依て爰に別て認め申候其餘は御書立候下札にて得貴意候宜しく御承知可被下候各様御役中本法を

以て永久の御備御努力所仰御座候以上

十二月十二日

猶々早春御申立の義尙御催促有之候や責ては山用砲の半バッテリー丈にて
も早々御出来候様致し度

三斤地砲

三門

十一拇半人砲

壹門

手天砲

二門

右を山用砲半バッテリーと稱し申し候五體不具同様の砲は數有候ても御不
用之義實用の器はたとひ其數不足にても夫丈の用をは成し候義に付何分も
早く此數丈御出来に相成度左候へば打習ひ候御家中人士の爲にも大に益有
之即ち御爲に相成候以上

萬延元年十
二月十九日
か

〔四七六〕 齋藤友衛に贈る

烈寒之時節倍御輕安被成御勤珍重奉慶候然ば過日は御繁務之御中強て御立寄

相願候所早速御枉趾千萬奉謝候去月廿五日出に江府去る方より横濱に於て夷
人殺戮之事慥かなる事に申來り候故此體たらくの所へ問罪の兵艦など引受け
候ては實に手を措く所も有之まじく且清國順天府北京帝都をも當八月中英佛二國
の兵の爲に陥られ候等の義に聞口致し居り候に付急にこれを救ひ候の策なく
んばあるべからずと存じ御内話も仕候義に御座候然る所昨日村上誠之丞より
の書狀到來慥かなる義を承知候へば最初御聞込の通夷人殺戮の事は無之義に
て惟水戸浪人多勢水戸表を欠はづし候注進有之候より自然横濱の商館其他夷
人の旅宿を亂妨候様の事有之候ては容易ならざる變事をも引出し可申と申所
より急に諸侯方へ固め事被仰渡候義と申事に承り先一と度安心仕候義に付此
段一寸申上候初め承候如く六七十人を殺戮候義實事に候はゞ事の起り候と今
より百日を出て申まじくと存じ候ひし所全く虚傳に付先賢くは依舊心閑に讀
書も出来候義と獨咲候義に御座候御一咲可被下候以上

十九日

猶々薄々傳聞候へば殿町邊の義も奇怪至極の手入有之候よし賞罰は國家の

大柄にて其出る所をば機要とも機務とも機密とも古より申唱へ候義は御承知の事なるべく候然るを御他家へ御家の義を告訴候義を恐入候へば直様其子を舊録舊格に御復し可被成下告訴の義恐入らず候へば舊に復させられ候義永く有之まじくと申所にて數人を以手入のよしいかに澆季の世に候へばとて御政事上箇様の兒戯あるべき事とも存じ候はず右にては賞罰の權も機要機務も地に落ち申候君上の御義を他へ告げ候は即ち干名犯義の譯に當り候事に付恐入恐不入の議に及ばざる事又罪科詰問の上にて恐入候とて首訴自訴と迥別の筋にて夫によりて罪を宥むると申事と漢古今未曾有の新法しかのみならず左候へば舊様舊格に御復し可被成と申事に付恐入の一言非常の大功勞に當り候譯と存候箇様轉倒謬亂の義と申は兒戯にも無之然るを一國の政府に於て如此次第有之候事倍々嘆はしき義老兄御人選を以て樞要の兩御役を被兼所謂御機密にも御機務にも御携り御座候ひながら箇様の御謬政を御救正無御座候事甚望を失ひ候義に御座候既に右の義に就ては老兄より御内命と申にて經史法律の正理を以て伏藏なく詞を盡し候義も有之右を

ば當然の確論と被思召候様にも被仰聞候義に御座候所只今と相成右様の兒戯の上にも有之まじき義に御依順被成候義乍憚御任にあるまじき御事と奉存候此事實事に候はゞ是非とも御救正無御座候ては宗社へ被對御濟難被成奉存候何分御勇猛の御決斷有御座度奉望候しかし本文横濱訛傳の様の義も有之候へばこの薄々の傳聞も或は虚傳かも知れ不申左候へば横濱の異事の虚傳同様大慶不過之此申上候義は御不用に可被成下候以上

齋藤君 几下 密覽

大星拜

〔四七七〕 村上誠之丞に贈る

萬延元年十月廿四日

厥後は御便も無之候嚴寒之候に相成北堂君御始愈御碍も無御座候歎過日飛脚良作申聞候趣にては其頃皆様御申聞御座候様承知候此節如何之御容子哉御動靜委しく承度候爰許依舊和平に御座候幸に御放念可被下候浦町にても先頃は珍敷御風邪氣にて例のエレキトロスコツクマシネ御出御覽候様御案内申候所未だ御髪も御上げかね候とて御出不被下候ひき乍去追々御霍然の御様子に候

間御過念被進まじく候此地當年の寒氣隨分緊しく御座候毎朝此節十六七度華氏表より二十二度位に御座候其表之度數いか程位にや偕其表之義も何か穩かならざる風聞のみ眉を攢め申候横濱へ水戸浪人亂妨に及び候事専ら致沙汰候實否いかゞ哉夫が爲に若年寄寺社奉行等出張被成候趣にも申候其事實に候はゞ亂妨の事も虚傳にもあるまじくと存じられ候が殺戮の首數等區々の説に候實事御聞込も候はゞ密々御報聞被下度候右等の事を以て辭とし兵端を開き候様の體は無之候歟亂妨殺戮の事果して實事に候はゞ先方の氣色詞氣を伺ふを待はず此方より御手を入れられ彼國政府にて其有禮を感服候様の御手段有御座度事と存じ候が此等の策此節果して行はるべきや否自然右等の所に御行届き無之彼方より御政事に曲を負はせ兵を動かし候様の義に至り候ては實に容易ならざる事と存じ候故内々拜聞候事に御座候華聖東へ參られ候衆も歸府の趣然る所此地にて種々耻を耀され候様にも内々承り申候不及是非事と存候某などは丑年以來和戦ともにかれを知られず候ては其本立ちかね候事且其節既に只今の體に馴致候はんと竊に洞察候故天下の御至計當今第一の急務人を外國へ

發せられ其形勢事情を慥に御探索御座候より先きなるは無之と申見込をも獻し候所行はれ不申然らば竊かに成りとも行々の御用に相立候様門人也と遣し置き候はんと企て候事出來損じ候て此嚴謹に御座候某此謹を蒙り候は惜しむに足らず候へども某の策の行はれず候ひしは終天の遺憾と存候彼時節策の如く行はれ候はゞ一昨年アメリカの使の欺瞞を御受け被成候事有御座まじく洋銀の位を取違物價高直に成り天下人民迷惑候様の事有之まじく外國人侮慢を極め候様の事も有之間敷湊を國の四方に開かれ天子の宸襟を被爲惱候様の御事も有御座まじく候はんを不及是非事に御座候誠に無益のくり言ながら何かの事耳にかかり候と此義に思ひ及び浩嘆を免かれず候故遂又筆に任せ候御覽後御火中可被下是迄認め候所へ本月六日の貴墨到來辱致拜見候先以寒候總じて御碍も無御座と承り大慶不過之候且歳末御祝儀被下乍例痛入申候恪二郎へも品々被下是又辱當人千萬難有かり宜しく御禮申上度申出候偕又香港新聞紙亞國行記二冊御惠示被下いづれも珍敷異聞を廣め辱御禮難申盡候かな書の方早速浦町へ上げ申候新聞紙未だ寫し取に間に合かね候間明春迄御寛貸被下度

候英より對州懇望と申事信じかね候事に候か其後慥かなる事御聞込御座候義
や御聞かせ可被下候御別紙の事委細承知絹紙とも預置候春少しく暖氣に成候
所にて責を償ひ可申候設樂望も相心得申候然ば不相替薄儀ながら歳杪之御祝
詞申述候印迄掛御目候雉は寒中の御見まひの章に御座候御一咲可被下候最早
年内餘日も無之候折角御保愛芽出度御迎陽御座候様所望に御座候北堂君御始
へ宜しく御申上可被下候以上

臘月廿四日

象 山

村上賢弟

尙々御別紙額面に

有華樂廼屋

右は何と御讀ませ候御心得や序に一寸かなにて御申遣し可被下候借又長崎
屋洋書の事何分宜しく御頼申候かねて御頼申置候所の

キラルデン シケイキユンデ

紡績車等のウエルキトイグキユンデ圖の有之候

インハンテリイレグレメント

カハルレリ 同

英國にて遠町のきゝ候砲發明のよし荷蘭書にも昨年今年の版に候はゞ必ず
其事も見え可申候依て

アルテルレリの新著もの

初の二筆は價を論ぜず御調へ可被下候跡は代價を承り候上にて取入申度候
且先便被仰下候シケイキユンデの上の方の痛み候本夫丈定て價は引け候事
と存候右をも御取極め賢弟篤と御覽候趣にて御借出し内々御示し被下候に
は相成申まじきか三圓位の品壹圓餘位にて手に入候様に候へば少々字のか
け候様損じ候ても其場所次第は相談申度此義も成候事に候はゞ御取はから
ひ可被下候

〔四七六〕 山田兵衛に贈る

御手教拜見如仰雪後一段之寒威に御座候處御全家倍御好安之御様子承喜慰不

安政三年十
一月八日か
（編次を誤れ
り）

過之候倍又被寄思食何よりの品御惠投被下辱老母はじめ大悦豚犬に於ては更に雀躍いづれも即座賞味宜しく御禮得貴意度段申出候然ば撃銃裝法御譯し候とて御示及に付一覽候處大分誤讀も有之候高囑に任せ加朱致しはじめ候へども又再思候へば撃銃裝法原書又々御入用とも被仰下候旁猶御自身に力を被極今一應御改正候方御修業にも可相成と存じ候末の例にもと始の一段手を入れ致完璧候御改正之上此度の倍にもまはらに大きく御認め被遣候様に存候譯はいかにも俗耳にもわかり候様に平たく被成候方可然候べウセルうつしかけ寫本の事猶暫く御留被置度との事容易の義に御座候御寫し置可然ものは大銃調練書かタクテイキ可然と存じ候ブランドのタクテイキは某も一本欲しく存候當年も洋書渡り不申書籍を積參候舶洋中致難船候よしに御座候左候へば暫く寫の外致し方無之候タクテイキ思召御座候はゞ底本差出し候様取計可申左候はゞ御序に二枚づゝ御寫御卒業の上一部は某へ御惠被下候様冀ひ候譯稿の事被仰下候處其以來は何も無之候故難應命候將御難讀の語被遣則書入進し申候乍去ダールッーなどの如き容易の語まで御讀かねと申事甚不審に存候末に

一二三とイロハとを以てレットレルレーキの印をつけ進し候一條は前文なき故甲とさし乙とさし候ものわかり不申然しレットレルレイキだにつき候へば文意至てやすらかと存候すべて御書被遣候位の事の所に御難み候程にては翻譯はちと等を躡候かと被存候ウエーランドの文法書も箇様にバンド迄も御出來候義に付マートンシカッペイ出版の兩部の文法書御精讀の力を以て此一部を徹頭徹尾御不審之所をよく御料し候て御熟讀候方なまじる早く翻譯に御懸り候より御進歩可速と存候百尺の高臺を造り候はんに基礎狭小にては成り不申先文法書を御了解候て其基礎を堅固に被成候様所祈に御座候先は拜答賜りもの拜謝旁如此御座候兩尊前へも宜しく御致謝可被下候冬分に相成大人御刺絡は御座候ひしや冬分兎角多血の祟御座候ものに候乍序御心得迄相記し申候以上

八日

勿乙蘭度文法書撃銃裝譯各一冊御書被二紙致返完候撃銃裝法原書一本命に依て差上申候御緩留不相妨候

蔭 賢友 几下

大 星 復

文久元年正月八日

〔四七九〕 八田慎藏に贈る

新禧御同慶彌御佳勝御連祝被成候御事と致想像候賤家も老少無事加齒候間幸に御過念被下間布候客歳認置候拙書並に返上もの一同持せ上げ候心得にて別紙迄作り置き候所雨天打續き候故其意も果さず候ひき臘底探らず手に入候古鑑斗の詩春來作候間試筆に認め候て懸御目候御一咲可被下候鑑斗は頗る奇品に御座候御惠訪も被下候はゞ御清鑒に供し可申候餘は別紙にて御承知可被下候以上

八日

大 星 拜

八田 仁友 几下

文久元年二月朔

〔四八〇〕 望月主水に贈る

此間は御惠書賤恙御尋被成下銘感之至奉存候差したる義にも無御座候ひし所

竹村熊三郎

七八日平臥仕候もはや霍然仕候間乍憚御省念可被成下候被遣候御兩品聊か愚意認入返璧仕候竹村三體詩講義の義過日も相かまけ候義に御座候隨分出來可申候へども形の如き謙讓家故早速命を奉せざるにも可有御座候面會之節尙又慇懃可仕候連日去り難き幹事有之無人旁拜答稽緩恐入候御原諒奉仰候以上

二月朔

大 星 拜 復

望 月 夫子 執事

文久元年三月十日

〔四八一〕 望月主水に贈る

連晴美日倍御萬福と奉想像候然ば樓前山櫻の分は未だ花を着けず候へども垂絲を始め早手の分は今明日満開に有之且遠近に見渡され候花等も皆紅霞を蒸し候體に御座候間幸に今日は風も無之候へば午後より御枉趾を蒙らばやと奉存候竹村小林など御拉引も可然歟被任尊意被下度奉存候敬訂

十日

大 星 拜 復

致 堂 夫子 臺下

書 簡 四八一

竹村熊三郎
小林柔介

文久元年三月十二日

〔四八三〕望月主水に贈る

一昨夕は能こそ蒙御命駕候所幸に無風の美日にて絶妙に奉存候御園中の花等も心有候はゞ定て歡喜候事と被存候借又當日は御遠來の兩種御投惠被成下難有奉銘謝候筈は某に於て肉よりも相嗜み候品豊島白酒の方は老母荆婦殊の外好物八箇年振の妙味にて一同珍賞仕候義吳々も宜謝不可罄奉存候然る所昨日は御丁寧の御裁書家内どもへも厚く御加筆被成下午毎度悚息之仕合奉存候いづれも尙宜しく申上度段申出候先は御器返壁旁早々奉謝候以上

十二日

御吟稿此度は佳篇多く珍重奉存候御寫字の方原帖と相照し少々加朱仕候いづれも乍序完趙仕候

致堂 大人 執事

大星 拜手

文久元年三月十二日

〔四八三〕勝麟太郎に贈る

近日菅鉞太郎罷歸面會候て御近況委しく承知慰沃之至奉存候且先頃は令愛君御嘉禮も御滞なく御整被成候由幾久しく愛度奉存候御入興後先方様御様子も宜敷御座候や否相伺候賤家其後先無事罷在候幸に御放念可被成下候借又菅生に御附託プロソイクル數塊御贈惠珍感殊深く不知所宣謝奉存候早速賞味仕候所色味とも別段の事にて感心仕候先年其表に罷在候て譯官吉雄何がしより到來相試候以來丁度十三年にして再び妙味に逢ひ候義返すゝ難有奉存候營より承候に此節にては格別御用多には不被成御座と申御事夫に付色々御不平の御事も御座候かのよし奉遠察候唯々行止人の能く爲す所にあらずと御思食候より外無御座奉存候時に一事御手数數奉願度筋御座候鉞太郎申候に鐵砲洲蕃書賣捌所に随分洋書は澤山有之候様見受候と申事に候所何分手遠にて欲しく存候品も手に入り不申毎々隔靴の敷を免かれず候依て左の品々御塾中の衆へ也御頼み御一探奉願候

リユバック ナチュールキユンデ ファンデメンヌ スレグナウケルト シケイキユン
デ 全部

此品過日手に入候所エインデルのみにてテウエーデル無之候依て全部を
調ヘエインデルは門下の後生へ遣し度と存候此書序文にて見候へばグラ
ハムオットのシケイキユンデ近來の好書の様被存候此書舶來候はほしきもの
に存し候か如何可有御座や夫に限らず何ぞオンベウエルキトイグデよりベウ
ルキトイグデ迄揃ひ候て手廣に直に利用廣生の助けと相成候シケイキユンデ
の新書御座候は一部御代市被成下度奉冀候過日ギラルデンのフアプリーキ
ウエース…手に入候所是は大に宜しきものと存候其他ストックハルドの…
フレセニウスのクワリタチフ…をも藏弄仕候所その一端の用のみ備はら
ぬものに御座候就て何ぞ揃ひ候ものと望み候義に御座候
其外火薬製造に全備の書御座候は必ず手に入れ申度又ウエルキトイグキユン
デに全備のもの有之木綿を紡績候などにはりのゆき、器械などの有之書殊に
懇望に御座候久しく望み罷在候へども只今に手に入り不申候何分も此義御心

クモール
かモール?

を被爲付其書有之候と申義御聞及びも御座候は直に御調へ御送り被成下度
奉希候その爲乍少分村上誠之丞方迄金子相送り置候先頃中四五部取入候へど
も尙殘金拾五圓餘は有之べく候書物有之候て代金不足の分は誠之丞へ被仰下
候ても宜しく又一便丈御貸借被下候ても一便にて直に可奉償候へば如何とも
宜しき様に奉願候ウエルキトイグキユンデも昨年かモールの著書をテイテルの
みにて取入候所アポテケルの爲のみのものにて望を失ひ申候右様の事無御
座候様必ず御一檢之上に奉願度候はしめ認め候二部の書はさし向き欲しく存
候間賣捌所賣切候とも御手寄にて御一探持居候人御座候は御鼎力を以て譲
りもらひ候様御手段奉願候何分も御含可被成下候先はブロードソイタル拜賜
の御禮申上度旁如此御座候時下千萬御自玉被成御座候様奉禱候以上

三月十二日

大星再拜

勝使君 臺下

文久元年

〔四八四〕 立田樂水に贈る

鑑斗歌御草稿御淨寫御示及一段立派に相見え珍重奉存候加筆の厠鼎彝の三字御質問に候所厠は間也まじはると訓じ候朝廷などにて其位に間難いたし候を厠位と申候彝は常とも法とも訓じ候て法度あるの器物すなはち鼎尊罍爵の類を彝器と申候周禮小宗伯の職に六彝なども見え候こゝにては唯尊鼎古器の類と見て宜しく御座候其間に鑑斗と間難候と申義にて前の古玩多貯千載品と申に致照應可然と考候宜しく御取舍可有御座候借又起句東西の字に御座候が西の字だけの落着照應無之候へば左様の字面なき方詩の柄宜く候照應も有之波瀾にも可成字面有之候を用ひざるも勿論届ざる事に候へ共唯一ヶ所の料簡のみにて全編の引立に成らざるを用ひ候は是又下手俗手と申候是等の外委細は拜顔候て御話し可申候將豚犬麻疹御尋とて何よりの□□□難有奉謝候當人並に家内宜しく御禮申上候尙期面謝候頓首

十四日

樂山老兄

大 星拜

近日巖井雪堂圖記卷白井より轉達靜に披阮心目を悦しめ申候水心亭の御結構始て詳悉奇特之極奉存候文筌の圖取流名の御命意故か遺憾なく出來珍重奉存候家父も竊に寄題を謀り罷在候家父舊臘底撥らず古鑑斗を獲申候銘款は無之候へども考索候處明に漢氏以上のものなるべく候雜と大略を圖し懸御目候詩も有之候間錄往仕候御閑時一篇の御寄題を蒙り候へば尤も妙に奉存候

古鑑斗引

我生今世有古癖、愛好古玩忘饑飢、惟憾力微獲不易、每遭奇珍輒嗟吁、歲在庚申月之除、有貨鑑斗到吾廬、體質渾厚神院々、纒帶雲雷相縈紆、土華黯沁古色深、未詳世代迷規模、三足有枋流在右、此制瑰奇書傳無、鄭氏絕學注周官、鬱人祿事彝舟儲、鑑中煮鬱百廿貫、停諸祭前供時需、或云鑑斗盛羹滷、古人行食常相須、今考二說無甚遠、此器制作其庶乎、漢軍刀斗亦曰鑑、晝炊飯食夜擊途、是雖名同實則異、徐戴一之無乃誣、流俗但識世所用、睥睨古器嗤其迂、此器賈低久不售、我聞踊

古 鑪 斗 圖



躍典衣沽赤縣神州數喪亂所在
人肉如爛魚寶鼎玉彝捐道路不
異折戟委沙塗此鑪流落在何處
渡海何處免碎列轉傳不知替幾
主此日此時始遇予一朝相得喜
不禁寘之几案比瑤瓊高齋淪茗
坐清晝獨覺古光照眉鬚

流の枋右に有之候考は別に鑪斗考
一篇御座候文長く候故爰に認め不
申追て御目にかけて可申候近日又珍
敷好玩を獲申候是又後便可申上候
也

廿二日

恪 拜

文久元年四
月廿四日

〔四八六〕 寺内多宮に贈る

其後久敷不得拜晤候時下夏候御眠食倍御佳適被成御座候耶然者一事拜問仕度
義有之候御年齢にては角力士雷電をば定て御熟知と奉存候傳聞仕候所は身の
丈六尺五寸重さ四十九貫肋骨などは一枚の鐵板の様に候ひし事のよし只今多
くの角力取の如く多肉にては無之候様とも承り候が果して左様に御座候ひし
や面貌などは殊に大きく見え候様とも承り候色は黒き方か赤き方か眼睛など
はするどなる方歟鈍き方歟御記憶の所御教示奉願候近日外より内々雷電の文
を頼れ候所面貌の大略を認め申度候へども一度も當人を視候事無御座候故差
困り及拜問候義に御座候乍御手数右拜問の廉御書入御誨示奉仰候萬祈々々

四月廿四日

大 星 拜

寺内老君 几下

〔四八七〕 松田直友に贈る

文久元年四
月廿五日

愈御多祥珍重の至然ば御頼み石表記文認置候間則御使へ相附し申候御遣し置の紙へ先認め候所搗ぬ紙故に何分墨移宜しからず依て無餘儀有合の唐紙に認め候石工一日の細工を御積り幾字なりとも此紙を御切り取り石へ張り彫刻を可被命候決して是を御寫し取りに不及候御望に候はゞ此通にいつにても認め進じ可申候再び其手筆の難得ものこそ雙鉤に寫しも致し候事に候へども某かく罷在候へば決して夫に不及候偕又石へ張込候に唐紙だけ用心無之候ては叶ひ不申候石の寸尺を積りしるしを致し紙の方望の境より切り取り其しるしに應じ張り込候へば幾度に張り候ても字の位置分厘も違ひ不申候石工も字を張り候節必ず石へ糊をつけ可申候さて其上をこすり候節上に生紙を置き大事に心得候はぬ時は唐紙は外紙と相違破れ易く候間此義をよく御心得させ可被成候御如才もあるまじくと存じ候へども爲念如此に御座候將昨年御遣し置の江に紅葉の散り候かたの一幅題詞の事御易き事に候へども此幅へ直に認め候義少々差支申候依て是と對幅に相成候様別々に認め置候まゝ今日石表記文一同致納去候畫幅も御檢納可被下此段草々以上

四月廿五日

象山

松田賢友

〔四八八〕 恩田頼母に贈る

文久元年五月廿三日

久敷御動履をも不奉候今夏異常の暑毒如何被成御座候御事と關心罷在候唯昨日の御賜教にて倍御萬福と相窺慰沃の至奉存候偕又御懇に御惠存老母迄御垂意被成下且嗜好之美味御送下重疊銘感筆謝不能奉存候老母義も來年米壽に御座候所至て健にて北山姉の方へは一日に兩度位見舞候義此分御座候ては尙覽氣遣ひも有御座まじく喜罷在候某義も追年頑健に相成久しく外邪にも感じ不申讀書寫字の精力少壯の時に減じ不申此炎暑中と雖も筆研のみは廢し候はず候乍憚御過念被成下間敷候何ぞ近日雅趣無之かと蒙御垂問候へども是と申上候程の事も無御座候但過日商人の品と申事にて青綠山水の畫卷長さ八尺餘なるを一覽仕候清初の人筆に可有之被存候行筆設色とも頗る精巧にて賞鑒家の清玩に供すべきものに御座候唯惜むべし落款を洗ひ去り七絶の詩を題し文

徵明の名を書加へ候其書軟弱賈作の尤も拙なるものにて好卷を散々のものに
 致し候乍去原圖いかさま文衡山父子などにも候を臨摹候歟と被存山林泉石
 村落汀沙等の布置遠岑の蒼靄の間に出没候模様終日覽觀候て厭くことを知ら
 ずと申程に御座候ひき依て遂伎癢を發し幸其長ばかりの絹素も有之候故強て
 兩日間借り置臨撫仕候平日晏起の懶人其節は雀と共に早起仕終日筆を持ちつ
 づけ夕刻も手許限り迄出精仕候ひしかども中々細密の畫其上狎れ候はぬ遲滯
 の手に候故漸墨書と設色の下地を仕舞候のみにて遂其卷を戻し今に其功を卒
 へず候少しく爽涼の氣候に相成候はゞ更に一兩日の間を費し卒業候はんと存
 じ罷在候左候はゞ竊に御清覽をも汗し候様可仕候此事少しく韻事に涉り候故
 一寸申上候先は御惠問之拜謝迄草々頓首

廿三日

猶々暑威折角御保護被遊候様奉存候有合候輕品御慰にも相成まじく候へど
 も聊か紙しろ迄に呈覽仕候以上

正誼館大人 臺下

大星 拜復

文久元年五
月三十日

〔四八九〕 八田慎藏に贈る

日々炎熱に御座候總じて御碍も無御座候歟御動靜承度候然ば明朝日老母誕辰
 に候所明年米壽に候故其祝をも致し度候へども此節柄晴の義も出來かね候乍
 去當年も態と一壽觴を勸め申度存候然る所先年より懇意の間にて八十以上
 て健在と申は竹内翁の外更に無之候續ては立田老人に候此二老をば招き候心
 得に候貴家之義は往歳より格別の御間柄に就き賢友をば是非とも御招き申度
 候晡時御繰合せ御早臨御祝被下候はゞ慶幸之至可有御座候以上

蒲月晦

大 星 拜

八田 賢友 几下

〔四九〇〕 勝麟太郎に贈る

文久元年六
月十七日

拜稟追々酷熱之候に相成候處北堂君奉始益御萬福被成御座候御事耶御近況奉
 窺候賤舍幸に如昨罷在候乍憚御省念可被成下候借先頃は御投簡箱館表の御船

書 簡 四九〇

一〇四一

にて哇巴香港邊御航海仰を蒙候との御事愉快之御事にて愛度奉慶賀候右御航海多分此秋頃御解纜に可相成彼地御滞なく御出に相成候へば書籍類心易く御手にも入り可申に付此節高價の書多分に取入候義は見合せ候様蒙仰難有奉存候右之御様子に候はゞ御發船の前兼々望罷在候書籍并に器械の類書付候て奉願度候御含置可被成下候將先便洋籍の義に付懇願仕候故を以て御藏品の内三本御惠借難有奉謝候ウエルキトイグキユンデは殊に不勝銘佩候デルブラットのメカニカの書千八百四十八年開版のもの一本取入罷在候所此度御惠示之二本と互に相發し大に益を得候義に御座候乍去何を申候てもアルレルユールステゴロンテンと申もの故に適用の器械一々に備はらず依て此書中に其目見え候荷蘭コーニンケレイキの全備のウエルキトイグキユンデを欲しきものに存候今春御取入と申此シケイキユンデ此義は既に先書申上候通某も誠之丞に相託し取入候書の内にて入手仕候所エールステデルのみにてテウエーデデル無之ベウエルキトイグデセミーに於ては全く脱し居候故誠之丞取入候のみ缺本に候歟と存候てちと小言をも申遣候使君へも申上そのテウエーデも全備候

本懇望に御座候所御手に入候も某の本同様此エールステデルのみと申事不審の事共に御座候和漢有振候書籍に候へばたとひ新刻の書にても卷の上と有之候て下卷無之候へば誰も全備のものとは不心得候所洋書に候へば近來追々開け候とは申もの、官府に係り候賣捌所にて箇様の缺本をひさぎ候事未だ全く開けざるの致す所と歎息候義に御座候右申上候通り此書は某も入手仕候に付二部は不用の義に御座候故今信完壁申上候御檢納可被成下候このフォールレーデに有之候趣にてはグルアマオットのシケイキユンデと申もの全備いたし候大部にて宜しきものらしく被存候御見當りは無御座候や此書還上の義も早速取計らひ可申之所腹心の飛脚暫出府仕らず右故大延引仕候今夕出立と申義相知らせ候に付先便の拜答旁申上候御航海御解纜之期大凡にも相分候はゞ其以前一寸蒙仰度奉懇候借時下其表并に關西等何か穩かならざる風説にて京師へ薩州の老臣出張の義容易ならざる企の趣に相聞え候定て御承知に可有御座候又東禪寺に於て異事有之候趣乍去是は洋人いか様六ヶしく申候共その辭命次第何事も有御座まじく被存候但此地傳聞の説に板倉侯英人と應接の節御手

荒の御處置御座候歟の様子一旦は英人詫入候と申事にて其表街説に侯の御出來の様に申候歟の様に承候へども某に於ては竊に恐懼仕候侯も先寡君の姪に御出候て随分温厚の御質の様心得罷在候故御手荒の御處置など申事多く虚傳なるべくと被存候萬一跡方御座候事に候時は忽ち容易ならざる義の起り候はねば宜くと存じ候事に御座候御探索御座候て自然も右之事實事に候はゞ天下の御爲異人御扱右様にては猝に禍を引き出し可申と申義其御筋へ切に被仰立候様仕度奉存候中庸の九經にも柔遠人と申と候柔を以て服し候故に柔すと申候剛を以て服し候と申事は御武備御全備の上と雖も有御座まじき義況や今に於てをや周易六十四卦の内外乾の卦八大有を除き候外七卦皆危きを免かれず候はその外剛の吉を得やすからざる明戒と可申候當路の方々の御心得有度事と奉存候飛脚のもの出立を急ぎ候趣に付洋籍御惠借の御禮返上もの旁勿々申上候暑威折角御保愛奉禱候不謹

六月十七日

大星拜覆

勝使君臺下

文久元年七月十一日

〔四九二〕 八田慎藏に贈る

一昨日近傍雷火の節は早速に御走來被下且御見舞として兩種御惠贈重疊銘感筆謝不能盡奉存候此節柄昨日以使御禮得貴意候義に御座候其節家來共不念御風爐敷御器等持參返上不仕候趣甚不行届の事幸に御海容可被下候則持せ差上申候乍憚御家内様へ宜敷御致謝被下度候序に任せ陳元輔之卷致納去候數日相慰辱奉存候春栞の畫只今に望家に御座候事哉左候はゞ今日序も有之候ま、彼方へ借覽の事可申越存候此義御承知置可被下候先は此間の御禮返上もの迄如此に御座候以上

十一日

昨夕も號雷一聲尤も前日より少々弱き方乍去光聲の間左迄隔り不申其上硫硝の氣盛に聞え候故又々遠からざる邊へ落候に相違無く火災を氣遣候所やがて同町宮澤門内杉の木へ落ち居宅等へは聊か碍り不申候趣相分り安心候義に御座候乍去日を連れ此近傍へのみ落ち候事一異事に有之候以上

澹庵賢友 几下

大星拜

文久元年七月十一日

〔四九三〕望月主水に贈る

御惠墨拜見仕候如仰雨にても暑威退き不申候けく煩鬱を覺候所倍御清勝被成御座喜慰之至奉存候然ば中元之御節儀とて御肴代拜戴仕乍例難有奉銘佩候偕又近傍雷火に付早速御使被成下其上御見舞として兩種蒙御贈惠重疊感戴不知所謝奉存候誠に意外の義にて奉勞御配慮候幸に風の模様も宜く且驟雨中故に早速に鎮火安心仕候然る所昨夕も近傍の一震一異事に御座候尤も一昨夕より少し聲も弱く光響の間も少し隔り候様には候ひしかども一響の後硫硝の氣鼻を穿ち候に付近所へ落ち候に相違無之又々火災にも成り候はんかと大に氣遣ひ且連日此近傍へのみ震撃候事いやなる義と存じ近所相尋ねさせ候所宮澤門内杉の木を碎き候のみ居宅に別條も無之と承り漸く降心仕候古木公なども喬木に候故氣遣ひ候所先無恙大慶仕候此間兩次之御惠賜拜謝迄早々申上候以上

十一日

御示及之御兩紙返璧仕候
致堂大人 執事

大星拜覆

文久元年七月

〔四九三〕望月主水に贈る

今日之毒熱尤難堪候所倍御萬福被爲入奉敬慰候偕又昨日は中元之御節儀として御肴代御投惠被成下銘感之劇奉存候乍然甚奉痛入候御事に御座候將御草稿拜見仕候御句調は大に宜しく珍重奉存候但し暗香の落着無之且夜中飛鳥の長鳴などは例の御工夫の足らざる所と遺憾奉存候依て暗香の兩字を秋風の字に相改め度左候時は第二句の送樹聲に照應有之又飛鳥長鳴も飛を棲に作り長を孤に改め候時は夜景に相成申候箇様の所に御工夫御座候様仕度奉存候御細楷はまぢく御手に入候様被存候一兩字朱點仕置候法書と御比較有御座度奉存候先は御惠賜の拜謝旁早々申上候以上

即時

大星拜復

致堂老大人 執事

書簡 四九三

一〇四七

文久元年八月七日

〔四九四〕 村上誠之丞に贈る

慈君去月廿四五日より風邪の氣味に御出候處至て輕症故に藥を勸め申候ても陸々御用ひも無之候ひき然る所廿八日朝平日の如く結髪をも被成勝手の方などへも御出てさしたる事も無御座候へども何となく御面貌も宜しからず候に付いづれにも溫覆被成とくと發汗にても被成候様申し臥蓐を設け蜀葵接骨花甘草の煎湯に礬砂を加へ侷め候所やがて發汗少々頭痛も有之候故水蛭四五條囁嚅へ貼し大麥煎に糖硝を加へ候飲料等にて卅日朔日兩日は大に宜しく兩三日にては大抵常に復し候はんなど御申候程に候所兎角脈に緊を帯び數も多く候事いなものと存じ専ら消焮法を旨とし其手充いたし候然る所當二日の夜半過より猝に呼吸促迫起臥穩ならず數々冷水を御索め候故侷め候へば快く一椀も尙其餘も御呑み候其上胸上眞中より少々右に當り常より少く高く相成其場所他部に比し候へば熱度も稍盛に手を烘り深息致し御覽候様申し試み候に深息少しも出來候はず大に困難の御様子に付肺焮衝に疑なく御高年には候へ共

刺絡の外更に外に搔ひ可申術無之候故三日早朝例を照し三十二夕の血を放ち候其血黒濁一面に焮皮を結び指頭にて少々撫て候ても指を染候事無之程に御座候ひき依て刺絡の的當を致自信候右にて一旦に呼吸も安く脈も稍和らさ申候へ共尙其焮衝退かず候故胸上に更に水蛭十條を貼し其跡布巾を鎮痛水に潤し鹽糊をのし掩ひ置き毎時兩三度づゝ新たに張り替候様致し晝夜無油斷胸部を冷し且三日夕刻よりサーレツ煎に甘草膏□硝を加へ用ひ甘汞八毛ヂキタリス四毛白糍□□の散藥を作り西洋の二時頃ごとに一貼づゝを進め候様致し候所四日五日稍宜く候ひき去乍病毒の分利何分つき不申六日には焮衝の微候は大に減じ脈數なども稍少く成り候に付御高齡故に此上キリシスを得御肥立候所いかゞ可有之歟不被計候へども焮衝の重荷之肩は少々ゆるまり候様に存じ候所何を申も八十七の大齡故か七日の朝六ッ時過ぎ北山姉御御左手を探られ候て梢端少々冷え候様覺ゆと被申候故某右の方を窺ひ候に厥冷と申程に無之常より聊か冷え候と覺候様に有之候焮衝の微盛□呼吸促迫被成候節などは實の厥冷に至り候をも芥子湯の蒸湯にて忽ち溫氣を生じ候を是ばかりの事と

申しながら診脈候に既に御脈は無之候是は大變と驚き候所もはや御呼吸も頓に間遠に相成忽ち御締切れ候廿八日以來晝夜心力を盡し何とかと存じ候甲斐も無之此大故に至り候事悲哀の限りに御座候令弟義合には候へども此赴聞御承知候はゞ定て御愁戚御座候はんと存候赴聞迄如此に御座候荒迷不次

八月七日認

六日の夜浦町よりも御傳聞にて御尋ね被下候然る所其挨拶ぶりなども慥かにて聊か間違ひ候事も無之御一同に長岡より到來の菓子など御上り候ひき中々急に大故など候は思ひよらず候残念至極存候以上

〔四九五〕菅鉞太郎に贈る

文久元年八月九日

八月七日母
は深夜密か
に葬せしむ
命をせしむ
鉞太郎の如
く蓮の如く
式を行ひ

夜前も一方ならざる御厄介深更迄の御苦惱千萬奉多謝候揆らざる事にて葬期を延し候も某の心には不幸中の幸とも存じ候事に御座候別して此雨天丁度宜く候然ば夜前御用番禮葬と申事を何か事々しく唐禮にて用ひ候事にも候哉に被思候様御話御座候いかに其節貴君御即答被下候通の筋にて古禮の後世に

若寺に埋葬せりと云ふ

廢するもの尤も多く彼土と此邦と風俗も同じからず然るを東府の林氏等を首として専ら文公家禮に依り唐禮を其まゝに用ひ候は敢て禮に當り候と難申乍去凡附於身者必誠必信勿々有悔焉耳矣凡附於棺者必誠必信勿々有悔焉耳矣に候へば今時世上の薄俗其父母至親と雖も其死喪に及び候ては苟且事に従ひ犬馬の斃れ候を瘞め候も同様の様に其薄きを極め候此義は書を読み道理を存じ候ものにて於て致し難き事既に俗間にて出葬を葬禮と申には無之候や是其薄俗の間にも杭輿を設け禮服を着け送葬候の式有之故にて候某の申候禮葬の二子別段の事無之俗間に稱し候葬禮の字と見做し被下餘計の配意不被下候様尙又御申解き被下度奉頼候孟子にも養生者不足以當大事惟送死可以當大事の本文も御座候事にて死葬の事は人道の大變子たるものゝ親に事ふるの道これを捨て外に更に力を用ふべき所無之候故昨日の御申立をも奉頼候事に御座候其並方の葬禮苦しかる間敷筋は昨日御書取被下候通の筋合に有之候借妻を某名代心に供いたさせ度と申義道理に於て是亦子細も有るまじき事と存じ候へども有司の議此一事あるか爲に面倒も御座候様子に候はゞかの一通の方は御取

下げ可被下候尤も苦しからざるの沙汰を得候はん様子にも候はゞ其儘被差置被下度此義兎ても御厄介に御探索被下可然御取計らひ被下度奉萬冀候此段草々以上

九日

文久元年九月六日

〔四九六〕 恩田頼母に贈る

昨夕は揆らず御立寄被成下久々にて拜範年來の渴饑を慰し難有奉服佩候乍然喪服中不任心底餘り勿々にて御還し申上恐入奉存候何とぞ喪服を解き候後ちとゆるくと御物語申上度候さては其節御約束の貞丈雜記全部三拾二本箱のまゝ御持せ御惠借被成下殊に一函之御懇書銘謝無既奉存候雜記全部此度御庇蔭にて始て通覽を得候義何かと益を獲可申此節筆記仕居候私説中へも必ず採用可仕義可有御座奉存候先覽く拜借仕度奉冀候且御書目も御抄出御惠示被成下是又難有奉謝候追々拜借仕度品御座候御含置可被成下候將又折節御到來御座候とて松露一籃御投貺被成下珍感極て深く今夕早速亡母位前へも供し可申

私説は著述中の喪禮私説をさす

難有奉存候蛭蝟之事御書拔拜見の義是又奉謝候拜見の上尙又可申上候先は昨今の拜謝迄草々申上候以上

六日

星 拜覆

正誼 大人 執事

〔四九七〕 望月主水に贈る

文久元年九月七日

此間は銘々へ蒙御配慮恐入奉拜謝候然ば昨年中群書類從の内數部入用の義有之内々頼母殿へ乞願御側御納戸御預の御書物拜見間を合せ候義御座候ひき此節本朝葬祭の義取調へ候に付類從中散見の條々をも採用仕度さし向き武家類と申廿五卷ばかりを拜見仕度奉存候右御手にて御拜借密に御惠示被成下候義は相叶ひ申ましきや若左様にも被成下候へば殊に難有可奉存候先年頼母殿にも皆拜借被成置候ひき此節御閑中の御慰にも何かと相成可申候へば全部御拜借御座候てはいかゞや左様も御座候へば小生暗に嘉惠を被服仕候義に御座候先御様子伺迄申上候以上

群書類從目錄一寸入御覽候 七日

致堂大人 執事

大 星 拜

文久元年九月十一日

〔四九八〕 望月主水に贈る

差上候藥劑にて御腰痛半は御輕快御座候よし乍去朝の間尙御痛御座候と申御事依て今朝は加味仕差上候偕又一昨日は相願候御書物御惠借被成下難有奉存候武經の方暖樓にての評判いかゞ歎評語は餘姚の手筆に相違あるまじく被存候七書類四五種有之候間いつれの本へか寫し入れ還壁仕度奉存候暫く御稽貸可被成下候熊澤の喪祭はいかにも粗なる事に御座候跋文認め候悔齊資と申は御承知に御座候哉これはころも藩の儒者にて後に奸邪の家老を打果し自盡致し候男に御座候年齢本多茂一郎など、相しくものに候へば哀敬編取立に相成候頃本多と共に力を入れ候ものにも可有之と被存候跋の書は自筆にては無之候自書に候へば餘程見事に御座候拙藏にも詩を認め候一帖有之候所當節の書家の比に無御座候其内取出し可入御覽候先草々申上候以上

十一日

大 星 拜

致堂大人 臺下

文久元年九月廿七日

〔四九九〕 恩田頼母に贈る

和宮降嫁を
さす

相窺候へば四五日前より御感冒の御氣味に被爲入候よし定て此秋冷祟を成し候義に可有御座候千萬御保慎に被爲過間敷奉存候右の御中御懇書を以て御記存被成下殊に御知行所山輕井澤の産の新蕎麦を以て御製しに相成候麩條副味迄も御取添御投惠被成下重疊銘感奉存候脱字あらんやうに拜謝も難申盡佩服仕候義に御座候偕又別條一綴并に親王様御下りに就き候ての摺もの二枚御惠示被成下いづれも新囑に御座候毎々難有奉存候如尊教當今の時勢隨分諸地方の痛みに可相成義と奉存候段々深き叡慮も被爲在候御事の様承候へども果して右叡慮の通皇國の幸福に相成べき御事御座候はんや否小生輩にはあらかじめ何とも難申定義奉存候對州の義も近日慥かなる事を承り候に彌封を内地に被移候に相決し候義のよし對州候にては大坂城拜借の願出て候と申事に御座

候是はととも御許容は有御座まじく其上たとひ御許容相叶ひ候ても對州の御分限にてかの大城御持候事御届き被成まじく被存候乍去右等の願書御座候に付ては相應の料見も有之御申出に相成候義に可有御座候近日承り候義に付一寸申上候將又御別幅蒙仰候義誠に以本懐之義仰之通いかにも穩便の一通路御座候小生方いつにても差支無御座東隣御一訪の節一寸夫より御沙汰を蒙候へば竹間の小逕の蛛網にても拂はせ拜迎可仕候借亦玉詠御贈惠被成下不堪哀感の至奉存候誠に白駒の隙を過ぎ候様に七々日も相過候誠にきのふ乙つひのこの様にて只今に夢の様にて毎事心を傷ましめ候事のみ御座候右故御返し候は喪服を脱し候後申上度奉存候先は御懇情の拜謝申上度迄早々頓首

二十七日

大星 拜復

正誼館大人 執事

文久元年十月十四日

〔五〇〇〕 勝麟太郎に贈る

八月念四之御手書拜見仕候老母不幸に付御弔問蒙仰御香奠金二方御惠贈被成

下哀感之至不知所謝奉存候如仰老母義乍高年至て健に罷在候所某罪惡深重常不斷勞苦を懸け候義の積り候て遂遽に此大故に及び候義と痛恨無已罷在候既に忌明にも相成候義に付御弔惠之拜謝迄草々申上候荒迷不次

十月十四日

大星 謹狀

勝 使 君 臺下

附白老母臥病の以前も度々戴もの仕病中にも御丁寧に御見舞をも拜戴難有奉佩服候既に病に罹り候以前此綿便の節差上候様にと申付置候然る所幸便も無之内大病と罷成生前遂に其志を果さず斯く遺品と相成候義不堪悲痛奉存候生前申付置候義に付此度送上仕候紅麻は當年誕辰に友間より祝ひ呉候品に御座候八十七にてもらひ候品故乍如何北堂君へ差上度奉存候宜しく被仰上可被下候借山本の令妹君も御産後御急病にて御不幸誠に驚入候御事に御座候右御悔をも便次第可申上と存じ罷在候内老母の大故に逢ひ候て不本意に御無沙汰申上候御追悼奉察候御事に御座候其砌新刻之清國地圖並に洋製のうすもの御投惠被成下難有感銘無既奉存候清地圖は拙藏の廣輿記など、引合せ大に讀史の

助と相成り候薄ものも奇品始て見及び候いかにも清雅の品に御座候其は帳に可仕と存候名は何と申ものに候や御序に御誨示被成下度候右拜謝も變故故大延引恐入候

文久元年十月廿九日

〔五〇二〕望月主水に贈る

昨日は御丁寧の御手帖を以て歳末之御節儀御贈惠被成下乍例難有感銘之至に堪へず奉存候將過日拜眉之節遂御禮申上落し恐入候令郎君よりも銘々へ御祝儀被下感惕仕候いづれも宜しく御請申上候然ば例之通菲薄之至御座候へども白紬二疋のし代りに蠟壹尺呈上仕候高誼を以書劔を庇ひ罷在候拜謝之印迄に御座候御莞存可被成下候昨日の拜謝旁草々申上候以上

廿九日

美疢も御全癒と申御事奉降心候御淨寫一紙御吟稿とも愚管を附し返璧仕候令郎君御書初の底本一葉差上申候乍憚御上げ可被成下候

致堂 大人 執事

大星 再拜

文久元年十月廿九日

〔五〇三〕望月主水に贈る

過刻微物呈覽仕候處云々の御誨示御尤に奉存候其所既に心付候はぬにも無御座候へども御當主様御重職被蒙仰候以前より御物遠御座候故態と是迄通御手許迄呈上仕候義に御座候乍恐可然様可被成下候但伸鮑代りとして差上候品は乍輕菲高厨に被爲留候様奉希候先拜答迄草々申上候以上

廿九日

大星 拜復

御追書之趣恐入候以上

致堂 夫子 臺下

文久元年か

〔五〇三〕望月主水に贈る

得御惠書御動履倍御萬福之御容子詳悉慰沃之至奉存候御書益妙奉敬嘆候御吟詠も大分宜しく候へども此方は猶御申分御座候古詩手を入れ候も容易の事に御座候所今少し御再練の後に可仕其方御得力の爲に可然と相考候御再練可有

御座候箇所御心得に可申上候原詩の吾來の二字は畢竟梧桐江をふまへての義且第二句に梧桐生高岡と御座候に就て出來り候字に御座候然る所御作來の字落着無之は一ツの申分に有之候劍化の字も未だ落着を見ず是二ツ前に垂釣一簣輕と御座候て其次の段に坐調笙と有之候笙は垂釣者の調すべきものに無御座候是三ツ解脱清淨等の字面は禪佛の語に付照應無之突然と此に出候てはやはり落着なきものに相成候是四ツ箇様にてはあしく御座候御擬し被成候はんと思食候古作數四御諷誦其段落は勿論照應の字文逐段の轉折引用の典故等細密に御分解御座候上にて一々夫に類し候様に御筆を被下候様仕度奉存候夫も一氣貫穿候にあらずれば譬ば人體に不仁之所御座候が如くにて詩に成り不申候原詩の初に鳳鳥の字出候は梧桐の縁にて清陰の字は梧桐より生じ流水の字は江の字より來り韻に仲尼は鳳鳥不到より言ひ及び滄浪を以て結び候は江の字の題故に候前後左右上下主意の運用第一に御座候家を治め國を治め天下を治め候も此道理に候是細故にあらずと奉存候故申上候御草稿返璧仕候間一と御苦思可被遊候以上

廿九日

大星 拜復

致堂老大人 執事

文久元年か

〔五〇四〕望月主水に贈る

昨日は難有奉存候經宿倍御萬福被成御座奉慰鄙懷候然ば御疝氣の御疑惑蒙仰候に付直様拜診仕候處聊か右様之御様子無御座候尙乍置御邪氣の残りは御座候かと被存候間今兩三日は御服藥御座候方御爲に可然奉存候俗に申疝癩と申ものは我儘より起り候間御我まゝは被成まじく人の上に出て候はんなど心がけ候もの別して肝長に致し候はねば叶はずと一鍼を下し候義に御座候左様御承知可被成下候以上

廿四日

大星 拜復

致堂 大人 執事

文久元年か

〔五〇五〕望月主水に贈る

書簡 五〇五

一〇六一

昨日は御手教奉拜見候先以御動履倍御萬福恭慶之至奉存候然ば御詩稿御示及愚答申上候様奉敬諸候此御用意至極可然候御幕書も美事に拜見仕候尙被付御心候様に其箇所へ朱點仕置候一體の御用筆少し早過ぎ候哉とも被存候倍又硬黄の事に御座候所此度拜見仕候はすべて蠟つき過ぎ候て過日の御出來程に参り不申候過日拜見の紙豚犬戴度と申に付遣し候處至極認めよしと申し候製法に蠟塊にて摺り候様有之刷毛にてと申事無之去れば詰り六かしきかにも被存候一番最初に形の如く御出來被成候へば其後は尙巧に参り候筈に御座候蠟は成丈少分の方可能候御製しは總て白蠟の様に候所本法は蜜蠟にて御座候其儀は過日既に申上候と奉存候黄蠟は蜜蠟の事熔け候にも白蠟より手間取れ又堅まり候にも白蠟より遅く候左候へば白蠟より使ひよきかと奉存候右拜答迄早々申上候以上

十日

大星拜復

致堂老大人 執事

文久元年か

〔五〇六〕 望月主水に贈る

昨日御移とて品々拜戴仕銘感無已奉存候然ば豚犬申聞候を承り候へば金五郎御様謠稽古御座候由此節の御様子にて高聲御發し被成候は甚然るまじき御事と奉存候其故は左なきだに肺病の御患御座候はんかと奉氣遣候所御座候然るを求めて肺機を御勞し被成候義あるまじき御事に御座候素人の説に折々高聲を發し候は健康を助け候事の様申候へども決して左様に無之肺臓の弱き生れの人は高聲をこそ成丈慎み候方宜しく候御稽古事に付箇様の義申上候もいかゞと奉存候へども外さまならず候故御忠告申上候序に申上候かの差上置候管にて成丈頻々大氣を十分に御腹中へ御吸込く被成候様致し度候是は肺機を養ひ候第一の良法此上無御座候昨日の拜謝旁伏藏なく申上候以上

廿四日

大星拜手

致堂大人 執事

文久二年正月廿五日か

〔五〇七〕 望月主水に贈る

昨日入御覽候別條早速御擲返右圖御不審の廉を以て高柴の好圖御惠示被成下奉銘佩候御不審并に此圖にて心付候へば入御覽候品は全く倉卒に不心得にて認め候ものと被存候然ば兵馬より差上置候天道溯源聖教鑑略等は既に御還しに相成候義やもし只今に御手許に御座候はゞ溯源にても鑑略にても一寸此者へ御轉附被成下度奉冀候右御返しに相成候はゞ其段御答可被成下候以上

兵馬は宮下兵馬

廿五日

大星拜手

致堂夫子 執事

〔五〇八〕 京師の朋友に贈る

罪譴中著はし候文を門外へ出し候は如何に候へども固より表立ち候事にも無之且幽囚廢錮の間にその懷を詠し其意を抒へ候事は和漢ともに其例少からず又僻陋の賤名高貴の御方の御聞にも達し乍内々作文御所望を蒙り候など意外

文久元年(編次を誤れり)

之榮幸とも可申儀に付竊に櫻賦一篇を録し差出し候可然御取計らひ可被下候此櫻賦を認め候には聊か存する旨有之候文字の出處等は此度恪二郎へ申付箋釋を施させ是にて命意の在る所も某の本量も大方相分り候へば再び爰に申に及ばず但一通り申度は賦學の事にて元和以來文運大に開け別して近來は詩文ともに世に達者多く相成候へども賦に至ては舊に依て彼土の作者と其美を媲美べきもの一首半篇無之候むかしの菅江諸公の集より近人の集を歴覽候に誠に興のさめたる事に候一通り文章など出來候ものも賦は本朝にては六ヶしかたとひ律賦は可なり出來候ても古賦は某の作り候如き決して出來かね候様心得候が多く候某少小より本邦の文章開け候など申ながら賦の出來候人古今來絶て一人も無之候は漢士へ對し耻入候一事と存じより、心掛け遂に其法を心得申候卅歳の夏望岳賦を著し先師一齋翁へ示し候所邦人の賦此賦を以て第一とすべしと評せられ候ひき其頃より防海の事に致心配司馬法兩之の教に因り夷を防ぎ候は夷を以てするにしかずとなし専ら西洋學に打かゝりその敵兵の術を講究候て諸藩よりも其教授を頼まれ寸暇を得ず候より作文などは自然

に廢絶同様に候ひし所寅年嚴譴を得此表に屏居以來世とかけ離れ身も心も閑暇に成り候故又々舊習に引かれ彫蟲の小技を慰み昨春は櫻賦を作り候尤も徒作にも無之聊か意を寓し候所有之候惟卅歲時代に作り候望岳賦は頗る豪放の氣味に候ひし所此賦は品柄故に纖巧の意を免かれず却て年少の作の様に見え體も僅かに六朝に由り兩漢に遡り候事能はず是其恨むる所に御座候乍去本朝に漢字あるこのかた二千年來賦に於ては櫻に限らず何題にても某の此賦の右に出候は無之又漢土の人にも多くは譲り申まじくと存候乍去賦などのことは經濟有用の學に比し候へば取るにも足らぬ末技にて當今の經濟有用の學は和漢の學の上に西洋の諸學科に通じ五大洲を綜括し候大識量を具し候にあらざれば眞の有用の學とは難申候但し賦の事至ての末技には候へ共文の花とも可申當今聖明の御宇にあたり本朝二千年來見るに足らざりし事の忽ち見るに足り且漢土にも耻ぢざる程に相成候は聖天子御文明の御餘光にあらずと申すべからず近代佐田川昌俊某同様陪臣の身に候へどもその讀み候吉野山の歌飛鳥井黃門雅庸卿の御耳に入り御感心の餘り後水尾帝の歡聞に達せられしことも

日外承り及び候あはれ賢友の御懇命を蒙られ候御わたりの御はからひを以て昌俊かよみ歌の如き半にも至り候はゞ生前の慶幸死後の顯榮此上あるべからずと存候乍去恐れ多き事敢て望む所に無御座候但此末技と雖も聖明の御末光と奉存候故此妄念にも及び候事に候宜しく祈怡亮了

〔五〇九〕 松田直友に贈る

文久二年七月十二日か

過日暑候御惠訪被下且何よりの一品御投與乍毎度感刻の至御座候然は其節上げ候櫻賦註餘り急卒に寫させ候故誤脱をも免かれず甚見苦しく高貴の御方の御覽に入れ候にはいかにも恐入候事に御座候乍去過日の所にては長野明朝出立と申事故止むことを得ず其儘差出し候へども何分安んじかね一通寫し直させ候につき町宿まで差出し置候御落手の上京師への便り次第正親町家へ御差上可被下乍御手数何分も所冀御座候過日の拜謝旁草々以上

七月十二日

大 星

益甫賢友

書簡 五〇九

一〇六七

猶々過日の寫しには脱字有之候を跡にて存付候其儘にては意味聞え兼候所可有御座と存候故前文の通りに候宜しく御計らひ可被下候

文久二年八月廿二日

〔五一〇〕 勝麟太郎に贈る

八月に入候ての芳翰相届拜見仕候北堂君此秋暑にも益御萬福被爲渡恐慶之至奉存候然る所相伺候へば使君傷冷毒之御氣味にて久々御引先月御驚遷にて押御出勤御登營被成御座候處御再威の御様子にて當月に入候迄も御出勤無御座との御事諸々散々の御事奉存候何様も御保愛御爽快に被爲趣候様奉禱候當時麻疹にて御子様方御感傳と申御事格別御重症には無御座候哉皆々様最早追々御肥立被成候御事や奉伺候其表コレラも往々有之よし何分も萬端御用心に不可過奉存候清國の模様も一寸蒙仰異聞を廣め奉謝候先便別幅申上候義に付云々蒙仰稍安心難有奉存候御政事御改革の義何卒浮きたる事なく大人虎變の場奉企望事に御座候洋書端本の義も難有奉存候後冊有之候義に候はゞ御示及奉願度候御含置可被成下候

借亡母小祥忌も本月五日に相濟み候近地にも候はゞ小鹿様にては御招申上齋飯奉獻可申の所隔地其儀不能依て心計其節之備もの一折送上仕候御晒存可被成下候哇巴の御航海御模様はいかゞに御座候や彌と申事大凡にも御分被成候はゞ前廣一寸御報聞奉願候先は御不例の拜候旁草々申上候秋暑猶退かね候美疢御快全御座候とも尙折角御自玉被成御座候様奉企願候已上

八月廿二日

大星拜手

勝使君執事

乍憚北堂君御前へ可然御致意奉願候已上

〔五一二〕 八田愼藏に贈る

文久二年八月朔

秋霖兎角霽かね候倍御萬福御座候哉令愛方御麻疹御續き御順快にや相伺候然ば此品乍些少從江府到來に付右御見舞之印迄掛御目候御莞留可被下候將過日は法苑珠林全部御惠借被下辱奉存候何かと廣異聞申候佛も此邊の所を委曲に致し候はんとし候へば鍊陋百出高明の人をしては厭棄せしむるに足らず候い

づれ下根の人を接し候爲と奉存候全部百廿卷合冊六十本致完璧候御査入被下
度候餘留面謝

閏月朔

大 星 拜

澹庵 賢友

〔五二二〕 齊藤友衛に贈る

文久二年九
月五日

過日は御繁務の御中蒙御惠訪難有奉存候折節望月隠棲に大病人有之一家同様
の義右手充に取掛り居不得拜晤恐入且遺憾亦甚奉存候爾來冷氣相加り候御履
況愈御碍も不被成御座候歎奉伺候然ば當年又コレヲ病流行江府道中筋上手御
領分坂裏邊迄も盛のよしに承候へども御城下は幸に稀々にて御座候所いつ傳
轉申まじと難申候故隨分豫防の手充をも仕候義に御座候然る處當朔日の夜妻
儀猝に其症相發し一旦に餘程危篤にて候ひしかども手充を以て幸に一死を免
かれ候乍去尙今日迄も全治に至らず候仕合に御座候しかし最早氣遣ひも無御
座候間乍憚御省念可被成下候但し妻不快以來傳聞候へば此近傍にも同症のも

西條は松代
町の南に續
く村名なり

の兩三人有之西條邊にても往々御座候よし過刻浦町長屋に差置候もの罷越し
申聞け候に同町金作と申もの母子とも日を連ねて吐下を發し死亡候と申事左
候へば御城下にも轉傳流行候事と被存候就て御上の御上甚心配仕候左なきだ
に御虚弱に被爲渡候餘程の御手充御嚴重に不被爲在候ては被爲叶まじく奉存
候第一に御居間向は洗氣の術と申を施し可申事に御座候洗氣と申は空氣を洗
ひ候と申事にて既に宅にても右申上候通妻朔日の初夜過ぎ發病候所二日の夜
迄は看病手充のみにて何心も無之候ひしに其夜に相成り某何となく惡心を覺
え候故製し置き候豫防藥等頻りに相用ひ候處暫くして又初の如くに惡心の氣
味御座候病者とても前夜よりの義何も鼻にかゝり候臭氣等御座候故には絶て
無之依て空中大氣に申分有之候歎又は特異の劇病に付

此特異の劇病と認め候事此病にかゝり候者を御目撃御座候迄は御不審に可
在御座候所誠に恐るべく驚くべき劇病に御座候某など西洋醫籍中にて其症
候を委しく存じ罷在候故書中有之候通に存じ候ひながらすさまじき大瘧
の様子には實に驚き申候病者苦痛候と雖も其苦を訴へ候聲も出て不申目晴

上竄の體誠に生者の姿無之召使ひの者等只々驚愕冷汗を流し候
 病者之近傍に鼻觀にかゝらざる惡氣有之候故と心付早速右洗氣の手充に及び
 候左候所悴なども夕刻より腹中何となく不快を覺え北山姉なども氣分何とな
 く常に違ひ候心地致し候も一時に爽快を覺候と申事某の惡心も其儘常に復し
 候是に由て考へ候へば此劇症の原因多く空氣中の汚濁に罹り候事と被存候依
 て筒様御城下にも此症流行仕候に付ては御上にて此御手充無御座候ては叶は
 せられまじき御儀に奉存候御醫師の内倉左等右洗氣法心得可居候早速被仰度
 義と奉存候其他豫防法中腹背に塗り候よき手充も有之候某多年籠居薄弱の體
 を以て晝夜看病候て聊か其氣に感傳候はず候も全く豫防の手充を存じ候故に
 御座候一旦劇甚の症を發し候に至りては中々其病にも狎れ候はぬ庸工の手の
 及ぶ所に無之某隨分此劇症の手充をも心得罷在刺絡吐劑鎮痙藥芥子泥芫菁膏
 蒸溜藥等普く手を盡し候と雖も劇甚の大痙攣を降伏候事能はず候處かのガル
 パニのスコックマシネを以て不思議に大功を得一死を免かれしめ候右の器コ
 レラ病にも賞用し候と申す事は書中に於て心得候へ共形の如き妙功有之候は

倉左は側醫
 倉田左高

んとは存じ不申候ひき誠に人力の外の働き有之候依て先年一文字屋清八献上
 の御道具は晝夜とも御側去らずに被差置候様仕度奉存候是は此度實驗の上に
 て申上候義に御座候實に御大切の御義に奉存候故此段貴君迄内々申上候夫々
 御用意御座候様仕度奉存候以上

九月五日

大 星 拜

齋 藤 君 几下

〔五一三〕 齋藤友衛に贈る

文久二年九
 月六日

過刻拜答中倉左コレラ御豫防として御臍へ被爲附候御藥差上候と申義不審の
 廉勿々申上候義に御座候退て思索候處愈其意を得ず候全く倉左の杜撰に出候
 事なるべくと被存候其故は臍部は腸間膜に當り候腸間膜コレラ病に於て何様
 の切緊なる關係有之候や是不審の一に御座候コレラ如何なる病因を以て發し
 何故に臍部に其豫防を施して其益有之や是不審の二に御座候其藥品の何たる
 を問はず此兩不審有之候に付西洋醫學の慥かなる法には無之倉左一己の料簡

鳥、倉とは
島田長庵、
倉田左高、
二人を謂ふ共
に側醫なり

に出候事と存じ候義に御座候此劇甚危篤の病患を何等の義と心得又御上御豫防の義を何様の事と奉存候て經方にも無之杜撰妄作の處方等差上候哉尤容易ならざる義と存候右危患御城下にも追々傳染候の兆も有之候故御上の御上をば此上なく御大切の儀と存萬に一つも右様の御患の不被爲入候様仕度奉存候故に其責無之邊方も心配の餘り貴君迄申上片時も御猶豫難被成事故に今早晨鳥、倉兩人御呼出し御尋御座候事人臣の本分本より斯あるべき義に御座候然る所鳥田に於ては不心得旨を申立候心得ざる筋を其儘申立候は直道の與する所夫迄の義に御座候倉田いかなれば不心得の義を心得候體にて右様の義を御豫防候て差上候哉甚如何しく存候乍去倉左が右落度等は自ら夫れを治め可申其筋の御役も御座候義に候へば某輩右を論じ候には及ばざる義に御座候所實に容易ならざる流行病の容體にも候故いか様にも御嚴重に御豫防の御手充被爲在度奉存候を其差上候藥味は姑く差置き服藥を鼻へさし候同様當て違ひの御部に御附藥差上夫を以て御上にも眞の御豫防と被思召貴君方にも御充分御手充被爲行届候と御安心御座候はん事誠厲ぶみ奉存候付更に此番を認め差上候

前書申上候條早速御突留西洋醫藥の義實に御素人方にては御不分りなるものに御座候乍去其素人の不分りを頼と致し自欺欺人の小人世に多く候には差困り候義に御座候折角の御豫防御座候ても其實效無御座候ては此節柄誠に安寢出來かね候程の義に付先書申上候方ちと寛に失し候様に奉存候故尙申上候幸に御焔亮可被下候已上

九月六日

恪 二郎

友 衛 様

〔五一四〕 藩老矢澤將監に贈る

文久二年九月十六日

コレラ病御城下に流行候義修理殊の外心配仕罷在候所今日傳聞候へば大分諸所に有之候よし何卒其勢盛なるに至らず跡を絶ち候様仕度奉存候然る所今晩荒町に火葬有之武靖様御祭禮と申にけしからぬ義夫に虚實は貞かならず候へども其火葬はコレラ病にて相果候ものゝ様に傳聞仕候依て修理以外の外に驚愕是等の義何分黙し難罷在自然死者多く相成西越にて火葬候節其病毒穢氣御殿

の方に流れ百神擁護の御場所には候へども乍恐御居間竄入候まじと難申左候節は誠に以御大切之義又御家中也市中也知らず識らず其大害を被り候義忍びざる筋に有之右に付別紙草案を認め親類を以て申上度平左衛門方迄申越し候處別紙の趣斷り遣し尙外一兩箇所申遣し候へどもあやにくいづれも留守にて不相辨候此義速に候へば速に候程人に利多く遅なはり候へば遅なはり候丈害多く御座候義に付常を破て私より別昏之義申上候御上の御上にも關係御城下士庶數千人禍福の間に立ち候義に付宜敷御勘辨可被成下候以上

九月十六日夜

佐久間恪二郎

矢 將 監 様

(別 紙)

コレラ病御城下に彌滿候はざる様暫く火葬御差留御座度と申義申上
 火葬之事釋門にて習用候義には候へども聖人の大經大法を以て御政治被爲行候御上よりは衆庶に孝道を被爲訓候爲に固より御禁斷有御座度義に御座候者拙
喪禮私説此義を論じ候箇條御座候に付御然る所只今其大義を論じ候に暇あら見合せの爲相添掛御目度と修理申聞け候

西越は象山
 (山名)の西
 御座に在り
 今、清野村
 に屬す荒町
 は松代町の

ず此節御城下市中往々コレラ病にて相果て候もの有之候よし右病にて相果て候もの致火葬候時は其の尸骸焦爛に至らざる前體中に充滿候病毒火力の爲に駆り出され臭氣と共に風ある節には風下に流れ風なき時は其致火葬近傍に致散漫大に人の康健を妨げ亦多くコレラ病を受け候様相成候此事實に容易ならざる筋に御座候既に當年も小田井岩村田邊コレラ病の死者致送葬候寺院住持役僧に至るまで残らず死絶え候が往々有之趣に候察し候所これは全く其寺院の三味場にて田舎の弊風に從ひ常例に任せ田舎にては送葬に念入候心得にて有徳のものなどは火葬に致し候が也通例右病者致火化候より近く其毒に中り寺内悉く死亡候に至り候事と被存候又一郷一村多く彌滿致し候も火葬の害許多と被存候漢土の制を以て申上候へば宗廟社稷帝城の外三里の内戸を焚く事を禁斷候掟にて候火葬の度々に臭穢の氣遠近に散滿候へば元來斯こそ有り度義に御座候然る所御城下近くの三味場西越は御殿向より五町を離れず荒町は舞鶴山御宮に山一重を隔て候のみ西越の火葬氣必ず御殿にも及ぶべく荒町の臭穢必ず兩御宮に流れ可申甚恐入候事に御座候況や今明兩日武靖太明神御祭禮と申上候に今夜荒町焼場に火葬有

一町名なり
舞鶴山は白
鳥山と謂ひ
西條村に在
あり

之趣に相聞え候以ての外の大不敬に存候八月中の祭禮兩日すら火葬に論なく御城下一統送葬の義不相成事かの様承知罷在候八月中の祭禮にて既に如此に候然るに舞鶴山御祭禮に當て其近傍にて火葬を取行候御役人も多く御座候ひながら是等の義心付不申候事誠に不審の事に存候市中の祭禮と御宗社の御祭禮といづれか重く、いづれか軽く候はん議論を待ざる義と奉存候乍去此義は尙篤と御評議御座候て御法令曉と相立候様仕度奉存候唯差向御城下士庶數千人の爲暨くも御猶豫難相成義と奉存候はコレラ病死者火葬の義に御座候西越にて燒き候節は其氣御居間向迄及ぶまじと難申請洲町、殿町、馬喰町、紙屋町邊尙これに近く候荒町にて焚き候時節東南風にて起り候へば御家中市中とも大半其氣を受け申候右に付流行之コレラ病影響無之相成候迄御家中并に町町外とも火葬之義不相成候御觸早速有御座度奉存候前にも申上候通三味場兩所とも甚然るまじき場所の義に付此御序を以て事なき所に改移有御座度奉存候差向候所はコレラ病いかう彌滿仕らず候内火葬を被禁其傳染を殺ぎ候様仕度ものと奉存候コレラ病に罹り相果て候ものゝ親類縁者多く忌み候て卒中風霍

清洲町以下
各々松代町
の一町名なり

亂など申なし候も往々有之趣に候へば此節火葬御差留もコレラ病のものに限らず病死のもの一切他日御沙汰有之候迄火葬不相成候と有御座度奉存候右之次第今夕近傍に火葬有之候に付存付疾速に御用番迄申立吳候様脩理申聞け候外義と違ひ誠に容易ならず候義に付不取敢認取申上候宜く御勘辨可被成下候已上

九月十六日夜

佐久間脩理親類

〔五一六〕 勝麟太郎に贈る

文久二年九
月十八日の

去月十九日之御賜教拜見仕候閣府此秋冷にも益御祥祉被成御座奉慶候借又十七日御軍艦奉行並被爲蒙仰候段御報知被成下愛度御儀奉敬賀候北堂君にも嘸嘸御満悦被遊候御事と奉存候何とぞ無程其真に被爲進候て北堂君御盛の御間に御任官被成御座候様奉遙祝候態と御着代進呈仕候御悦申上候心ばかりに御座候恐惶頓首

九月十八日

大 星

勝 使 君 執事

附啓御附書拜見仕候て驚入候八月八日御出勤御歸館後より流行之コレラ病に御罹り殆ど御絶息三度二時間御精神御昏瞶御危篤之所幸に御生路を被爲得候由先以吉人天祐と奉慶賀候爾來追々御快方乍去尙御氣力御整無御座候段被仰下御尤に奉存候何分も御加養專一に可被遊候此地もコレラ多く相成死亡候もの少からず依て預防の手充をも自分にも仕候家内にも厳しく仕らせ候義に候所順子事當朔日の夜五ツ時過よりコレラに罹り一旦は餘程危く存候ひし所最初より某側に罷在候て手充方由斷なく仕其上ガルハニセスコツクマシネ奇效を奏し救ひ留め候義に御座候是も追々快く御座候へども一體劇病故か肥立方手間取れ只今に平臥勝に罷在候乍去今日は大分又快き方と申候て次の間などに出かけ見候程に御座候間御過念被成下まじく候御館内其外様何の御患も不被成御座候歟某方にて随分預防専らと仕候故か某はじめ皆頑健に罷在候乍去順子コレラにて不思議なるとを致實驗候某其側を離れず罷在候事二夜一日に候所猝の病者の上發汗等も無之聊か鼻にかゝり候穢氣など無之候へども折

折惡心を覺え候依て次の間へ出て新鮮の大空に當りカムフルスビリチユス等を滿身に塗り龍腦丁香の類を噛み候とやがて常に復し候又順子の臥せり候側に居り久しく時を移し候と惡心の氣味漸く生じ候是は某のみならず下婢輩に至る迄皆此事を訴へ申候依て其時に緊しく其手充仕候故家内一人も傳染のものなく今日に至り候其間順子の衣被衾蓐の類風日の下にて屢硫黄薫法を施し臥室をもコロール硝酸等を以て穢氣を驅り候様仕候左様致し候へば側に居り候ものも惡心を覺えず當人も至て快を覺候と申候此實驗に據り候へばいづれにも此症の病者より發し候蒸氣等に人の五官にかゝらざる微細の毒有之人の口鼻等より侵入候かと被存候此事をかねて心得居り預防候はゞ随分防ぎおふせ候はんと存候其表大醫達の料簡はいかゞに御座候哉御承知の義も候はゞ御報聞奉願候黒痘の義も被仰下誠に新聞に御座候治方キニネ宜しき趣硫酸キニネにて勿論宜しき義や原書中治験の事御座候はゞ何分も御抄出を被命御投惠可被成下候偕又先達て奉願候ケレオソットを採得候方二通此度御惠賜被成下難有奉存候ヘルセリウスの方に御座候へば何とか出來可申被存候何かと大御

手数の義千萬奉多謝候將順子此度の不快に付取扱ひ書さつと録し入御覽候其表大醫衆も此症にガルハニを用ひ候哉其機力天庭の部に當り候と手足の痙攣一旦に弛み候と申は某藏本エレキトリセストローメンなどにも見え不申某此度撥らざる試験に御座候洋書博覽の衆へ御尋御覽被下度奉存候以上

〔五一七〕 勝麟太郎に贈る

文久二年九月十八日の

九月朔日夜五時過某致讀書居候所へ順子參り先程より何となく悪心を覺候趣申候に付マグネシアにヒユヘランドの芳香散を和し服させ候所悪心收らず少しく悪寒の氣味も候とて手を出し候見候へば皮上一統に粟を生じ候脈は常より少し縮小候様に候ひさやがて吐氣を催し候とて椽先へ出て一兩吐致し候に兩手指端より麻痺を覺候と申候故直に流行之コレラと心附きかねて用意に製し置候吐劑吐根十氏吐酒石一氏の散を微温湯を以て一頓に服させ候て更に快く一兩吐有之其味苦しと申し夫にて吐氣收り候に付幕上に伴ひ臥させ候所手足攣急甚しく手指皆屈まり足も曲り足の指は或は内へ屈まり又外へ翻り候手

の痙攣左の方尤も甚敷候故左臂に刺絡を行ひ放血七十目許夫にて暫く緩み候様存じ候所やがて全身に大痙攣を發し呼吸促迫目睛上竄口吻ゆがみ聲出せず唯咽喉の間にてキ、と申候のみ手足とも攣急緊曲甚しく少しく怠り候かと存候へば又忽致發作候依てカミルレ薄荷纈草接骨花の泡劑にラウダニウム三十滴ホフマン二十滴薄荷油五滴を投じ是に兼るに硝酸蒼鉛一氏白糖を研和し用ひ手脚厥冷候に付手は頻に摩擦致させ足をば芥子湯を以て始終蒸させ腓腸に芥子泥を貼し候へ共發作益急に候故更に頂上と兩膊とに芫菁膏を施し硝酸蒼鉛と前の泡劑にラウダニウム等を加へ發作の間を窺ひ頻に投じ候へども痙攣鎮らず末には發作の間言語出來候ても目睛の上竄本の通にて當人にて何故に目が見えぬ哉と嘆き候右の如く由斷なく手充致し候へども著しく效を奏し不申候に付ガルハニセスコックマシネコレラに效ありと申義を存じ出て一昨年手製致し候一基を取出し装置致しグレイデルの一ツを當人に介添を以て握らせ其一ツを某左手に握り右の大指と中指とを以て先づ兩眉端を押し試み候所夫迄黒睛上竄角膜腫かに現はれ候のみに候ひしに兩指を其部に當て候や否や

目睛忽ち下に降り常の如く相成候當人は勿論傍に居り候ものも皆其奇效に驚き申候更に奇と可申は手足の緊曲候もガルハニの力天庭の近傍に當り候と一時に常の如く舒ひ申候其速かなる事影の形に隨ひ候か如く實に不思議に御座候書中にもコレラにも稱用候と申迄にて委しき事無之此天庭近傍にあて全身に瘧撃を弛め候事は探らざる試験にて誠に驚き申候其後發作昏瞶に至り候も毎時此部に此機力をあて候へば忽ち致醒覺瘧撃も除き候爾後甘汞一匁一小時とに前の泡劑の微温なるにて用ふ水瀉兩度
二日食氣なし氣分は大分宜しく發作間遠處方甘汞泡劑昨の如し晝後食機少しく動く稀粥に葱羹山椒生姜を加へ與ふ水瀉一度
三日處方舊の如し甘汞の威齒齦に現はるゝを以てこれを止む屢發作す泡劑中ラウダニウムホフマン薄荷油を加ふ膳には稀粥にラツキヨ漬を與ふ折々スコツクマシンネを用ふ午時葛糖湯を望み候に付遣し候所忽ち瘧を發し昏瞶に至るガルハニ機にて即ち鎮る
四日處方昨の如し物を食する度とに微しく發作す食餌後スコツクマシンネにか

かり候へば少しも發作せず黒物を下利す

五日早晨一發朝飯後一發依て頻にスコツクマシンネを用ふ氣力頗る復す夕刻さきに越後にあつらへたる濱燒の小鯛届く粥に加て少しく給へ候所やがて吐を發し候爾後熟したる菜蔬の外與へず

六日朝五時前僅に一發泡劑舊の如し食機頗る動く次第に快し

七日發作なし食機ますゝ進み氣力愈加る泡劑本の如し

八日益快

重陽入浴氣分いよゝよろし

右の如く次第に快方食機大に振ひ候に付食禁をも嚴しく申付多量に給へず候様申聞置候所十一日に當て某樓上に罷在候間に種々のものを給候よし赤蒲葡のモストを飲候上是は洋書此病者に宜しき趣有之候故許して遣し候某の不在を幸に燒たる柿二つ白玉粉にて製し候餅のしるこを乍小椀四盛給へ候と申事右は晝飯も葱羹にて大抵給へ候上の事故か大にあたり候て又吐を發し候乍去瘧撃の氣味は格別無之故イヘカコ十匁カミルレの泡劑にて飲せ候此日餘り色々のもの給候と承候故

滯食を除き候爲に快吐を催促候事に御座候夫にて吐も鎮まり快眠候て先何事も無之候所肥立へ参り五六日の損には相成候事と存候朝日の夜四ツ時頃より八時前迄大抵昏冒の様子にて候ひし故か此節快方には候へども精神ちとうとく成り候て宜しからぬ品と申候ても聞譯なき子供の如く給へやうくと申には困入候尤も今少し快方候はゞ可宜と存候此義は北堂君御案思を奉増候といかゞに付御切去り唯前ばかり御覽に御入れ可被成下候

文久二年九月廿二日

〔五一八〕 赤澤助之進に贈る

此御時節柄御國家の御大事と奉存候義御座候乍去何分認取等を以ては難申上是非とも御面上にて申上度奉存候御宗廟御社稷の御義を被爲重候はゞ去る午年四月中主水殿屏居迄御出向き愚衷御聞届被下候例を以て恐入候へども是迄御命駕被成下候様仕度奉懇願候此段脩理義私より密に申上候様申付候に付申上候宜く御勘辨可被成下候已上

九月廿二日

尙申上候前條の義無餘義次第には御座候へども何卒隱密に人の耳目に觸れざる様仕度奉存候右には究竟の計策有之候此節致堂殿麻疹後追々快方には候へども尙平臥の體に御座候御間柄御見舞と被號候て此方へ御出御座候はば誠に御子細も有御座間じく又修理義は望家下屋敷の構内一と住居も同様に付此度麻疹熱等にも被頼候て治方を施し裏口より日々見舞候□□御座候右の次第に御座候へば致堂殿隱樓上にて拜見申上候はゞ尤隱密の義と奉存候御勘辨可被成下候且申上度と奉存候大事も時機後れ候ては其詮も無之義に付何分御疾速に御果斷可被成下候以上

赤 助之進様

佐久間恪二郎

〔五一九〕 藤岡伊織に贈る

文久二年九月廿四日

秋霖開霽候へども冷氣相加り候愈御碍も無御座候歎御隱居様御近況委しく相伺度候然ば又々乍御邪魔夾竹桃春蘭も可然奉冀候夾竹桃いかゞ致し候ものや例の貝殻蟲兎角絶かね申候隨分雨にも打たせ風處に差置候へども頑固に絶え

不申何か氣候にも關係候哉に被存候先は右拜願迄草々以上

廿四日

附白坂裏并に阪木宿邊コレラ病殊の外多く門並免かれ候は少しと申事一昨日昨日續いて承り申候いやなる事に御座候何とぞ此御城下には流行候はぬ様致し度ものに御座候豫防藥又々差上申候江府も大分流行と申事にて別紙防法板行に相成候とて蕃所調所の出役門人より相送り候御心得の爲掛御目候某藏本の醫書中右に漏候事も候故其分譯出候か有之候まゝ一同差上申候御書留も御座候はゞ其後御擲還可被下候以上

藤岡賢友 几下

星 拜

文久二年九月廿五日

〔五二〇〕 赤澤助之進に贈る

昨日夕刻友衛より承り候義も御座候て一昨日之拜謝旁別番申上度認め掛候所致堂殿耳邊の痛所劇痛迷惑と申事にて罷越膏を製し舖き候等にて遂夜陰に相成候故今朝別番御内々御手許迄差上候外に省愆録一冊附上仕候是又御内覽可

被成下候一昨日之御禮私よりも宜しく申上候様申聞け候以上

九月廿五日

佐久間恪二郎

赤 助之進様 風呂敷包書物添

文久二年九月廿六日

〔五二一〕 村上誠之丞に贈る

先達ては御託し申置候雜書とも御手数に飛脚へ御渡し被下辱且産婆書并に火藥の小冊も御代市之上御送り被下感銘之至又其後軍中醫事割記をも御調へ被遣被下毎度御手数之事宜謝不可申盡候其時々御佳勝之御便承り不堪喜慰候又御役所にて板行に相成候虎狼病手充豫防書付御惠送被下是又辱佩荷淺からず候此表などは尤も高燥の地ヒスヘランドなどの説に據り候ても冷疫は多分行はれ申まじくなど存じ居候所尤も更に高燥なる追分驛邊殊の外はげしく流行夫より追々近傍に及び當城下にもひたと流行往々死亡のもの有之候所此五六日少し落付候様承候御惠被下候書付并に某心得居候等の豫防随分家内どもへも申諭し服藥なども致させ居候所意外に當朔日の夜も順コレラを發し候て

書 簡 五二一

一〇八九

一旦は大心配いたし候幸に手充も届き候て救ひ留め申候段々其候證用藥の事等も書上にて心得居候へども親しく手かけ取扱ひ候は此度始めてに御座候一と修行に相成候夫にガルハニのスコックマシンネお順の症に妙効を奏し候には誠に驚き申候一昨年か御代市被下候エレキタルストロイメンなどにコレラに稱用の事は一寸見え候へども簡程迄の義とも存じ不申候所用ひ試み候て唯々不思議に存じ候其發病の節の容體并に手充且スコックマシンネにて効を得候事別紙に其治驗を録し小跋をも添へ候て此度御目にかへ候是をば内々杉田へも御示し被下一評を御乞ひ可被下候申分有之候は、後來の爲にも候間助言被下候様御頼被下度候又スコックマシンネの此症に妙効有之候と申も多くの病者に試み候て其慥かなるを究め申度候書中に随分さくと申事は候へどもお順に餘り妙効有之候故誰々にも此症に其通り妙効あるべき哉却て疑念も有之候故に其表之大家に話し候て共々其試驗を得申度と存候某手製之品は其エレメント徑二寸高さ三寸六分の銅桶に瓦甯を容れ其内へ同じ高さにて徑一寸一分の亞鉛甯を納めたるを二基連ね候ものに御座候始めて仕かけ候時は一人にてはち

と當りかね候程の力に御座候次第に弱く成り候へども此エレメントの事は御記憶候て杉田へ御話し可被下候段々色々の御手数に相成候故其御禮かてら山水畫を卒業當月へ入候は、送上候はんと去月末より手始致し置候處搔らざる大病人にて暫くの内晝夜大騒ぎを致し候別紙にも認め候通此節は大抵快く候へ共胃腑けしからず損害之病と相見え少し過食致させ候ても其祟速に相顯はれ候依て此節にても食事には某必ず付き居り候て其概量を成し候左なく候と兎角過食に相成候右之次第故何分心靜かに晝に取かゝり候事能はず先其儘に致し置候其内には卒業差出し可申候暨く御猶豫可被下候借長崎屋洋書取調の事も御紙表之趣にては餘り埒も無之様子に御座候かいかゞ致し候ものや何分も書目相分り次第かねて御頼申置候書類外へ參らぬ様御賣留め可被下候料は直に御廻し可申候木村軍太も物故のよし氣の毒に存候コレラ病にても候ひし哉借又アタラス同人遺品を荒井何がしに御申談し御引受可被下との事宜しく御頼申候リニバツクナチュールファンテメンヌは或人より御借受け先御示し可被下との義不堪渴仰候是又宜しく御頼申候先達て島津泉州歸國の節川崎の向にて

供のもの英人を殺戮候との義御申送り被下候處其後公邊にていかゞ御裁判御座候哉近日承候へば薩藩の蒸汽船品川沖々二艘出帆候處遠州沖にて英佛二國の船にて取巻一艘奪取り一艘は逃げ延ひ候て無難と申事薩藩の届けは無之候へども廻船問屋の注進にて事相分り候趣にも致沙汰候虚實いかゞや慥かなる義御承知に候はゞ御聞かせ可被下候此間清左衛門媳參り浦町にて御碍も無御座候義承候御安心可被成候氣の毒なるは金作に候母子とも三人厘の間に死去大木の愛子もなくなり候皆コレラの様子に候其表にも往々有之よしの所御近傍迄に及ばず候て誠に御天幸に御座候追々霜寒折角御自愛可被成候一事差向き緊要之義有之是は別番に認め候御一視の上何分も御骨折可被下候以上

九月廿六日認

明

村上令弟

文久二年九月廿日

〔五二二〕 勝麟太郎に贈る

霜寒之時御氣體其後は倍御爽快に被成御座候歎奉伺候北堂君愈御安裕に被爲

入候哉順子事も續て順快昨今は餘程肥立申候乍去兎角色々のものを給たかり候には困入候此分にて食禁だに嚴守候へば十日前には結髪も出來可申と被存候必ず御過念被成下間敷候某依舊頑健幸に御放念奉願候儲又差向候緊要之一事有之候御用多之御中へ相願候も恐入候へども何分も御鼎力被爲添被下度乞願候弊藩にても此度御大政御變革にて參勤等御弛めに相成候に就ては是迄舊式に依て誤り製造致し置候大銃之分残らず改鑄更に其數をも増し候て武備を整へ申度と申事にて其儀屏居之某迄も重役共より意見を尋ね候義に御座候依て兼ての持論に従ひ當國山多き所にてはスチールチーヌの輕礮の式を用ひ度趣愚見申候所多分其説行れ可申被存候然る所是迄多年グシユキョットギイテレイの書手に入度心掛候へども手に入不申諸家アルチルレリーの書略説有之候位にては實用に臨み事を缺き候其上此度同口径の砲數多く製造候はんと申に鑄工任せにて是迄の俗法に依て眞かねを入れ鑄立候様の事にては内外共分釐の差無之様には出來かね候義に付此度は是非とも彼國ギイテレイの法に従ひ無垢に鑄立ボールバンクの上にて臍を鑽開し候様致し度候然所其書無之差支

候に付御藏本の内其書御座候はゞ暫時拜借仕度又いつ方にか御座候哉御承知御座候はゞ御誨示奉願度弊邸より借り受候様にも仕度候此兩件何分共奉願候公邊御書物はいかかに御座候哉御書物御座候義に候はゞ弊邸より願はせ拜借に取計らひ度と奉存候右之書有之次第はポールバンクギートオフィンの支度早速に取かゝり申度候間御打捨無御座此飛脚大抵此月半頃歸國に相成可申候間其節迄に否の御答誨被成下度奉願候其御序に尙奉願候は火薬はブリーキの全書に御座候當年も千八百五十七年版の火薬のフルハンデリングと顯し候書取入見候所圖等も無之小冊子にて其法に依て火薬局を開き候様には至り不申遺憾に御座候彼國必ず此成書可有御座候又は大部のアルチルレリイ等にても出居候事可有御座かとも存候此書の義も右奉願候ギイテレイと一同御周旋の義奉願候本邦普通の火薬濫惡を極め惟軍陣中用ひ難きのみならず砲術演習の基本も立ちかね申候此事も多年精々申たる事に候所是迄は誰も馬耳風にて耳に留め承り候ものも無之候所此度御大政御變革にて俗吏ども、少しは目の覺め候様子此所にて火薬局をも本式に拵へ濫惡の火薬一切令禁止候様致し度と

目論見候火薬製造の全書も公儀に御座候義に候はゞ弊邸拜借に奉願候都合に可仕候御藏本并に世間に右之書有無之所先づ御報聞可被成下千萬奉懇願候已上

九月卅日

大星再拜

勝 使 君 臺 下

文久二年十一月十四日

〔五二三〕 勝麟太郎に贈る

去月念四之御手簡并に念五之御附書とも過刻相達し拜見仕候先以此寒候益御萬祥被成御座敬慶之至奉存候然ば先便拜問申上且御周旋奉願候義に付御用繁之御中諸方御問合も被成下縷々御誨示千萬難有謝感無既奉存候且又原書御秘本一本寫本一本圖二枚御惠借被成下銘佩之劇奉存候御役所并蕃所御調所にも新式製造の大冊子無御座候趣不及是非乍去御惠貸被成下候御秘本先刻より目錄并に最初之兩三頁讀過仕候所多分工夫仕候はゞ大抵の品は鑽開も可なり出來可仕被存偏に高誼と返す、難有奉存候御秘本之義に付早々卒業圖を寫し留

め候て此廿三日の便に返璧申上候様可仕奉存候何も其節可申上明朝出立の飛脚御座候まゝ右御惠借被成下候品無恙到來仕候丈の御禮早々申上候小寒の候も相迫り候千萬御保重被爲在候様奉祈候不宣

十一月十四日

大星拜復

勝 使君 執事

猶々先便奉願候小松生拜謁之義も御許容被成下奉謝上候借又コイクオトルストライテン著述の砲術相願ひ候はゞ御惠借可被成下との義難有奉存候此書の事傳聞候のみ藏弄仕らず候罷成候はゞ何分御惠示被成下度奉懇願候至禱

文久二年十一月朔

〔五二四〕 御側頭に贈る

今冬は例よりも軟寒にて暮しよき事に御座候倍御清勝と想像仕候借内々京信を得候所拙著櫻賦自書一卷正親町三條大納言實愛卿御手より被入天覽候所天威之上禁中に御留めに相成候との事よし誠に以て冥加に叶ひ候仕合榮幸身にあまり難有義に御座候此義は餘事とも違ひ候間御序に御上へも御申上置被

昨春は一昨
春とある昨
のし次ある
の頭註を見
よ

下度奉希候櫻賦一篇註迄録し差上候是又御様子次第御覽に御入れ可被下候某の文章賦に至候ては本邦にては漢文字ある已來千餘年間某に並び候もの一人も無之候天朝御文化の盛時菅相公御始め賦の作者も往々有之候へども皆見るに足らず近來昇平の御餘澤にて文人輩出候得ども賦は六ヶしき事として手を措き申候仁齋東涯さすがの徂徠にも賦は一首も是れなく候太宰に鎌倉賦一首有之候所拙劣笑ふべく候一齋先生山陽杯も文才非常に候へども山陽も賦は出來不申候一齋先生の文稿中賦五六首有之板行の文集にも四五篇御座候乍去多く律賦と申近體にて某など作り候眞の古賦にては無之候某三十一歳の時望岳賦を作り候所一齋先生見られ候て古今獨歩と被評候いかさま自分も左様存じ候事に御座候頃存じ候に富士と櫻は本邦の名物に付櫻賦を著して望岳の賦と一對に致し度候ひし所追々多事となり候て左様の閑文字に日子を刻し候事も出來兼候ひき然る所寅年以來屏居の閑人と相成り昨春花の開き候頃風と存じ付櫻賦を作り候ひしに是迄著し候賦二十首計り御座候内此賦第一の出來に御座候後世は知らず當今迄には某の此賦に近寄候程のものも無之候此賦内

内門下の者へ認遣し候が轉傳實愛御御手に落ち夫を日の御門内に御建立御座候學習所と申すへ御出し諸儒に御示し御座候處何れも古今の傑作の趣評判候故遂に被入天覽候と申事にて候はその入天覽候手續に御座候前文の通り此の賦の事は自負の作にも候故奉入御覽度も存候へども文章詩賦御好み被遊候筋にも無之又此節の身分にて衞らひかましく貴君を御煩はし申候も如何と存じ候故相控候義に御座候然る所此度揆らず入天覽候と申に就きては某一人不朽の榮幸而已に無御座御國家上にも御裝飾を添へ候義に付奉達御聽度奉存候可然奉冀候以上

朔日

佐久間修理

御側頭取 御中

文久二年十
二月六日

〔五二五〕 村上誠之丞に贈る

久しく御目にはかゝらず候へども浦町にても寒中御碍も無御座と承申候嚮日緊要の事件御頼得貴意度一書を參らせ候處其後久しく不得御報不審に存

候何も御碍は無御座候歟此寒候に相成北堂君御始總じて御恙も無御座候御事哉御左右委しく承度候爰許いつも不相變無事にて候間御休念可被下候天下の御事ますます穩ならず候趣借々困り入候義に御座候京師の義も紛々の沙汰何とか大朝にて御停調の被遊方は無御座候歟某の愚策には御役人方の内に於て和漢古今の事蹟に明かに五世界當今の形勢をも諳んじ候智辨の士を御選びにて京師へ被遣同力度徳同徳量義の義を以當今の御國力にては外蕃の御拒絶とに角不被爲出來なましむ御拒絶御座候はんとして外蕃命を聽かず候節何を以て御威伏可有御座五世界此形勢に相成候も實に天運のしからしむる所本邦獨その天運を奈何と申義を醇々懇々被仰上外蕃御交通の間に公武御勵精にて萬國の長ずる筋を被爲集本邦固有の所長と合一にして眞に萬國の上に被爲出候御國力御技倆に至り候様被爲在度御事と奉存候此御位に被爲至候へばかねては閭闔の禍心を懷き候國々も自然と奉畏服貢獻を納れ候義を奉願候様に相成可申左候はゞ外蕃を深く御拒絶には及び不申寛大に御徳化中に被差置候様有御座度是則ち王者無外の御道理と奉存候此大義何卒賢弟方御建白も有御座度

と存じ候がいかゞや借御頼申置候事件は大抵御了し被下候や何似日々延領御便を俟居候事に御座候御約束の晝認かけ候所寒天に相成遂落成に及ばず愧入候暖氣に赴き次第責を塞ぎ可申候右にて餘り御愛想もなく候故近詩兩首認掛御目候是は少しく得意の作に御座候扱又去月下旬京信を得候所昨春作り候櫻賦昨春櫻賦と觀櫻賦と二首手書致し候一卷轉傳正親町三條大納言公より被入天覽候所御感を以て其儘右卷子御留に相成候との事誠に冥加に叶ひ難有義に奉存候賢弟にも御悦び可被下候右に付自慶の詩五六首御座候録し懸御目候此節柄に付他へ御話は御無用に被成可被下候將此野雉一隻蕎粉一箱寒候御見舞の印迄致送進候御咲存可被下候北堂君并に令聞へも御見舞宜しく御致意被下度候當年寒威緩かなる方に候へども折角御保重所祈御座候餘在後音不宣

十二月六日

明

村上賢弟

ロヘマンのダライイバンググブロイクと申書七八十枚の小冊に御座候有之候はゞ一部御序に御代市相願ひ候賣捌所書目の義いかゞや相分り候はゞ乍

書簡四五
より同四五
三迄の十篇
を熟讀玩味
する時は櫻
賦の作は延
元年なり又
事疑なく村
觀櫻賦も書
上誠之書
漢三月と書
して屏風現
る家と藏に
同家に藏を
て同じく萬
延元年の作
なること疑
此書簡は文
久二年の然
かもしして
櫻賦と櫻賦
賦と二首と
り候と二首
能はざれど
も昨春は一
昨春の一作
脱したる一
によつて萬
延年譜くも

年の作と斷
定せり

御手数數何分御示し可被下候かねて御頼申置候書は直に價を論ぜず御調可被下候至禱

〔五二六〕 勝麟太郎に贈る

文久二年十
二月七日

先便は御用繁之御中縷々御長箋相願候事件共夫々御答誨被成下千萬難有感謝無已奉存候其時節飛脚出有之勿々御禮申上候義に御座候ひきコレラ病預防手充翻譯ものも御惠寄被成下奉謝上候大に心得に相成候義に御座候順子も先全快にて大慶仕候乍去寒氣餘程例年よりは迷惑と申候當冬此地なども常歳より大に軟寒に御座候御府内も定てと被存候寒候にも閩府倍御萬福被爲在候歟奉伺候賤家は總て無恙罷在候間乍憚御省念可被成下候借及拜問候大砲鐵開並に火藥製造の書全備のもの公邊官庫にも只今に御藏弄無御座候との義誠に解しかね候事に御座候先年御勤役中は仰立も御座候趣に候所是等は御武備の御先務にも候へば誰に御座候ても心付御あつらへにも可相成の所左様に參らず先御役中御詠に相成候も只今に渡來無之との事斯く親しく御交通も御座候上に

横濱へも始終入船有之候に緊要の御詔の品持渡らず候て濟ぬ次第に御座候か夫等御詮鑿等も無御座候御儀か唯々不審の義此節に至り候ても西洋通り軍用に相成可申火藥製造の書いづれにも無之と申候ては誠に慨嘆に堪へざる事に御座候何とか御手段は無御座候哉京師の御模様も御心配の御儀に奉存候何卒程よく御停調の御計らひ所奉願に御座候萬民を被爲安度との難有叡慮却て萬民の塗炭を被爲促候様の事に至らず候様仕度義奉存候定て御建策も被成御座候御事と奉存候某少々存付も御座候て密に寡君より建白候様申勸め候へ共事行はれず慷慨の次第に御座候借拜借の御書物去月廿三日出の荷物に完璧申上候様申上候所其日便無之漸幸便有之返上仕候御檢納可被成下候御親情誠に以難有御禮不可申上盡奉存候寫し候圖本の方は此次の便迄御寛貸被成下度奉願候先日にも既に懇願申上候コイクオフルストラテン何分も拜借仕度奉冀候千萬所仰御座候然ば不相替不腆の至に御座候へども寒候御起居拜問の印迄國産の蕎粉一箱呈上仕候御一祭可被成下候時下拜候北堂君御始乍憚可然御致意被成下度候先は御書物返上旁草々申上候寒威折角御保護可被遊候餘は尙後音

可申上候以上

十二月七日

大星叩頭

勝 使君 臺下

附稟小松生拜謁の義も御許容被成下奉多謝候申通し候間其内必參館可仕候宜く御引立奉願候然は乍序申上候某所作の櫻賦致手録候一卷内々門人に取らせ候か御座候所轉傳いたし正親町三條大納言公御手に入り夫を日の御門内學習所へ御示し御座候所儒者衆古今の傑作の趣に致評判候を以て遂に正親町家より被入天覽候所御感を以て某手書の卷のまゝ禁中に御留に相成候趣正親町家御身内より門人の方迄慥に申來り承知仕冥如に叶ひ難有事に奉存候依て自慶の作五六首御座候間呈覽仕候申上候迄も無御座御他見は被成下まじく奉願候以上

恭聞所作櫻賦蒙天覽不勝榮幸慶喜之至爲五絕句

居然山澤一腐儒。廢錮九年形跡孤。多謝三春櫻樹子。微言因汝達天都。
一篇賦就入天墀。想見君王帶笑披。曾用顏家田舍樣。禿毫縱意寫纖辭。

細賦櫻花日易消。多年蟄屈太無聊。天顏應笑非壯士。篆刻雕蟲學六朝。
櫻花頌上紫雲霄。榮幸何人能得超。皇國他年有蕭統。選中亦自不寒寥。
新舊相傳亦喜欣。前來向我謹然言。陪臣詞筆膺天囑。昌俊後塵今有君。

再賦長句

相如絕藝莫能追。希逸惠連庶可爲。嘗學六朝作櫻賦。孰知託興在湘纍。湘纍當年頌橘樹。自喻志節不容移。文章爛煥類有道。紛縵終姤足可師。我致忠悃遇嚴譴。幽囚廢錮九年茲。憂憤空效長沙哭。感觸終懷郢路悲。我賦一旦生翼飛。微志因之辱天知。絕似櫻花在窮谷。天光漏處照春熙。

啓稿

文久二年十月十一日

〔五二七〕 藩老に贈る

先日中より昌平學問所並に御醫師衆の塾等にて致沙汰候は佐久間修理御咎之筋公邊には既に相濟候へども眞田家にて忌み候もの有之其爲に只今に閑居候よし此御時節柄有まじき事と申沙汰し候趣門弟共の内より傳聞内々申出候ものも有之候所右様之義あるべき事とも存じ候はず途方もなき妄説の趣及挨拶

候義に御座候然る處近日別紙藤森恭助中追放御赦の趣都下より相廻し候とて致一覽候依て勘辨候へば恭助は某より六ヶ年後れ御咎を受け且某より一二層重く中追放のものに御座候其者既に蒙御赦と申候へば某の右御恩赦に漏れ可申筋無御座且恭助罪條御調べ直しにて御赦と申事に候へば恭助限りの義にて勿論の事に候へども御赦御文言に據り候へば全く天朝より被仰出候大赦と被存候左候へば某獨り此恩赦に可漏いはれ益無御座候様奉存候然る所十月五日以來六十餘日に及び候ても何之御沙汰も無御座候事尤も不審に御座候且此等の書付江府より相廻り御重役衆始め要路の御役人も皆被見可申候所某此御恩赦に漏れ候義存じも付かれざる姿にて其儘に被差置候事江府所々にて致沙汰候所に暗に合し候様被存候某乍不肖感應院様御役中々皇國の御爲に就て天下億兆の人に先ち天下の御大計を申上げ暫くの間は不覺悟の人々訾笑も致し候へども二十餘年の今日に至り候へば天下の形勢ごとく某の申候通りに相成候早く某の建策御取用ひ御座候は天下今此形勢に至り申まじくと有志のもの嘆惜候義に御座候又彌利堅の事始めて興り候時節も和と戦とを論ぜず敵

國の形勢事情委曲御探索無御座候ては叶はず孫子兵法にも古より明君賢將の動て人に勝ち成功衆に出るものは先づ知るなり先づ知るとは人に取て敵の情の詳かなる事を知る者なりと申も此事にて是非とも間者を用ひて敵國の情を知らざれば事に臨んで齟齬多く利を得るは難く候何卒御入選を以て彼國へ被遣候様に阿部侯迄上書も致し其筋の御役人方迄精々建議候事も候所御取用ひ無之乍去某心中天下の形勢遂に此御有様に可相成義を竊に氣遣候故去らば門下の内一人なりとも用立可申ものを彼地へ渡しかの國の事共親しく探知候はばゆく／＼萬金にも難替御急務も可有御座候と吉田寅次郎を申勸渡海を企てさせ候事間違ひ候て遂御吟味に相成斯く久々蒙御答候乍去右御吟味中も段々天下の形勢外國の事情等を申上候義に付要路の方様にて御感悟有之彼時節某籌策御取用ひ外國の事情能々御熟知にて外國人御駕馭被遊方被爲行届候はゞ外國に於ても自然と奉敬服我儘氣隨輕侮暴慢の態をも顯はさず左様はゞ天下人心の不服も爰に至らず主上宸襟を被爲惱候御事も無御座候て此切迫の御時節には相成間敷候畢竟此切迫の御時節に至り候は公邊にて外國人御駕馭の御

法を不被爲得に起り外國人御駕馭の御法を不被爲得候は人を以て外國の事情御探索なく總て彼れの義を精密に御承知無之故の義則ち某忠悃の筋御取用無御座候所に坐し候義に御座候左候へば某が御答の筋は世が世に候へば尙御慶賞をも可蒙事と存候此事某が申迄も無之天下の人の皆知る處に候處御家の御重役衆御役人は皆知られざる事に候歟其知不知は姑く差置き恭助御赦の義も御座候所修理漏御恩赦候義何故に其儘に御差置被成下候哉江府所々風沙汰も御座候所を以て諸君より御用番迄御申立被下度と奉存候是迄は一日一日と閑居閑を偷み罷在候所箇様に差迫り候御時節と相成候ては御國家の御爲めにも天下の御爲にも一日の閑を偷むべき義に無御座候に付御苦勞を顧みず諸君を會して及此議也

十二月十一日

修理

〔五二八〕 八田慎藏に贈る

昨日も御來訪被下櫻賦入天覽候御悦とて湊鱒一尾預御惠贈感銘無既不勝言謝

文久二年十二月二十日

候然ば御厄介に相成候義會例年之通今夕寄合申候例年の事故南原へは不申越候へども定て賢友迄かしこより御頼申置候事と存候可然奉頼候將毎々御家具拜借是又不勝銘荷候昨日の拜謝旁早々以上

廿日

大 星拜

澹庵賢友

文久二年十月廿八日

〔五二九〕 村上誠之丞に贈る

十一月十七日並に本月兩度の貴簡陸續相達し拜見先以て愈御佳勝に此寒候御凌ぎ候狀詳悉大慶不過之候北堂君政君にも倍御無恙と承り慰鄙懷申候爰許總て碍り候事も無之候間御安心可被下候借御頼申置久しく致渴望候ハントアタラス御引取早速に御送り被下殊にワートルロウ戰爭圖迄種々御手数に御用慎便風に御附し被下候故いづれも無瑕壁にて落手萬々辱喜欣不可言候戰爭圖も波利稔王も有之面白く候所ハントアトラスに至り候ては精絶妙絶心目を驚し申候卷首の天體にもネプチュニヌの兩月を始として是迄傳聞のみにて名を辨

へ候はぬ新惑星廿箇に及び五世界の山嶽高低列國の分界鐵道の條理アウスタラリアの金穴に至る迄これを掌上に視候が如く是にてこそ眞の有用の地圖と稱すべしと殊に辱致大慶候其上最初一見の節獨逸板故にテイクンのフルカラーリソク等ちと行支へ可申かと氣遣ひ存候所幸に千八百三十七年板の和蘭獨逸詞書候故さがし／＼讀み候へば大抵には埒もあき候て至極妙に御座候借又ゲシキユットギイレイ同ペーダラーゲも御手数是も御手充故に少しも損し不申差向き候急務を辨し國用に相成候義千萬々々不勝佩荷候オィフェンの製作ダラーイバンクの装置も此書有之候へば一々行届き可申深く喜び存じ候義に御座候但し火藥製造局の委しき圖解無之由遺憾に御座候何分無御油斷御心がけ可被下候別條新聞紙數道御惠示是又御手数義淺からず存候就中泰西述略の鐵船並に試砲の一條珍奇を覺候西洋諸國の技術はます／＼出て益／＼奇に御座候借又松木弘安より川本迄の來狀書拔も辱覺候皇國の事何に致し候ても被氣遣候時節に御座候將小布施熊之助も罷出何かと御手数に相成候趣感佩之筋岩次郎洋畫執心に候はゞ川上氏へ入門の事も御取計被下候はんとの義當

小山岩次郎

書簡 五二九

一一〇九

人へ申通し御頼申候は、尙御面倒可被下候借御事多の中思食寄寒中御見舞とて盆糖海鰻御贈被下且歳晩の御祝儀方銀一方御惠寄乍例御厚情深辱格兒へ又美事の雪駄被下當人感慶申上様も無之家内舉て能々御禮申出候一綴に相成居候別條並に風呂敷二枚は命に依て浦町へ致轉致候浦町にても至極御健何かに御座候時分柄定て御便も頻々有之御安心被成候事と存候さて又是より進上候微物の御禮も御丁寧被仰下けく痛入申候櫻賦入天覽候義御風聽申候所御悅被仰下辱候是は實に榮幸と存候義に御座候拙畫の事延引の段も御承知被下安心明春暖光を迎へ必ず相果し可申候今日便有之候と承り急ぎ三度の御返事御禮乍略儀一度に得貴意候例年の通歳末の節敬金一片致呈上候御咲納可被下候段の御禮旁草々如此御座候餘來陽芽出度可得貴意候以上

十二月廿八日

明

村上賢弟

附白十二日の夜殿山英館落成の所焼亡と申事全く火薬を用ひ人手を以て致し候との風聞のよし御報知乍例辱存候火薬を以てと申所慥にて英人に洩れ

高杉晋作等の所爲

候ては彼より申出候義等御應接六ヶしき筋には至るまじきか氣遣はしきものに御座候其他新聞兩三條被仰下いづれも感佩也さて虎狼病治驗立端評語失敬の筋とて御配慮被下候所夫は何以子細も無之候所元來是より内々相示し候趣意は杉田先年より讀書を好み候人且療治にも骨折候と承居候故コレラの義に付候ても治驗も多かるべく又其症の穿鑿も行届き居り可申と存じ且スコックマシネの奇効一病者を以ては數人の例に不相成夫等實歴のあつかひを以て附注も致しくれ候を望み候義に候所此病を虎狼病と稱し候事をたにも辨へ候はぬは大家株に似合候はぬ狹見固陋大いに望を失ひ申候絞腸痧と申も攪腸痧と申も虎狼病と申も皆明代頃よりの俗稱にて漢土古醫經には見えざる事に御座候然る所明醫の著書には比々散見既に龔氏が萬病回春などには兩名慥に有之事にて候醫學を業として洋書の翻譯などをも心がけ候もの萬病回春位に有之病名をも辨へざるにては餘り甚しき事と存候且痧の字字書に無之全くの俗字に候上吐下吐ホシマありて猛勢なるを虎狼病と俗稱候よしに候へば旁近時のコレラには虎狼病と申方よく當り候と存じ候故某

は擇てこの稱を用ひたるにて候其上其手充方も杉田の如き緩漫のあつかひにては急症は皆救ふに及ぶべからずと相考候乍不用今一應是等の義かの書入に又書添候て再質致し度候所近日長士二藩より内使を得候て夫に關係日々殊の外取込候故箇様の関事に取掛り居かね是は跡廻しに致し候御舍置可被下候以上

文久二年十月廿九日

〔五三〇〕 矢澤將監に贈る

口上覺

私儀先達不届有之蟄居被仰付置候所京師より被仰出候厚御趣意も御座候に付此度御免被仰出難有仕合奉存候然る處右御答被仰付候節御上にも御差扣御伺に相成候段追て承知仕誠以奉恐入候義奉存候依て今般御答御免被仰渡候へども差扣可罷在哉否此段山田兵衛を以て奉伺候以上

十二月廿九日

佐久間修理

矢 將 監 様

文久二年か

〔五三一〕 山田兵衛に贈る

此程は拜晤大慶致し候且快雪堂帖の事御承諾被下殊に欣幸之至只今三帖借用罷在候残り居候二本此ものに御附與被下度冀ひ候分析術いかや昨夜も御出候はんかと存じ候所御入來無御座候ざつと下見被成候ていつにても御出可被成候以上

十六日

大 星 白

蒔 庵 賢 友

〔五三二〕 八田慎藏に贈る

文久三年正月八日

御使書拜見御連祝慶賀之至然ば舊臘嚴謹御寛宥之御怡とて思食寄美事の海鮮品々獨活苗山葵等迄御取揃御投睨被下乍例御芳情佩感之劇奉存候昨日對客中不及裁謝簡忽御海容可被下候いづれは拜面御禮可申究候以上

八日

書 簡 五三二

一一三

尙々御籃返壁御收めさせ可被下候乍憚皆様へ宜しく御致意冀候以上

澹庵賢友

啓 拜復

文久三年正月九日

〔五三三〕 藩老に贈る月番赤澤助之進へ申立

昨日御呼出御書付を以て其方松平容堂様より御借被成度被仰進候に付御借被遣候其段相心得用意次第早速出府候様被仰付候所私申上候様は容堂様御儀は御使者口上にて承候へば正月八日頃春嶽様御一同御上京御座候趣左候へば今日より御在府にては無御座候右の場へ出府被仰付候は御不用之義且京師なり土州なり西方に御座候を東に途を枉げ候事尤も不都合の段申上候所然らば今日は御書付なしに彌御借し被遣候と申心得之御内意被成下候間其段相心得用意仕候様被仰渡奉得其意候然るに退て勘辨仕候へば容堂様御上京御留守にても私義一度出府仕御役人へ面談打合せ申度筋も有之且差向御家政之義に付甚心痛仕候義御座候に付御屋敷在府の御重役衆へ申談之上御親類板倉周防守様迄罷出申上度義御座候間出府之義奉願度奉存候御勘辨之上可然御差圖可被成

下候以上

正月九日

〔五三四〕 吉祥院に贈る

文久三年正月十八日か
吉祥院の住職は山田辨道といふ人なりと云ふ

未得面晤候處近日上田在北澤金平より御院號并に御篤志の御様子をも致承知御傳言の趣も具に心得候事に御座候時下春寒愈御碍も無御座候歎承り度候然ば此度此門下の者差出し候事は其御地に御厄介ながら御周旋の筋御頼申度候より出候義に御座候爰許にても小兒どもの爲に數年來牛痘種を種え繼ぎ候事に候所昨秋麻疹并にコレラ病流行の故に遂に其種子を失ひ申候其御地にては御醫師衆にて其掛りをも被成候趣に承知候へば此節とても其掛りの御醫師衆には新しき種子貯も御座候事と相察し候依て御周旋を以て右種子貰ひ受度冀候御厄介筋には候へども濟衆の爲にも候間可然御取計らひ此ものに三五粒御得させ可被下候自然も新しき落痂無之候はゞ其種繼の日に當て種子に可相成膿水一滴此硝子板に御挟み御送り被下候様御頼申候落痂に候はゞ此盒子に納

め御遣被下度候隨て不臆之至に候へども菓子一折致進上候御咲存可被下候外に菓價百匹乍聊種痘掛の御醫師衆へ貴院より御贈被下度差出申候總て宜しく御取計可被下候右懇願迄如此に御座候以上

正月十八日

吉祥院様 御坊

佐久間修理

文久三年二月朔

〔五三五〕有志に宛てたる書

兩三日又々春寒を覺候愈御碍も無御座候歟然者板倉様へ上書候義も有志諸君より御申立之筋も候間見合せ候様仰も被下且御上洛御上船御日限も差迫たと以上書候ても其以前御覽も難被成下御事と奉存候旁諸君の貴意に従ひ候處昨日從御目付の演説にて御上洛御日限當月廿六日に被仰出候趣致承知候只今上書致候は、右御日限前御一覽被成下候位には到り可申候左候は、御入手の義も夫丈御果敢取候はんと被存候乍去諸君御見込通御政事御改革御軍制御建立文武御振興可有御座學校御政令相備り總而昨年來公義の被仰出に御遵奉聊の

御違背無御座候様御手内に而埒明候は、本より御他家へ申出候等の義者御親類様とは乍申望ざる所に御座候乍去此切迫の御時節と雖舊弊に泥み因循苟且君國公義被仰出に御遵奉無御座候様にては何分御大切之御義と奉存候故無餘儀上書も可仕と覺悟候義に御座候去月廿四日諸君御申立之義今日より今評義に懸り候に□□申候より今日迄七日に相成候が如何様之御様子にや及御問合候御様子御分候は、早速被仰下候様奉冀上候其次第に依ては御時節柄諸君の高意にも従ひかね候間如此御座候以上

二月朔日

修理

有志諸君

文久三年二月

〔五三六〕村上誠之丞に贈る

豚犬ヘスタールヘン被下當人大悅宜しく御禮申上候ガラムマチカも昨年より始めさせ申候

ガラムマチカシンタキスの渡來本有之候は、一部づゝ御調御送り被下度希

書簡 五三六

一一七

候

今春も度々の御手帖年頭之御祝詞被仰下候とて不相替嗜好の品御惠贈且舊臘底嚴譴御寛宥被成下候御悦とて御看代被下痛入辱筆謝不可申器候此地なと只今に不順冷氣なる事に御座候其表いかゝや北堂君御始總て御碍も無御座候歟御近況委しく承度候今晚大川出立と申事故春來度々の御挨拶迄託此番候其表御上洛後平穩にて異聞も無御座候歟京師の御模様等御聞繕の事も候はゞ御報聞可被下候某も至て健にて御答御免後三四里より八九里の所へ遠乗に度々出かけ候所草臥不申十年の懈怠にては三四里の往來も餘程草臥可申候へば馬場にて兩三度もならし候て出かけ候様申吳候ものも候ひしかども左程にも有之まじくと存候故直に善光寺迄出かけ候所果して少しも草臥不申依て其後澁湯迄参り候其節は少し脛の邊重き様にも覺候所格別にも無之其後八幡より若宮邊迄乘廻り候に一向常に替り候事も無之候此分にては緩急の際にも尙差支有之まじくと一咲候事に御座候九年樓居庭へ出候日も稀々に候ひしに俄に出かけ候ても如此に候はみつからも怪しみ存じ候程に御座候近日遠乗の節一詩有

之候間録し掛御目候御一察可被下候以上

村上賢弟座次

明

〔五三七〕 八田慎藏に贈る

安政六年六月九日か
(編次を誤れり)

大に暑色相成候貴體其後何如之御様子哉承度候令弟御事も其以來御便も不承候多分は一時の義にて俗醫之申候程の事には決して有御座ましく被存候近日之御様子申來り候義も御座候はゞ御聞かせ可被下候偕御祖父様七十之御誕辰に江戸表より拙序を認め候て差上候處其後高堂にて見かけ候へば大分美事の袿装御付けさせ被成候只今にても拙書に候所三十四五迄は別して書を學び候事無之候故謗劣之極に有之他日へ残り甚愧入申候依て右拙序は袿装へ合せ候て此節屏居手隙にも候へば認め直し置き度存候御發駕前内密被仰付候て細楷之長卷を認め候此節にて候へば手筆少しは和らぎ居可申候乍御面倒右拙序之一幅近日之内御取出し御遣し置き被下度冀候拜候旁勿々以上

九日

大 星

元治元年春
（編次を誤れり）

〔五三六〕 竹村金吾に贈る

先頃は雪上に霜を加へ候様の義にて御座候ひし所早速其霜だけは消し候へども残雪猶融化に至らず奉察候御事に御座候且多日御外威の御氣味被成御座候由令郎君より承知仕候所最早其頃は御輕快と相伺奉降心候爾來御安和喜慰不過之奉存候倍此程は思召寄精製之妙品澤山に御惠投被成下元來深く相嗜み候品にて別して難有満腹賞玩仕候義に御座候豚犬婢子迄も配分いづれも難有かり御請申上候義乍憚令郎二君へも宜く御致意可被成下候倍又過日御内覽に供し候二通御返還に付縷々御懇書難有拜見仕候御歸城之御運び御感嘆の旨被仰下候へ共恐らくは其御運びとは相成ましく候板倉閣老も被成御座後日災害御座候様の事は多分御取持は有之間敷竊に頼をかけ居候義に御座候高意には如何や將軍様へ被下候己を罪せられ候勅書御拜見の由小弟未だ拜見不仕右御寫し留も御座候はゞ御惠示奉冀候如仰公武御合體御誠意に被爲調候へば寔

に天下生靈の幸福と可申候會津福井兩侯の義も噂のみにて未だ慥かなる書付を見不申候是も御手許に御座候はゞ詔勅一同拜見奉願候此節小弟の策建白候様被仰下候是は一昨年企てのみにて相停め候上書稿を被仰下候に御座候哉是は其後慥か密々申上候様にも覺候臘底に至り川勝丹波殿迄極密差越し申候丹波殿其頃御勝手海防兩掛りに候ひき其節多分春岳侯の御覽には入候事と奉存候御書中松平縫殿殿と御認め御座候は丹波殿の御聞誤にも御座候やに被存候此節に至り候ては先何も建白は仕らぬ覺悟に御座候萬に一つ御下問にても御座候はゞ其節差上げ候はんと致起草置候洪範今解と申もの一卷有之候是は先生にも未だ御内囑にも入れざる品に御座候是迄隨分御取用に可相成義存分申上置候其上に此節更に建言等仕候は何か求むる所御座候の嫌にも涉り候義に付先黙し居候方可然奉存候洪範解其内には御覽にも入れ可申候將又此程御移りの印迄に呈覽仕候詩扇御丁寧に御挨拶蒙仰けく奉痛入候江月の義も段々難有かねて御配意をも荷ひ候義に付得便早速春沙兄を以て奉報聞候義に御座候ひき依て江月駒に涉り候詩相認入御覽候又春寒之一首は顔魯公の傳に五原と

江月は馬の
名沙は馬奉
春竹村熊三
郎の號

申所に冤獄有之久しく不決天旱の折から魯公監察御史にて下り其獄を辨ぜられ甘雨隨て降り候故に郡人御史雨と呼び候と申義を載せ有之候と存じ出て口占仕候故掛御目候義に御座候先生にも御同望と申御事いづれ其内には顔真卿無之とも降り候時節至り候はゞ残雪消滅候程降り可申又雨は無之とも天氣夏に近く相成候はゞ自然に蹟なく融化候はんと存し候事に御座候先は御懇書之拜答迄草々申上候亂筆多罪

六日

大星拜復

竹村先生 臺下

文久三年四月廿九日

〔五三九〕菅鉞太郎に贈る

本月十四日夜十五日朝晝十七日十九日の御手箋も陸續相達し拜見先以向暑の節御履況愈御清健と承り慰浣之至賤家も依舊無事罷在候間幸に御省念可被下候俎其表並に京師の御模様等御聞込の義ども一々見るが如く御認取御惠寄被下銘感之劇御情交の厚さに非ずば何を以て此に至らんと筆謝不可申盡奉存候

二浪士梟首清川八郎被斬候話並に同人御出會の席にて暴論申出候へども遂に高論に服し候趣も被仰下一珍事に覺候しかし此節のはやりものにて血氣の爲に本心を喪ひ候者も多分可有之と被存候諸人御出會等の席にては隨分御心を被用過激の御論は無之方に致し度萬事御韜晦にしかず奉存候將公邊浪士御取扱向の義浪人名目等の御正論一々敬服是等の御論は板倉小笠原兩公へも御聽に入れ度ものに御座候孔子も政を爲すに必ず名を正さんと被仰候其名正しからず候時は言語順序を得ず言語順序を得ず候時は物事觸礙する所ありて成就するを得ず此故に君子の名づくる所の事は必ず天下に遵行すべき義に御座候然る所其名五世界に明言すべからずその言論天下に遵行すべからず候事の有之候は誠に嘆かはしき義に御座候俎又只今に賣國を謀り候奸黨も御座候よし奸邪の小人いづれの世にも有之ものには候へども密に被仰下候程の義とも存ぜず罷在候所けしからぬ事に御座候何とぞ要路に君子人を御排置鋤奸の御手段御座候様致し度ものに御座候尾州前大納言様拔群の御方にて此度も最初將軍様京師御逗留十日の御定めに御座候を御上表にて御滯京に御決し夫より次

第に御打解に相成候趣にて其御上表御寫し御寄惠被下拜見難有事に奉存候某などは御滯京之趣御觸面にて承知最初より天意に出候義乍恐時に取り御尤至極の事と奉存候ばかりにて其御謀猷の由て出る所を詳にせず罷在候所御報聞にて其來由を審にし大慶仕候さて御養子御一條も兩林取掛にて候所秋月公子には御順養子御據なき御義理にて其御決心御座候を彼是の下らぬ筋を申此御方へ引掛置候始末不義の至と思食候趣御尤に御座候兩林讀書家には有るまじき事に被存候其隱微を御洞照密々御申立も御座候へども兎角速に參らず候よし差困り候ものに御座候右に付候ても細川様の御方御取急ぎ御取かゝり御座候様有之度候其御藩中とも御懇意を被締候よしに候へば内密本藩有志のもの澄龍兩公子を渴仰罷在候と申義御話し公子方の思召をも御窺ひ候ては如何や秋月公子既に御順養子に御極まり候上は細川家の公子方に御決着の外に有御座間じく此義は既に御持參の連署書取にも言を盡し候義に御座候何分も精々御力を被盡候様奉禱候其表之義俗説に雷同一向に埒も無之無益無實の失費のみにて或は動搖或は安心と申様にて御嘆息の趣さもこそと被存候是は執政に

新執政は眞
田志摩なま

町奉行井上
信州の弟井
聖諱直なり
上清直なり
文久二年
年十二月
奉行に擧げ

其人無之候間は療すべきの方法有御座まじく候某にも出府の方に相決し候様被仰下候へども板倉様其表にも不被成御座且出府の義既に御差留め御座候上は手段も早速に無之其上天下之御爲等には某の持論此節柄何の裨補にも相成間敷存候左候へば天下の御爲にも御家の御爲にも心の丈は既に已に盡し置候義に付此時候の融和候迄暫晦藏と決心候義に御座候藤岡等の事御懇念御申越し御座候所是は過日も得貴意候通京師探索御用にて急に彼地へ發足本月六日只今に便りも無御座候時節後れの探索夫れにても無きには勝り可申歟格別の用は無之三人一同に被差越候程の益は何も有之まじくと存候事に御座候藤岡居候はねば其餘は存するが如く亡するが如き人々にて且新執政の出來候にて何とか行届き可申と意を直し望觀候ものも御座候様被察候且今日彌御歸城にて御深慮を以て被蒙仰候新執政も御供と申事明日よりの施設如何可有御座と刮目相俟罷在候其表近日浪士取締取扱等御免に相成候よし町奉行井上信州も御役御免と申事其子細は浪人共の取計にて市中より出金を計り候との事高橋勢州も聞及び井上も承り置候より出候事のよし是又一珍事に御座候不意に承

られしが三年故ありて
命ぜられた
高橋勢州と
は三舟の一
人なる高橋
泥舟を謂ふ

り候ては少しく勘辨の御座候仁にては有まじき事の様被存候がいかにも不審なる義に御座候浪人ども、横濱へ向ひ外國人打拂候はんとて其向へ届放しにて事を謀り候は言語道斷之致し方一人二人に候はゞ狂人とも可申候へども多人数の義に付狂人とも申されまじくいかさま如仰今更御解返しにも不相成そのもの御持あつかひ可被成夫と申候も最初名を正され候所に御一蹶御座候故爰に至りて御始末六ヶしく候事と被存候只今にては正名の本に反て御取扱御座候はゞいかう難き事も有御座まじく候只今承り候へば御上にも御道中御阻撓も不被爲在御城着被爲在候趣先恐悦奉存候某は腹痛氣にて今日は登城仕らず候如仰近日公邊にては段々御手配有之正義の御談判も候て是より御模様も替り可申所半途にての御歸城御同然残念奉存候追々御番方も御返し可相成候へども賢友御事は追々御手筋廣く御機密之事も御分り可有御座候に付暫らく御程合御見繕御座候はん高案のよし可然奉存候只今の所實外に人も無御座候得ば御自任にて御周旋御座候様所祈御座候本多殿申立御返答の催促若年寄方へ被申候所異人の事も少々の間には有之候段被仰下候へども某に於ては尙甚疑

ひ存し候事多く候外國の事何分今少々の間には片付申まじく水戸様小笠原様等に如何様の御謀略御座候哉甚無心許奉存候義に御座候戊午の四月に候と某の籌策にても開港數ヶ所の義御斷皇威を海外に見せ付け候事優に出来可申を良機會を御失ひ多年御因循剩へ諸國へ御使節迄をも被遣御信約を被爲固候御上の義に候へば誠に御不都合至極の御事に可有御座夫も其事を御取計ひの關老方其罪を御引受け候て御自盡被成其罪に依て國除し家亡び候とか申候はゞ外國へ被爲對何となり御詞も立ち可申候へども左様の御方様も無御座候所にては是れ迄の御仕向け總て外國を御欺瞞御座候に相成り御談判も御六ヶしく候はん奉氣遣候が何か慥かなる御妙策の御座候義哉水戸様小笠原様の御趣意は公平正義の御様子に伺候へども愚意は公平正義に候へば彌御詞は御詰被成候事と奉存候是等高意には如何か御論も候はゞ承り度候蟪川藤太郎の事此度初て承り候けしからぬ奸惡のものも有之ものに御座候全く財利を嗜み候心増長候より其本心を失ひ候事と被存候英國軍艦の總督等の義御聞込の義被仰下是又初て承り候乍去英は當今有名の強國且政法も苟且の筋無之様に候所如

仰戰爭之大事を商官にもなり商人にもなり候程のものに請負同様に申付置其者戰勝利にて扱と成り候へば本國より軍費を取り敵國よりは其償を收め候と申にては苟且の甚しきもの有法の國と申べからず是等の義はいづれより御聞込御座候哉恐らくは其實を得ざる筋には無御座候や何とぞ詳に御突留の上又又蒙仰度候被仰下候様の事有之事に候はゞ地理書にもイスタドレトイキユンデヘンデ必ず見え候筈の所是迄遂に見及び申さず甚不審に存じ候故及再問候生麥一條は去年小笠原侯の應接にて曲直相決し候事に無相違様御報聞の所是も某に於ては未だ安堵致し兼申候尙委しき義承知仕度高論の通和戰を問はず天下國家の御備御充實に無之候ては叶はずと申す義誠に不易と奉存候但其御備の御充實御座候様にはいづれより手を下し可申と申義講究を欠くべからず抑高見にはいかゞ被成候はんと被思召候哉四月七日於京都被下の上意寫し御廻被下天朝にも御無遠慮に急速攘夷と申廉迄も追々御折合に相成候との御事先以當今天下の御爲難有存候義に御座候此上の御施設何とぞ其肯綮に中り候様仕度奉存候今日登城致し不申來客も無之少々閑隙を得候に付數通の御返事乍略儀

此一通に相認め候兎角人の爲に煩はされ候て日々匆忙毎度御疎遠愧入候しかる所思召寄せられ候て毎々御留守宅へ被遣候御別通迄も御示し被下候様被仰遣其時々令郎御持參被下千萬奉謝候尙御異聞も候はゞ不相替御惠示被下度候時下氣候兎角不揃に御座候國家の爲め折角御保重可被成候草々不謹

四月廿九日

大星拜復

冠峯賢友

猶々過日も赤坂にて牛角天砲演習之事にて令郎御誘引申候其節も老孺人御初至極御健令嬢御不快も次第に御善候と承候御安心御座候様奉存候以上

〔五四〇〕 宮本慎助に贈る

文久三年四月三十日か

昨日は度々御苦勞奉存候然ば密々の義に付いづれ京師迄探索の人可差出と存候昨夜中若宮村迄飛脚差遣し神主松田豊前の悴式部呼寄せ只今着候に付申談し候所親父と相談の上兎も角も罷越し力の及び候丈探索の義相勤可申と申候此ものと目さし態々急に呼出し候譯は此松田はかねてより正親町三條家へ親

しく御出入りを申候て御懇命を蒙候義よく承知罷在候故にて候其上當正親町家は中山家の從弟にて御出の事も承り居候旁彼表の穿鑿いか様にも行届き可申且神職の事故道中筋も武家浪人とも相違何かと都合も宜しかるべくと相謀り候事に御座候此節の場小山田大夫等彼表別に思召つかれ候御用筋も候はゞ蒙仰度候此段昨日來御周旋の場にて可然様御伺被下度冀候取急ぎ草々如此に御座候以上

四月三十日

宮本 兄 内用

吳 灣

文久三年七月十三日

〔五四二〕 矢嶋小次郎に贈る

夜前由對の方迄罷越し戻りに一寸御宅迄推參候所御不在にて不得面言遺憾御座候ひき一寸御面談申度候所今朝約し候事有之上の竹村迄罷越し居候乍御苦勞只今に候はゞ同所へ御出可被下候晝後に候はゞ宅へ御出被下度候由對の方へ罷越し及談話候義に付夜前沼田屋が參り候て貴様御身爲の事相謀候事も有

上の竹村は
竹村熊三郎

之候是へ御出御問被下候ても宜しく候此段草々以上

七月十三日

佐久間修理

矢島小次郎様 内用

〔五四三〕 勝麟太郎に贈る

文久三年七月廿二日

星夕御認之華墨今廿二日拜接仕候先以殘暑も甚しく御座候所倍御好安被成御座慰浣之至奉存候舊臘より東西御隙なしに御奔走御座候處去月中は上様御軍艦にて御東歸被爲在候御供御首尾克不日に品海御着岸に相成恐悦至極御規模の御事と奉拵賀候兵庫御土着品に寄候ては御家内様御引越にも可相成との御容子既に此地などにては睨と仰をも被爲蒙候事の様傳聞過日其儀に付北堂君迄申上候義も御座候ひき然る所未だ御不治定と承り心下少しく落付申候過日大坂表にて諸大夫被蒙仰候所當今之勢右所に無之とて御辭退御座候との御事今に始めざる義に御座候へども御用心又格別の御事に感嘆淺からず奉存候天下の形勢誠に浩嘆の外無御座候長州の事は既に傳聞仕候薩州の事近日紛々致

馬關の砲撃
及薩藩と英

艦との戦を
さす

風沙汰候所御送りの新聞番にて乍大略其慥なる義承知仕難有奉存候いづれも
外國へは曲を負ひ候義ながら勅命幕命とも遵奉の名御座候此上幕府竣善之御
策いづれより出て可申哉儲々不詰り至極の義實に恐入候世の中に御座候其中
又々長崎より對州へ御廻り被成候御含のよし御心事奉察候乍然志士報國の秋
折角と御努力被成御座候様奉禱候兎角開鎖の論紛々のよし當今も尙其體儲々
不及是非候某一詩有之呈覽仕候

神州皇極崇民徳古今同借問權謀雜何如信義隆深修辭命待莫恤梯航通切願明王
道遠傳蕩々風

度徳未量力大勳何所成同謀及ト筮夫履戒堅貞請用名言正莫令變亂生不過汎收
長伴物乃兵經

是は多分御同案と奉存候天下之事に兩是兩非としては無之必ず一是のみにて候
此一是を明かに致し候爲の學問に御座候大學の格物中庸の明善易の窮理洪範
の皇極皆其事に御座候斯聖學天下に明かならず候より此紛々を釀成し候事不
堪慨嗟候儲又御事多の御中暑中御尋とて美糖御贈惠被成下中元の御祝儀をも

拜戴仕乍例重疊難有奉感謝候明朝急に飛脚出と承り御惠賜之拜謝旁草々拜答
申上候惟當今之御爲折角御保重可被遊候賤家總て相替候義無御座候間乍憚御
放念可被成下候不宣

七月廿二日

啓 拜復

勝 使 君 臺下

乍憚北堂君へも宜く被仰上可被下候來月は爲歸寧順子も差上候心得に御座
候尙其節可申上候其節は多分御留守に可相成候此度は飛脚にて候故御大切
之御書物返璧も仕かね候次の慥なる便に附し差上申度奉存候

〔五四三〕 小山岩次郎に贈る

文久三年七
月廿二日

其後久しく御音耗も無之候故千萬無心許存居候所忽御手簡此殘炎にも愈御無
事と承り致大慶候且過日は能く江府へも御一遊被成候よし定て何かと面白
もの御携歸り御座候事と相察し申候御來訪の節御示し可被下候儲又金拾三兩
被遣慥に致落手候留影鏡も門人藤岡公用にて覽く京師へ趣き候等にて其後は

書簡五五〇
参照

屢も不試候是より次第涼氣にも可相成候間御見合御一訪可被成候忙中勿々布復

七月廿二日

象山

岩次郎殿

書物一冊是又致落手候

文久三年七月廿七日

松代藩留守居役より飛鳥井家に呈する書

信濃守家來佐久間修理義御用之義も被爲在候に付御所表より被爲召候而も御請可申上哉否御承知被成度御問合之趣承知仕候右修理義は舊臘於關東盤居御免被仰付當今如何處置仕可申設分兼候間早々松代表へ打合可申遣奉存候依之往來日數三四十日之間御請御猶豫被成下候様仕度奉存候此段申上候以上

眞田信濃守家來

玉川一學

七月二十七日

玉川一學は
松代藩留守
居役たり

〔五四四〕 長谷川三郎兵衛に贈る

文久三年八月十四日

冷涼之時節愈御佳勝被成御勤珍重奉存候偕夏中は蒙御訪問感喜淺からず奉謝候右御挨拶にも罷出度存候處續ての酷暑に老懶打加へ候て遂此節まで不及其義愧入候義に御座候然ば某義も京師御所表より御用も御座候に付可被爲召哉の御旨其筋より御沙汰御座候趣昨日御用番より先其段相心得候様御内達有之驚入奉存候草茅同様の微々たる陪臣の身を以て天子の御記存を蒙り微命を辱し候はん等の事は御當代は勿論豊臣家足利家以前も未だ其例を聞かざる程の義に候へば某一人の冥加に叶ひ候は申迄も無之御家の御美目とも奉存候然る所斯る六ヶしき御時節に當て某かねての定論時論とも相反し且此節と相成候ても猶一二の籌策も有之御取用ひにだに相成候は禍を轉じて福と爲し敗を變じて功とも成し候はんと奉存候乍然うかと罷出夜光の壁を暗中礫に打ち候様の義は仕度無之右に付篤と御相談御見込の程をも拜聽仕度一日罷出度候所御用繁の御様子故好き御手隙の時節を窺候て拜趨仕度奉存候いつ何時頃登館候は御在宿にて御談話可被下候哉一寸御一報奉冀候萬縷期面拜候以上

八月十四日

啓 拜

長谷川君 几下

文久三年八月十四日

〔五四五〕 白井平左衛門に贈る

昨日は御訪願奉謝候忽御使簡昨日御用書御沙汰御配意御尋被仰下是又奉謝候昨日掛御目候在京御留守日記の通先其段相心得候様にとの御内達と申事に御座候御譜第の御事故幕府へ御無沙汰にて御請も被爲在兼依て御親類等へも被仰遣候義も御座候趣に御座候借は硝石造込調書類差上候様承知仕候一々御檢納可被下候將又近日の被仰付御書付寫御惠示被下奉謝候一覽之上直に返上仕候功過難相償の五字は能く出來申候先拜答迄早々以上

八月十四日

大 星 拜

子康老友 几下

文久三年八月二十日

〔五四六〕 勝麟太郎に贈る

秋冷次第に相加候北堂君御始倍御萬福被成御座候御事哉奉伺候賤家いづれも

頑健罷在候乍憚御放念可被成下候然ば私義も近日御用之義御座候に付天朝より被爲召候はんとの御沙汰別番之通此程從重役共相達し候主人家よりは其表閣老方まで伺相立候と申事主人家に於ても御請申上候より外無御座左候へば彌微命の下り候節には早速上京仕候心得に御座候いづれ其以前に順子をば歸寧仕らせ候舎に候所近日傳聞候へば其表又々虎狼病流行と申事依て暫く見合せ流行相靖り候頃に上途仕らせ度候京師も邪正混淆板倉閣老を斥して姦吏と唱へ候などは以の外の義と存候右等の場へ微命を荷ひ候へばとて倉卒に戒心も無之罷出候はんは無謀の至とも存候故主人家へも無心に及び力の至り候はん程衛身の用意をも致し可罷越と心組候義に御座候右に付近頃御無心に御座候私自用に供し可申ゲトロッケンピュス并に騎銃ヒストール各一門づゝ彈藥袋迄相揃候をいづれよりなりとも御調御送り被成下候様乍御繁劇何分も奉懇乞候金子は何程送上仕候て可宜哉蒙仰次第直様差上候様可仕候更に一層の切願御座候近日四歳の馬を得候て荷蘭ファンデボルの説に餌立乘立仕候少しく欄柄をも得候様存じ候所西洋馬具不揃にて甚不都合に御座候一具ほしく御座

候て藩邸懇意の者へ申遣し候へども法外の高價にて差支申候横濱にては七八圓にて手に入り可申様從商人も承り又久しく彼地へ參り居候門人よりも承知候義に御座候然る所其表店方にては廿圓以上と申事ちと關易仕候此義菅鉞太郎へ相話し候所尊第へ罷出候節御留守中も御取出し置れ候を見及び候と申事相成候義に御座候はゞ一具御讓被成下候様仕度奉懇願候差付がましく恐入候へども此料として先金一枚差上候尙可然蒙仰度奉存候過日之芳翰には當月早くも對州邊御用も御座候て御留守にも可相成と御座候に付前條の義も望を失ひ罷在候所近日飛脚のもの罷歸申聞け候には未だ御發軔も不被成御座と申御事に付好便に任せ右之拜願に及び候御手廣に被成御座候御事に付何とか被成下度偏に奉冀候先緊要の願筋のみ匆々申上候天下の御爲時氣折角御攝養被爲在候様所禱御座候不宣

八月念日

勝使君臺下

啓 再拜

此書簡八月廿五日の書簡と共に送り

文久三年八月廿四日

五四七 村上誠之丞に贈る

本月十日夜御認の貴簡大川より相届け昨廿三日致拜見候秋冷相加り其表往々虎狼病も有之候よしに承り其御許をも甚心配御尋ねも申度存じ候所へ御狀にて本病流行の沙汰には候へども御近傍死亡のものも御聞及ばれずと申事先々稍降心致し候乍去氣候も宜しからず候趣千萬御攝養に不可過候北堂君御始御健安と承り何より相悦び候爰許も依舊無事に候間御放念可被下候偕某事も揆らざる義にて御用の筋御座候て天朝より可被爲召と申事別紙之通近日重役共々相達し申候君家にては早速先其表之閣老方へ伺に相成候趣是は普天之下率士の濱王土王臣にあらざる事なきの大義も候へば其表にて御差留に可相成様も無御座候又君家にては御請申上候の外無之某に於ても漢土には徵命を得候ても堅臥して起たず候ひし人も候へども本朝には未だ其例を聞かず此節の朝議某の所見と同じからずと雖も可奉辭避様も無御座候へば彌蒙朝命候上は速に上京致し候心得に御座候乍去此邪正混淆板倉閣老を斥して奸吏と稱し候等

の中へ何の用心も無之單身にて出かけ候は無謀の至りとも存じ既に孟子も戒心ありて兵を備へられ候事有之候義に付某も君家へ及無心力の及び候丈戒心衛身の用意も致し候て出かけ候心組に御座候間夫等は深く御心配被下間敷候將此度神奈川奉行衆より荷蘭へ洋書詔に可相成に付是迄兼て御頼申置候書目の外何歎望の品も候はゞ早速しるし差上候様御申遣し被下辱存候差向さほしく存じ候は千八百六十年式ライフルカノンの製造試験功用の説迄委しく載せ候砲書並に當時評判宜しきタクテイキ并にケレィネオィルロフ騎兵歩兵の調練も千八百五十七年式改まり候様の事に候はゞ夫も入用に御座候以上兼て御頼申置候を併せて御頼被遣可被下候何分も所祈御座候其表之新聞も毎々御手數に被仰下是又感荷之至に御座候昨日勝氏よりも來書に候所彌橫濱鎖港の御談判に御取かゝりと申事貴書中には還御以來京師も穩かならずと申義東西とも形の如き御次第大息之外無御座候某などもいづれの所に税駕すべき哉更に不可期候今夕幸便御座候に任せ貴報迄如此に御座候以上

村上賢弟

大星白

八月廿四日

附白先頃は中元之御祝儀并に暑中御芳問とて好糖一糵御送惠被下又圓滿院様御三回忌に付御香奠御送り佩感一ならず存候七日にも前夕より賢弟代り浦町へ申上御出被下致大慶候右も可得貴意の所何かと取込延引候内貴簡に遂御報に相成申候皆様へも宜しく御致意可被下候

〔五四八〕 勝麟太郎に贈る

文久三年八月廿五日

四五日前其表への便有之様承候に付別封相認候所間違候て差上候に及ばず内本月十三日之芳簡一昨二十三日相達し拜見仕候如仰追日冷涼之候に相成候處閩府益御萬福被成御座喜躍之至に奉存候某いつも頑健乍憚御過念被成下まじく候偕天下之形勢彌危険に相成候を深く御憂念御尤至極に奉存候某に於ては尙當今に相成候ても西東の御間に就て禍を轉じて福と爲し敗を反して功と成し可申策の無之には無御座候但御用捨奈何と奉存候義に御座候いづれより考へ候ても東西とも本材の御人に乏しき様に被奉存歎息の外無御座候偕某義天

書簡 五四八

二四一

別封は五四
六號の書簡
をさす

朝より被爲召候と申義風聞の旨蒙御下問難有奉存候既に其義も早速申上度別封相認め候義に御座候委細は別封にて御承知可被成下候金川鎖港之御談にも被爲取掛と申義近日御一定と申事いかなる御辭命を被爲修候ての御事哉深く奉氣遣候義に御座候其表御有司之諸公此危急を御濟ひ再び御和平の天下と被成候御策略は無御座候御事哉何卒天下億兆生靈の爲に御身を被捨候てなりとも大公至正之王道を發揮被成天朝の御儀は申上るに及ばず徳川の御流れも尙御無窮に御繁昌被爲在候様有御座度と奉存候某爰に一策有之候へども機事密ならざれば害成るの戒も候へば書中にては申上かね候へ共彌蒙徵命候て其便を得候はゞ天下萬世の爲に不惜身命密々建白も仕見度と存じ込罷在候使君にも此月末か來月初旬には御上坂も被成御座候はん御様子天の良縁にて被地に於て拜謁の事も候はゞ尙底蘊を盡し申上御高見をも奉伺度奉存候先は御問及の拜答迄今夕門下のもの一人其表へ出立仕候に付右申上候時氣折角御保護被成御座候様奉祈候不宣

八月廿五日

啓 拜手

勝 使 君 臺下

猶申上候其表時令も宜しからず當年又々虎狼病流行と申事尤餘り怪我は無之よし全く療法の功者に成候にも依り候歟乍然天下の御爲御攝養專一と奉存候以上

三白別封懇願之義御迷惑ながら御門下并に御家來衆へ御傳命可然様奉冀候惟禱々々

〔五四九〕 矢嶋小次郎に贈る

文久三年九
月廿四日

某事天朝御用にて可被爲召の御内意を蒙り何かと心用意も致し候に付金子入用に御座候依之昨年閏八月中御用達候金子當月内御返却被下度冀候其節の御切手には去暮迄に御返却被下候はん御座候所御沙汰も無昨年分は往年全く貴様の之又某手許も差支無御座候故御催促も不申候ひき御爲に謀り候とも相違之義に就き宜しく御都合可被下候忙中用事のみ草々得貴意候以上

九月二十四日

修 理

文久三年七月廿五日
（編次を誤れり）

〔五五〇〕 自謙に贈る

過日は登堂之所折あしく御不在不得拜眉遺憾之至に奉存候忽御投簡忙手拜見候へば御痛氣も兎角御勝不被成其上今日は御齒痛にて御平臥とも申事散々に御座候此不揃の季候折角御保慎御座候様奉禱候借又御内話に及び置候留影鏡之義折節小布施門人穀屋岩次郎と申もの参り合せ此もの元來西洋畫法集め居候處此留影鏡にて天地自然の手本を製し之を學び候はゞこれに増し候好手本有之まじくと相考へ達て欲しき趣申出て某迄半金差出し某と藤岡にて取入置藤岡にて所用片附器物閑暇之節借受け度と申事故先前御話も申上置候義に付此段御斷御承知も被下候はゞ當人望に任せ度罷出候處御不在故委細政君へ御話し申未だ御出金も不被下候義に付可相成は其門人の方へ御譲り被下度と申上置候義に御座候ひき然る處其次日も御沙汰無御座名古屋商人も出府を急ぎ候義旁岩次郎に出金致させ道具引取候義に御座候然るに御話行違ひ金子拾五

小山岩次郎
書簡五四三
號参照

圓御持せ被下候所全く前條の次第にて候故先金子は其儘致還壁候三人御乗合も可然と御考御尤に御座候但岩次郎も歸宅不居合候義に付いづれ藤岡兩人と申談し尙其上にて御沙汰可仕候先は忙中拜答まで草々以上

廿五日

大 星拜

自謙 兄 几下

過日の書款印候様被遣遣に奉預候御風呂敷とも一兩日中には是より完璧可申候

文久三年十月九日

〔五五二〕 村上誠之丞に贈る

寒冷追日相加候へども愈御清健に御座候歎御家内様總じて御碍も無御座候耶御安否承度存候借過日は京師御所表御用御座候て可被爲召との御内沙汰を得候に付其段及御吹聴候所御悅御看代被下痛入辱宣謝不罄候専ら用意も致し候所去月下旬に至り最早御用筋無御座候に付被爲召間敷との蒙御沙汰某申に及ばず親戚舊故に至る迄皆安心致し候但し御用をも不相動虚名のみ天府に登聞

候事恐入候義に御座候今度も順老母歸寧の爲明朝出立致させ候に付右御用濟之義幸便に任及報聞候御約束之勸學の長歌并に白櫻花歌認候まゝ致附上候述懐の長歌も認め次第可懸御目候然ば別番カハルレリエキセルシコレグレメント四冊もの千八百五十五年の板近日上田藩より借覽候所此節馬の乘立致し候に大に益を得申候依て其表も穿鑿候所別番之通申來候依て又々御代市被下度御頼申候金子三圓相送候宜しき様希候ガラムマチカセイインタキスの原書有之候はゞ恪二郎ほしがり候間御序に一部御調贈可被下候先は先便の御禮旁如此に御座候霜氣折角御凌可被成候以上

十月九日

象山

村上賢弟

此間兩三日浦町へも御尋申候至極御健にて何よりに御座候別條類毎度辱是も一覽後浦町へ上げ申候左様御承知可被下候

文久三年十月廿三日

〔五五二〕 小林善藏に贈る

續て好霽御同意に存候愈御健勝に御乘立御座候事と致想像候然ば鐵杵漸出來候に付打申度候所蹄うら少々村有之直し申度右御手入も御頼申且杵打付け候御手傳をも相願度候間乍御苦勞今晝後一寸宅まで御出張被下度希候其節乍憚某の口上を御添よく心得候御仲間一人御同伴被下候様御願も千萬所仰御座候以上

十月二十三日

尙々其節蹄庖丁に椎御持參被下様冀申候

小林善藏様

佐久間修理

松代藩の馬醫、清野の人なり

文久三年十月廿四日

〔五五三〕 竹村熊三郎に贈る

鬱陶敷天氣に御座候倍御清健被成御座候耶然ば今晝後小林を倩ひ鐵杵を打ち申度存候處蹄底少々村有之候に付夫を直し候上に仕度蹄を拵候は御仲間喜兵衛功者と申事依て是をも頼み申度小林まで御仲間一人頼度申候義申遣し候事には候へども先生より御一聲被成下様奉願候江戸表にて當節打候は多く雜法

書簡 五五三

一一四七

の様被存杳も至て粗製に御座候某かねて心得候所は荷蘭人の法則にて杳并に釘の製作まで餘程精密なるものにて打候にも一定の法律有之候右等の義御仲間の内氣のきゝ候ものゝ内御心得させ被置候思食御座候はゞ不妨幾人も御見置せ可被成候先は喜兵衛の義相願度まで草々申上候以上

二十四日

春沙先生 几下

大 星 拜

文久三年十一月五日

〔五五四〕 夫人に贈る

長尺のめりやすも何分御頼申候代付遣はされ下され候へば代は後便御送り可申候

御立の節の村上への書状はさだめて直に御届け被下候事と存候所頼みこし候書物只今に参り不申御序も候はゞ御さいそく下されべく候

十六日付の御文相届き御道中御丈夫にて十五日にめて度赤坂へ御つきと承り悦入候御母様へも久々にて御目に御かゝり嘸々御悦とさつし入候次第に時こ

飼猫の名

江月は乗りならしの馬の名

うも寒く相成候御母様御始皆々様御さはりも御座なく候哉御左右委しく承度候爰もといづれも無事に候間御安心被下べく候すゞ至てすこやか去ながら目方は壹貫五十目より餘分には成り不申候江月へも御立後鐵ぐつ打せ申候細かに世話やし打せ候故か至て其打方もよろしくすぐに駈をもゝひ試みその翌日湯田中村迄乗り切に参り一宿いたし歸り候所あせも陸々見候はぬ程にて疲れ候ていなど少しも見え不申候其の節の鞍は御母様より拜借のに御座候八九里の道にあせも見候はぬなどはくらの宜しき故も御座候事と大慶致し候御母様へも其御はなし御申上宜しく御禮御頼申候且先便いそぎ候て御せん別とて御母様より被下候おらんだ鞍おほひ御禮つひ申上ず候哉の様に被存候是も宜く御申上下されべく候京師御用御免に相成候て御はなむけばかり戴き候て恐入候へども又返上も憚り入候事其上珍しき品にて甚有難くも存候故其まゝいただき置候趣返すゞ宜しく御頼申候且御つきにて何かとせはしく候はんに茶並にふし御心がけ被下辱く存候大ぶすゞ大悦の様子夫迄たべ候品たべ申さず其ふしばかりねだり候様子に御座候北山へも茶遣されすぐに相届け申候先

宜しく申置かれ候様にと申事に御座候雪げしき其表いかゞや此地は昨夜一寸ばかり降り申候當年初めての事に候當年は例より雪少く夫故かあたゝかに御座候昨日はちと寒く終日四十度には成り不申三十七八度に候ひき今日は少し暖にて四十四度に候一兩日中玉川一學出立と承り候故御返事迄にあらゞ申遣候御母様御始皆々様へ宜しく御申上下されべく候只今に大阪表より御歸りは無御座候哉御便は度々御座候哉いよゞ御機嫌よく候や是又第一に承り度候めて度かしく

十一月五日認

修理

お順どの

雪のふり候節途中かけ候青きめがねはもし手箱テビの小ひき出しに入り候まゝ其方へは參らず候や今朝入用にて色々さがし候へども見え不申ふと存じ出候へばはり箱のひき出しに入れ候こと度々御座候様存候念の爲尋遣し候御覺の所一寸御申越可被下候

(別紙)

青きめがね其方に御座候はゞうにの箱様のもの第一にわたにつゝみ入れて御送り下されべく候

先頃湯田中へ參り歸りに時雨に逢ひ候て川田よりみのをかり着て返り申候そのみのをかり候迄は例のあらんだむちうてにかけ置候所十四五町も參り候所にて心付候へばひち無之折節夕ぐれには及び人の往來もしげく候故返り尋ね候ても埒あき申まじくぞんじ其日は直に戻り翌日又々川田迄乗出したづね候ても知れ申さず所々へ心得させ置候へども今に手に入り不申候其方にてあたひ高く候ても苦しからず候間二本御せんさく下されべく候名は「カルワツツ」御形は「御存じ」の品御せんさく前代料のおほよそわかり候はゞ御申遣し下され度候いか程なりすくに送り置申べく候

お順どの

〔五五五〕 玉川一學に贈る

大雪に候處倍御碍も無御座候歟倍此程は御上途前何かと御多忙に可有御座候

書簡 五五五

一一五一

文久三年十一月七日

處御訪問被下奉謝候折あしく門人共大銃打方の日にて其場へ罷越候はんと申候所故門前にて甚失禮の御應接何とも恐入候事に御座候ひき右申譯御挨拶御暇乞旁昨日御寓棲迄罷出候處折柄御不在不得拜眉遺憾之至奉存候此間馬上にて失禮を致し候に付近日馬上にて得候詩を録し申譯の爲に御慰旁懸御目候はんと昨日持參御取次の衆に相托し置候定て御咲覽被下候義と奉存候革轡をば此方の乗手は面白からぬ様に申候へども屢試候へば殊の外細密之便利有之何分難棄覺候鞍の簡輕にして馬脊に親しく候に至りては尤も易ふべきもの無之候様存候依て某常用之馬は洋裝に相定め候彼詩の出來候所以に御座候御一笑可被下候時に此度御出府に付書狀兩三封御遞致相願度候此長岡藩小林と申は門人に御座候處先頃某從京師被爲召候はんと申に付豚兒可相託もの此近傍に無御座小林の方へ頼度と申遣し候處その爲に態々舍弟を以て承知之義申越し候等の深誼も有之京師之方御免に相成候に就ては段々心配も致し居候義に候へば其事一寸申送り度候へども便利不宜地方故是迄乍存及延引候此度御出府は幸の義御手廣の事にも候へば御着の上午御手數可然様奉託候此雪天御道中

も折角御多愛御座候様所祈御座候以ヒ

十一月七日

佐久間修理

玉川一學様

〔五五六〕夫人に贈る

文久三年十一月十三日

きとは、歸り候に付細々の御文まづ、御母上様御始め彌御機嫌よく入らせられ御兄様にも御歸府早々御用御召にて御軍艦奉行御本役被蒙仰候趣重疊めて度御よろこび申上盡しがたく存參らせ候先は皆々様へ宜く御悦御申上下されべく候御さかな代わざと御目にかけて候是又よろしく頼入候雪ふり候ても此方いづれも相替候事もなく候間御安心可被下候おらんだ馬具の事何かと御手数に候ひき御用人衆へも宜しく御申被下度候此節は無之候へども是迄天竺屋とやらんに御座候は下官のは八兩上官のは二十五兩より三十兩又は十五兩位との事御存じの手許故廿五兩卅兩とのぼり候てはめいわくに存候拾五兩より少し上り候位は何と也致しほしく候間御心がけ置御兄様御手にて相當の品御

調へ御送り被下候様御頼申候先頃御母上様よりはいしやくの御品しかくの
 思しめしと仰せ被下難有候江戸出来の品の品より何となく乗ごゝろよろしく
 常に用ひ申候毎日用候故かちからがは兩方とも切れ候てつくろはせ申候手前
 の品其方にて手に入候へば拜借の品は早速返上いたし申度存候此事も御申上
 置き下されべく候横はまの方山寺丙太郎申候に八兩の馬具有之候と申事故依
 田の方へも頼遣し候所昨日依田も歸り候てかの表にも此節品切れと申事御申
 越の通に候依て考へ候所依田へ頼み候八兩と先頃御母上様御預りの金一枚と
 合せて十五金夫より少し上り候位にて候はゞ手許かくべついたみ不申存候さ
 て御宅の方御さしつかへもなく候へ共御親類内にて親王様御つとめの御方御
 座候ゆゑ御母上様仰せられ候には其御方へとまりに御出居候方宜しくとの事
 甚だ妙と存じ申候何とぞ左様御願ひ被成べく候此方よりまきのに遣し候文並
 に鏡等も御手に届き候よし安心いたし候あけ荷の事心得申候眞樂寺其外も多
 ぜい御やくかいに相成候御禮御母上様御始へ宜しく御申上下されべく候めり
 やす御送り丈長く大慶いたし候のりふし是又辱存候乍去かやうの御心がけは

以來必御無用に可被成尤此方より頼を申候て後に成され候様致し度候其方に
 御出候ても成候たけけんやく成され候様存候此方にて餞べつ上げ候ものへあ
 いさつの事も御申候へども是又不用なる事おもとへのせんべつは此方への付
 合にて其人々の致し候事おもとの御里方へのかゝり合は無之此筋よく御わき
 まへ可被成候めりやすふし等の代として二百疋相送申候御受取下されべく候
 明日便御座候様彌兵衛申候故此程の御返事迄あらゝ申こし候寒させつかく
 御厭ひ成されべく候めて度かしこ

十一月十三日

お順どの おもと

〔五五七〕 夫人に贈る

文久三年十
一月廿七日

文藏常藏歸り候に付細々の御文まづ／＼寒さつよく成り候てもいよ／＼御障
 もなくめて度存候先頃は、歸り候て申候には御兄様御用御めしにて御本役に
 お成り成され候と承り其御悦を申候所此度御文にて委しく承り候へば五日の

御用は御上洛御供御用懸仰せを御蒙り候との事いづれに致せ御苦勞なる御事には候へどもめて度御事に存じまゐらせ候御用多とて御傳言猶よろしく御申上下されべく候先日御申こしの親王様御殿の事は御見合御母様御世話成され候様にとの事のよし御兄様御留守がちに候へば何とぞ思めしに御代りあさち様等とよくく御なれ合ひ御孝行成されべく候松浦の御姉様散々の御様子御療用の御事御尋に付直に別封認め置き候所あやにく幸便無之やうく今晩平林の元作飛さやくに参り候に付夫へ頼み着府次第すぐに届け候様申置候何とぞ御順に御快よく候様ののり申候祐助殿より御心にかけれ何よりの一しな送り被下痛入辱候先宜しく御申置き下されべく候文藏より拾金受取御申越通り北山へ頼みさみの一包取り戻し置候是をも此度送り度存候所元作何か急の飛脚にて持ちものめいわくと申候故カムフルスヒリチヌと遣され候二百疋にて調へ候紙とたばこのみ相送り候去り乍らさももの取戻し置き鼠の用心もよく致し候間御氣遣ひ被成まじく候拾兩の證文は御申越の通り文藏へ返し遣し候左様御承知成されべく候さて又先日御拜領の御時服わた小ざれ御母様より

下しおかれ候て難有存上候猶よろしく御申上下されべく候西洋馬具之事色々御手数辱候先日申こし候通り拾五六兩にて手に入候事に候はゞほしく存候間先達ての金壹枚は其方に御預り置きよき出もの御座候を御きゝつくるひ御とゝのへ下され候様致し度これよりも猶都合致し七八兩御送り置き候様致し可申候さて又よしに成さればよく候に此方めいゝへいろく下され餞別遣し候所々への送りものいづれも御申送通りに取はからはせ申候委しくはてふより可申候鷹の爪出しまみかん御志の程賞くわん致候八田藤岡矢の倉はじめ宜しく申候いづれも恐入候事と申候はた又先達て御母様より御借し下しおかれ候と存候馬具は御兄様より下され候おぼしめしと御申越何と申すべきやうもなく有り難く存候しかし左様にてはあまり痛入候事に御座候下され候と御座候へば御移をあげ候故御借し下され候と仰せられ候趣何とも恐入申候御存じの通屏風は頼まれ候ても認め不申候へども此節の御住居屏風も御入用なるべく候間一そう分認め右の御あいさつに上げ候様可致候近頃馬にかゝり馬の詩多く有之候間馬具下され候御禮に馬上にて得候詩を認め候趣あとへしるし

あけ候はんと考候いかゞに候はんか松田省吾の事も先日豊前参り候に付はなし候所すてに其つもりにて先頃豊前の弟立歸りのせつ五兩の内まづ三兩持せ遣し候趣何とかしばらく見つなぎ候様申候間省吾上り候はゞ其段御申聞かせ下されべく候すゞ至極丈夫御あんじ成されまじく候江月は只今にさし置寒天にても毎日乗り申候昨夕も雪のふり候に七つ過ぎより出かけ岩野村迄参りくれて歸り申候近日あらんだくつの大ぶりなるを見つけ調へ用ひ候所甚宜しく候もんばにてたびとはゞきを拵候て其上にそのくつをはき候へば寒風の中に出て候てもあしあたゝかにて妙に御座候御返事旁めて度かしく

十一月二十七日

お順どの おもと

さむさ折角御いとひ成されべく候カンフル精大なる瓶に入れ上げ可申と存候所はじめにも申候通飛脚にもつ持参致し不申と申事故よんどころなく此小瓶に致し申候以上

たんさくもなくこゝと申事手すきに又々認め送り可申候琴はいよゝ引

寫本原文の
まゝ

取申候参り候ものどもよく鳴り候とてほめ申候

〔五五八〕 夫人に贈る

文久三年十
二月八日

さむさつよく相成候へども御母上様御兄様御はじめ彌御障もあらせられず候哉御左右委しく承り度候松浦御姉様其後はいかゞの御様子にや先便申て上候様の御手あてに成され候事哉夫にても御同へんにや是又委しく承り度候こゝもと相替候こともなく候間御氣遣ひ下されまじく候明日出便御座候故寒中御見舞の印までにきじそば粉さし上申候宜しく御頼申候先頃の御文に遅くも十日頃御供にて御上京と御申こし御座候故此書狀其表着の頃はとて御留守と存わざと書狀は差上不申宜しき様に成され御母様へ御さし上可被下候松代出來のこしの雪一折はおもとへしんじ申候寒さ御見舞のしるしばかりにて候此程先月二十三日附の御文とゞき輝之助持参の書狀御受取上候品々の御あいさつ御申越し承知致候蝶の方へしちの事御申遣し其以前に取出し置すてに其事は先の便に申送り候間御承知と存候此度はよき便に付彌平初右衛門へよく心

得させ上包ずるぶんていねいに致ししみ出て候はぬ様に手あて申付さい領へ相渡し申候江戸着次第早速届け候筈に候間左様御承知成されべく候多分は此状と一同に届き可申候駄ちんも此方にて拂ひ遣し候間左様御心得成されべく候青目がねの事くはしく御申こしかたじけなく存候御覺の通二かいの床の上したんの糸目の硯箱の内に御座候御覺のよきには皆々かんじ入申候先日上田へ参り候節には目がね見え候ゆゑ黒きろの切にてめがね様に拵へかけ候所ずる分間に合ひ候へども何かと不つがふに候ひき此程す阪へは御おぼへにて見出し候故かけて参り候所折節雪後天氣よろしくまばゆき道に候へども日にいさゝかさはり申さず妙に覺候全く御覺のたしかなる故と悦び存候村上より書物一冊調へ送り申候心ざし候騎兵の調練書はいまだ手に入り不申誠之丞も早速に参り御目にかゝり候筈の所御本丸御焼失候て定めて御用多と見え今に罷出不申との事誠に御本丸の御事は恐入候義に存候其表もとかくさうくしく候との事こまり入候時節に御座候御兄様などにも嘸々御しんばいの御事多かるべく御察し申候随分御精密に御用心專一と存じ候事に御座候貝のめざし

澤山に御送り被下辱候アメリカの織物されめづらしく皆目を驚し申候何か面白きものにつくり度考へ居候先日は龍腦も辱候かの品は並方よりは餘程上品の様に存候折々に用ひ候所格別に覺え候江月も此程須阪にて猶しばらく預りくれ候様申候に付春迄さし置候つもりに御座候西洋ぐら鞭とも御心がけ下されべく候先は寒中の御見舞旁申越候皆々様へ宜しく御申上下されべく候尙後便とめて度かしく

十二月八日

お順どの おもと

先便被遣候品々大低遣し申候委細はてふより可申候小じまやの書付御受取下されべく候

〔五五九〕 相澤藤吾に贈る

御下屋敷内修理御門弟の御方足並稽古被成候爲に當年より拜借の御地所御年貢の義此間御別紙を以て被仰下承知仕候則致上納候御受取被下度奉存候扱又

安政二年十月十四日
（か）
 編次を誤れ

當春中修理拜借罷在候御圍内ふたおもて並杉生垣拔取等の義主米様より御談事御座候に付夫々申付手入致させ其御屋敷よりも植繼の櫻數本持運ばせ植付致し又修理御懇意に仕候方よりも三四本もらひ寄せ植込其外櫻の邪魔に成候茅の根を掘取り南御屏際杉の木伐取らせ候等の義は修理拜借罷在候御圍内の義に付修理手内にて諸拂仕候覺悟に御座候但し拔取候生垣の杉并にふたおもてをば御下屋敷御總境の東御屏の北の方御屏並に是迄のくね除き其所へ植込み生垣に被遊度と是又御談事御座候に付其通仕らせ候義に御座候是は御總境の義にて修理拜借の所に預り不申候へば御屋敷にて御拂被遣可然と奉存候其節右心得に罷在候に付一同に拂方は仕候へども受取切手別に仕らせ差置候間此度御手許迄御廻し申候右を以て此方へ貳分貳朱と六百文被遣可被下候春中右拂方致し候節の總高の切手も爲念掛御目候御一覽後御返し可被下候以前より御建被置候四阿屋も屋根盡く零落當年梅雨前手を入れず候へば屋根裏までも痛み可申と申事に付是も四月はじめ葺直させ申候是は御構内の義に付修理手にて修復仕候心得に御座候乍去以前より御有來りの御建物故に右修復入費

切手掛御目候是又御一覽後御戻可被下候其外主米様迄及御内談取立候紅雨庵長春芟等は全く修理一己の慰より出て御圍中に一時拜借罷在候跡を残し候爲めの心得に付費用等の事勿論御目にもかけ不申候取込中用事のみ草々如此に御座候以上

御年貢は使の者に壹分貳朱爲持差上候間乍御手数數御勘定御受取可被下候
十二月十四日
佐久間修理内
荒井嘉右衛門

望月主水様御内

相澤藤吾様

文久三年十二月十六日

〔五六〇〕 夫人に贈る

つゞいて寒さつよく候へども御母上様御はじめ彌御きげんよくいらせられ候哉おもとにも御替りも御座なく候歟承度候此方何もさほりもなく候間御氣遣被下まじく候左様に候へば今日田中力馬修業に其表へ出立いたし候右に付き

書簡 五六〇

一一六三

さし向御頼申度こと御座候此方うゑぼうさうのたねなくなり上田須阪にも無
 之小むろに申遣し取よせ候へどもつきかね申候依て赤阪の種痘所へむしんよ
 きたね三五粒御もらひ受け早速御送り下され度候方々より頼み御座候へども
 種これなく候故手をつかね居申候赤阪の種痘所へは山田兵衛出府の節たづね
 候て此方よりむしん申遣し候へば何時にても遣し可申との事のよし乍去此方
 より態々書状さし越し候も手敷の事夫よりは御兄様御口上を以て也いづれ也
 可然様御頼申候此百疋其まゝ御遣しにても又は菓子折にても御遣可被下候と
 も是又宜く御はからひ下されべく候先は取いそぎ用事のみ早々めて度かしく
 十二月十六日

お順どの おもと

すゝ至てすこやか目方壹百廿々に成り申候

(別紙)

先達ても珍らしきアメリカの小切下され此度も又初めて見候されども色々被
 下目を驚し候事淺からず辱存候一冊にとぢ候ばかの方のしま本様のものと被

存候かのうすものはかの方にて何に仕立候ものや御存じに候はゞ御申遣し可
 被下候

〔五六二〕 夫人に贈る

文久三年十
 二月廿四日

又かぢ町はらひ去暮十兩の外別紙書付の通壹兩餘に相成申候其分もし御い
 ただきに成候はゞ其内にて馬具御送りの節の上は箱並にだちん御拂可被下
 候

此地立春の後續いてさむさつよく毎朝二十一二度に御座候其御地いかがや御
 母様御はじめいよく御きげんよくいらせられ候やおもにも何のおさはり
 も御座なく候か此方いづれも無事御安心下されべく候馬は此かんきにもいと
 ひ不申まい日のり申候此節にては大分よく相成候あしのこむらにてあし候と
 早く成り申候そのわざ恪二郎にも出来候様に相成候此程はあらんだむち御送
 り下され辱其以來毎日用ひ申候大につがふ宜く候代料何程にや御申越下され
 べく候此間はむちばかりにて御文はなく候ひき定めてむちばかり遣はされ候

ことゝ存候なくし候むち色々詮議いたし候へども只今に御上落も御のび此下旬に成候よしに承り候御兄様御用多御さつし申候すてに御發船に相成候事や承度候左様候へば歳暮の御祝儀に御肴代わざと差上申候御留守にて候はゞ御母様へ御上げ下されべく候外百疋はあもとへわざと進じ申候御納め下されべく候何かと取込何も春ふかくとめて度かしく

十二月廿四日

修理

お順どの おもと

皆々様へ宜しく御申上下されべく候よかん折角御凌ぎ成されべくねんじ申候兩三日前松田豊前參り此拾兩金省吾へ送り度とて頼み候何とぞ御宅へ御よび寄せ御渡し受取したゝめさせ便の節御送り下され度候其義も松田の頼に御座候眞綿よろしからず候へども母の手拵に候まゝ奥様へさし上度とて持参いたし候今便は飛脚便に無之御普しん方より立候もの有之夫に頼候に付綿は後便送り可申候左様御承知下されべく候以上

文久三年十二月八日
（編次を誤れり）

〔五六三〕 村上誠之丞に贈る

北堂君御不快折角御大事に被成候様祈り申候此節頃御快全に候へば尤も慶賀に候

甚寒之節に候へども愈御多祥に被成御起居候哉御安否委しく承度候此程妻方より申越候には北堂君長々御持病氣に御出被成候由尤も御對し候事にはなく候趣此節如何之御容體にや委細に承度存候爰許いつも不相替健に候御過念被下まじく候然ば此雉子一雙聊か寒候御見舞の印迄御目にかけて候御喉存可被下候借過日は御手簡御頼申置候カハレリータクタイキ一本御代市御送被下辱存候是も用所御座候品に付勿論調置度と存候品さつと一涉候所未卷に至り此節乗立候馬の爲にも差向き心得に相成候事御座候て致大慶候但し著述者の名無之本珍らしく覺候何故に匿名にや心得られず候何か過激の論にても候故かと存候所少しも其様の氣味無之平穩至當の論のみに候然して名をあらはさず候は不審に御座候御役所にて先輩の衆へ御尋御覽可被下候隨分外にも匿名の洋

書御座候事哉心得に致し度候騎兵調練書の目ざし候は別番御書被遣被下候六冊の小本に御座候只今無之とも御心がけ出次第御調被下候様御頼申候過便送り置候金子の残は乍御六借御預置被下度候歩兵調練書も千八百六十年新式御座候よし是又御心がけ置可被下候借其表も猶々騒がしく候趣窮し果て候世の中に御座候夜中などうかと外出も出来かね候様子随分何かと御用心にしくまじく存候某京師之御用御免の事御悦被仰下辱存候某も大安心致し申候此時節の如きは實に一木の支ふる所にあらず高踏して禍に遠り候にしくとなしと存候事に御座候御書中丹後生野の事被仰下候所近日承候へば近き上州にても何か夫に似より候事御座候かのよし誠奇恠の時節に御座候先は先便の御返事寒中御見舞旁如此御座候北堂君令聞へも宜しく御致意可被下候寒威折角御保重可被成候餘留後音

十二月八日

明

村上賢弟

浦町にてもいづれも御替も無御座候よし御安心可被成候

文久三年冬

〔五六三〕 八田慎藏に贈る

雪寒愈御碍も無御座候歟然ば此間は御訪問被下御到来之嘉茗御碾かせられ候て一器の内御惠投乍例御芳情不知所謝奉存候早速點服候所香味とも別段の事にて一時塵腸を洗滌其快不可言候御器をも直に返璧可申處無人彼是稽留恐入候則還納御收可被下候箒も多日相弄し辱御禮難申盡候是又柱も致完趙候御檢納所仰御座候將昨日江府便有之荆婦の許より出立前段々之御禮申述此品とも差上吳候様申遣し候まゝ持せ上候御咲留可被下候餘留面賦

廿一日

大 星拜

子 靜賢友 几下

〔五六四〕 加藤某に贈る

遠方態々御使を以て御投簡被下辱奉謝候先以霜威日々相加候得共被成御揃愈御健勝浣慰の劇奉存候借過日は御城下へ罷出種々預御周旋服佩淺からず奉存

書 簡 五六四

一一六九

候六左へ申付置候太刀の金ものも度々御督責被下候よし是又奉謝候某京師行も去月以來の御模様替にて御沙汰息に相成一身の爲には大安心致候右の次第故に六左の違約稽緩も差支無御座候故是より人をも差遣し不申候處今日態々御人を被勞下右金もの並に會計切手をも遣はし被下御手數の至千萬奉多謝候價不廉の所も御配慮被下辱併し夫はとも角も圖を截り隨分精密にあつらへ候帶取の金もの等圖の如くならず且遣し候圖も返し不申いづれ今一應某罷越候か又は人を以てなり意の如く直させ然る後に代價相拂可申存候六左罷出候はば其段御申聞け圖の分貴家迄御納置被下度奉希候將牛痘種の事も過日相願候所その爲め一方ならず御周旋も被下候よしの詮も無之小諸藩醫員淺識狹見不及是非候次第當今猶其體と申は氣の毒至極に存じ候其様子に候はゞ近日江府の種痘院へ可申遣候是はかねて頼置の義も御座候間善良の種子無相違手に入可申左候はゞ尊藩にも此節右種子拂底にて御醫師衆手を束ね被居候義に候はば手に入次第分ち差出し候様可申候其段香山氏等へは話し置可被下候赤松氏とも御申合せ一日御訪問も被下度候被思食候處此節は學寮御寄宿故御一宿掛

赤松氏は赤
松水谷を謂
ふ歟

の御他行は出来かね候段遺憾之事に御座候某も京師行御沙汰息に相成候に就ては依舊閑散の身に罷在候間其内新式砲御打も候はゞ其模様拜見も致し度左候はゞ尙緩々得拜晤可申候間此方へ強て御出向は御無用に被成可被下候但其新式砲御打試の日限相分候はゞ一寸乍御手數御報聞被下度相願申上候先は段段御周旋被下候御禮拜答旁如此に御座候兩尊大人へ宜しく令弟へも過日初て御目にかゝり是へも可然御致意可被下候

加藤某は上
田藩の人か

加藤 醫 友

啓 拜

附白霜氣折角御保護可被下候六左へも乍憚宜しく先別紙受取切手御渡可被下候

〔五六五〕 竹村金吾に贈る

文久三年か

續て凝寒に御座候御眠食何似被成御座候耶奉伺候然者此一隻菲薄之至御座候へども聊歳敬之印迄呈上仕候誠以心計り御晒存奉仰候以上

十二月念四
書 簡 五六五

附白刀革多く拜借仕難有奉多謝候乍序返壁申上候近日雪中走馬詩二首御座候御博祭迄に録往仕候

不須僵臥學高賢豪興難留座綱韃蒼虬直入玉城去恍覺仙門在眼前

吟鞍極目白嶺岫平野渺茫千里寬飲來已有十分酒拂面瓊塵不甚寒

竹村先生 臺下

啓 拜

文久三年

〔五六六〕 八田慎藏に贈る

過日は御惠訪被下感幸之至然ば明日近在門人の方へ牡丹看に参り候約束御座候御閑暇にも候はゞ御誘引申度候いかゞ候はんや御差支もなく候はゞ朝餐後御案内可申候否御口答可被下候以上

廿七日

大 星 拜

澹庵賢友

文久三年

〔五六七〕 八田慎藏に贈る

快霽御同意に存候然ば今夕は寵招に任せ家内ども一同罷出緩々得拜晤可申相樂候偕は此兩種不腆の至候へども土産の印迄致呈覽候御晒存可被下候以上

七日

大 星 拜

澹庵賢友

文久三年

〔五六八〕 八田慎藏に贈る

過刻御惠借被下候徒然草致完趙候御查入可被下候はうめんの事外より被問候所其説を忘れ候故一寸注本拜借を乞ひ候義に御座候御蔭にて早速に相分り大慶仕候尙拜面御禮可申述候將大慧語録御所持御座候や否御座候はゞ暫時御許借奉希候若御藏本に無之候とも淨福寺などには可有之候差當り見合せ度事御座候間乍御面倒御問合御借寄被下度奉頼候萬所禱に御座候以上

即刻

修 理

慎 藏 様

文久三年か

〔五六九〕 八田慎藏に贈る

上置候三魚堂大全見合せ度所數條有之候間御六ヶしながら御擲返被下度候用
向濟次第御入用に候はゞ又々上げ可申候以上

廿六日

又白一齋先生之朱評有之候拙作之望岳賦草稿儘か上げ置候かと相心得候是
も御座候はゞ御序御返し可被下候先生之評語有之候故失ひ度無之候間如此
御座候也

慎 藏 様

修 理

文久三年か

〔五七〇〕 八田慎藏に贈る

只今御蒸薬の御道具拜見候所薬汁多き方可宜と奉存候依て包外之四貼は二貼
を一貼に合せ候間水三合を以二合に御煎じ被成可然候度々一ツ薬にて御蒸し
候ては薬氣減じ候間兩度位にて必ず御取替可被成候以上

即 刻

修 理

口 上

文久三年か

〔五七一〕 八田慎藏に贈る

兎角快霽に至りかね候愈御無恙御座候歟此程は暑候御尋とて良薬澤山に御
投惠被下乍毎度御芳志服佩淺からず雖然甚痛入候御事に御座候將魯公謝恩三
表一寸見合申度御無心申候處早速御示し被下是亦不勝銘謝候見合せ候に果し
て別刻に御座候某新收の本は道光丁亥の刻にて吳郡石韞武と申もの、跋文有
之候其跋の趣にてはこの雙鉤舊本を得て珍重候故に急て石に上せ天下に公に
し候もの、よし左候へば御惠示の刻は其後の幕勒にも候歟字も少し太めに見
え申候新收本今日御目にかけて度候所跋文を認め候爲に此節装工を呼寄せ手を
入させ居候に就き其義に能はず先此帖のみ及返璧候御接收可被下候以上

四 日

大 星 拜

子 静 賢 友

書 簡 五七一

一一七五

元治元年正月十二日

〔五七三〕 夫人に贈る

去暮廿七日御上洛の御供にて御きげんよく御發船と承りめて度存上候右の御悦も御母様はじめよろしく御頼申候

初春の御よろこび目出度申納候御母上様御はじめ御揃ひ御きげんよく御年越しかぎりなく祝ひ上まゐらせ候こゝも何事なく春へうつり候間御安心下されべく候春の文もとくに上げ度と存候所よき便なく今日迄延引いたし左様候所明後夕近邊の高久出立と承り此文したゝめかけ候折から十二月朔日夜同五日同廿四日の御文一度に相届きいよ／＼御さはり御座なく候事並に御姉様にも大分御快く御成御安心と申御事承り何よりと存じまゐらせ候何とぞ御順に御快方成され候様いのり申候カムフルスヒリ御母様御よろこびと御申し大慶致し候其方にてせいし御不都合に候はゞ御申越成されべくいつにても拵へ上げ申べく候藤三郎の事おさち様おとりもち段々御世話下され候との事宜しく御禮御申下されべく候北山へも左様申候所大よろこび是又よく／＼御禮申

度と申事に御座候先便去冬の西洋むち届き候に付御とゝのへ下され候事と存じ候て夫だけの御あいさつ申候所右は近日神奈川にて御兄様御到來の品を直に下され候と申御事何ともまいど恐入候事に御座候其上御移差上申さず候様にとの思食のよし殊さら痛入奉り候永く秘藏且調法いたし候事能々御禮御申上下されべく候小太様よく色々御けいこ成されいづれも能御出来と申事かんしんいたし候さて又寒中御見舞としてさけのり又おさち様よりも珍らしきみかんのり御送り下され此節御用多の御中に御心にかけれ下され候事難有宜しく御禮御頼申候おさち様へは恪二郎よりも御禮申候はづに御座候乍去おもとより尙よろしく御申下されべく候御殿の方延引成され候て大の禍御のがれ候と御申し誠に幸と存候皆運次第のものと存じ申候目をも杉田に御見せ候所しか／＼申候よし何とぞ其申通に成され御養生成されべく候今一所の事はいかゞに候哉多分は手だんあるまじくと存候杉田弟子松田弟の事心得申候金子の事もすてに大晦日の便に其表宇しき迄むけ御宅迄届け呉候様に頼遣し候定て只今頃は届き當人にも御渡し被下候事と存候御返事待居申候榮八度々上